

福岡市

吉武遺跡群

—市道野方金武線建設に伴う埋蔵文化財の調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第187集

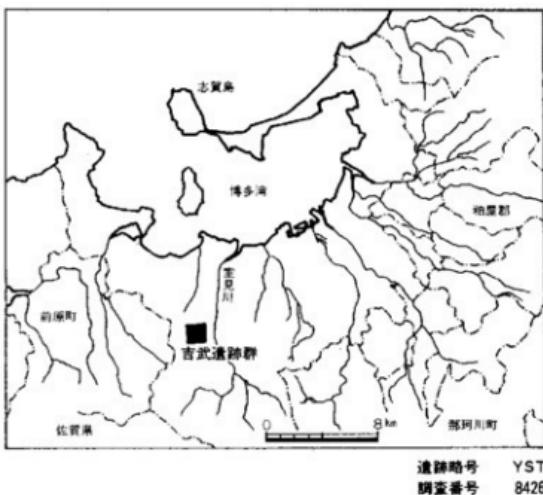
1988

福岡市教育委員会

福岡市
吉武遺跡群

—市道野方金武線建設に伴う埋蔵文化財の調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第187集



1988

福岡市教育委員会



脚台付注口付壺 1号祭祀土壤出土

序 文

福岡市西部の室見川左岸台地一帯には、先人達の残した文化遺産が数多く分布しています。

福岡市では、人口の増加に伴って、昭和57年に5区から7区に分区され、室見川以西が西区になりました。分区に伴って、基幹道路整備が急務となり、野方から吉武まで改良および新設が実施されることになりました。

事業予定地内には、埋蔵文化財の包蔵地が数箇所存在していました。工事によってやむなく消滅するこれらの埋蔵文化財については、事前に記録保存の実施が必要になり、昭和59年度は、吉武遺跡群の一角を発掘調査いたしました。

発掘調査の結果、弥生時代の甕棺墓、古墳時代の建物や溝、古式須恵器などがたくさん出土しました。

本書は、これら発掘調査の成果を収録したものです。本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解、さらには学術研究上役立つことができれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際し、土木局の関係者、飯盛・吉武土地改良組合、地元作業員の方々をはじめ、発掘から整理報告まで、多くの皆様方のご理解とご協力を賜わりましたことに対し、心より感謝の意を表する次第であります。

昭和63年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が1985年3月26日から5月31日にかけて実施した市道野方・金武線新設に伴う、第2次の事前発掘調査（吉武遺跡群）報告書である。
2. 遺構の呼称は記号化し、堀立柱建物→S B、土墻SK、溝→SD、石組造構→SXとした。遺構番号は記号のあとに順番に続けた。
3. 本書に掲載する遺構実測図は、調査担当者の他に、田中克子、緒方俊輔、矢野健一、岩本陽児が行なった。
4. 遺物実測図は、調査担当者の他に、常松幹雄、田中克子、尹 壱、池田裕司、大橋隆司、長家 伸、大嶺佳之、松尾和浩、大岡弘明、尾崎利一、樋口宏樹が作成した。また、製図は調査担当者の他に、井沢洋一、常松幹雄、大橋隆司が協力した。
5. 本書に掲載する遺構・遺物写真是、調査担当者が撮影した。
6. 本書で用いる遺構図の方位は全て磁北である。
7. 本報告書に係る遺物、記録類（図面、写真、スライドなど）は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理されるので活用されたい。
8. 本書の執筆・編集は、横山と下村が行なった。

本文目次

| | |
|----------------------|-----|
| Iはじめに..... | 1 |
| 1 調査に至る経過..... | 1 |
| 2 調査組織..... | 1 |
| 3 吉武遺跡群とこれまでの調査..... | 2 |
| II立地と環境..... | 5 |
| III調査の記録..... | 11 |
| 1 墓 棺 墓..... | 12 |
| 2 祭祀土壙..... | 85 |
| 3 その他の遺構..... | 95 |
| (1) 握立柱建物..... | 95 |
| (2) 石組遺構..... | 96 |
| 4 調査区出土の遺物..... | 97 |
| IVまとめ..... | 107 |

図 版 目 次

- P L. 1 調査区周辺航空写真
- P L. 2 (1) 調査区全景 (南から)
(2) 調査区近景 (西から)
- P L. 3 (1) K 01 墓棺墓出土状況 (西から)
(2) K 02 墓棺墓出土状況 (北から)
- P L. 4 (1) K 03 墓棺墓出土状況 (北から)
(2) K 05 墓棺墓出土状況 (北から)
- P L. 5 (1) K 06 墓棺墓出土状況 (西から)
(2) K 07・08・28 墓棺墓出土状況 (西から)
- P L. 6 (1) K 09 墓棺墓出土状況 (南から)
(2) K 10 墓棺墓出土状況 (西から)
- P L. 7 (1) K 11~13 墓棺墓出土状況 (東から)
(2) K 15 墓棺墓出土状況 (北から)
- P L. 8 (1) K 16 墓棺墓出土状況 (北から)
(2) K 17 墓棺墓出土状況 (北から)
- P L. 9 (1) K 18 墓棺墓出土状況 (北から)
(2) K 19 墓棺墓出土状況 (西から)
- P L. 10 (1) K 20 墓棺墓出土状況 (東から)
(2) K 21~23 墓棺墓出土状況 (北から)
- P L. 11 (1) K 23 墓棺墓出土状況 (西から)
(2) K 09・24・25 墓棺墓出土状況 (北から)
- P L. 12 (1) K 26 墓棺墓出土状況 (北から)
(2) K 27 墓棺墓出土状況 (北から)
- P L. 13 (1) K 28 墓棺墓出土状況 (西から)
(2) K 29 墓棺墓出土状況 (北から)
- P L. 14 (1) K 30 墓棺墓出土状況 (北から)
(2) K 31 墓棺墓出土状況 (北から)
- P L. 15 (1) K 32 墓棺墓出土状況 (南から)
(2) K 33 墓棺墓出土状況 (東から)
- P L. 16 (1) K 34 墓棺墓出土状況 (東から)

- (2) K 34～37壺棺墓出土状況（西から）
- P L . 17 (1) K 37壺棺墓出土状況（西から）
 - (2) K 38壺棺墓出土状況（北から）
- P L . 18 (1) K 40・53壺棺墓出土状況（東から）
 - (2) K 41壺棺墓出土状況（北から）
- P L . 19 (1) K 42壺棺墓出土状況（北から）
 - (2) K 43壺棺墓出土状況（北から）
- P L . 20 (1) K 44壺棺墓出土状況（西から）
 - (2) K 46壺棺墓出土状況（西から）
- P L . 21 (1) K 47壺棺墓出土状況（西から）
 - (2) K 48壺棺墓出土状況（北から）
- P L . 22 (1) K 49・51壺棺墓出土状況（南から）
 - (2) K 50壺棺墓出土状況（北から）
- P L . 23 (1) K 52壺棺墓出土状況（北から）
 - (2) K 54壺棺墓出土状況（北から）
- P L . 24 (1) K 56壺棺墓出土状況（北から）
 - (2) K 57壺棺墓出土状況（南から）
- P L . 25 (1) K 58壺棺墓出土状況（東から）
 - (2) K 59壺棺墓出土状況（東から）
- P L . 26 (1) K 60壺棺墓出土状況（南から）
 - (2) K 61壺棺墓出土状況（西から）
- P L . 27 (1) K 62壺棺墓出土状況（北から）
 - (2) K 63壺棺墓出土状況（北から）
- P L . 28 (1) K 64壺棺墓出土状況（東から）
 - (2) K 66壺棺墓出土状況（北から）
- P L . 29 (1) K 67壺棺墓出土状況（北から）
 - (2) K 68壺棺墓出土状況（北から）
- P L . 30 (1) K 69壺棺墓出土状況（南から）
 - (2) K 70壺棺墓出土状況（南から）
- P L . 31 (1) K 71壺棺墓出土状況（東から）
 - (2) K 73壺棺墓出土状況（北から）
- P L . 32 (1) K 74壺棺墓出土状況（東から）
 - (2) K 76壺棺墓出土状況（南から）

- P L. 33 (1) K 77 銃棺墓出土状況（南から）
(2) 1号祭祀土壙出土状況（西から）
- P L. 34 (1) 2号祭祀土壙出土状況（東から）
(2) 3号祭祀土壙出土状況（東から）
- P L. 35 (1) S X 01 石組遺構出土状況（東から）
(2) S B 01 捩立柱建物出土状況（北から）
- P L. 36 K 01・K 02 銃棺
- P L. 37 K 05・K 06 銃棺
- P L. 38 K 08・K 12 銃棺
- P L. 39 K 13・K 15・K 16・K 17 銃棺
- P L. 40 K 18・K 19 銃棺
- P L. 41 K 20・K 21 銃棺
- P L. 42 K 23・K 25 銃棺
- P L. 43 K 26・K 28・K 29 銃棺
- P L. 44 K 30・K 32・K 33・K 34 銃棺
- P L. 45 K 35・K 36 銃棺
- P L. 46 K 37・K 40・K 41 銃棺
- P L. 47 K 42・K 43・K 44 銃棺
- P L. 48 K 46・K 47 銃棺
- P L. 49 K 48・K 49 銃棺
- P L. 50 K 53・K 54 銃棺
- P L. 51 K 56・K 57 銃棺
- P L. 52 K 60・K 62 銃棺
- P L. 53 K 63・K 64 銃棺
- P L. 54 K 68・K 70・K 76 銃棺
- P L. 55 K 73 銃棺
- P L. 56 K 04・K 07・K 09・K 10・K 11 銃棺
- P L. 57 K 23・K 24・K 27・K 31・K 33 銃棺
- P L. 58 K 39・K 50・K 52・K 59 銃棺
- P L. 59 K 61・K 65・K 66・K 67・K 75・K 77 銃棺
- P L. 60 1～3号祭祀土壙出土土器

挿 図 目 次

| | | |
|---------|------------------------------|--------|
| Fig. 1 | 周辺遺跡群分布図 | 3 |
| Fig. 2 | 遺跡群位置図 (1/50,000) | 7 |
| Fig. 3 | 吉武壺棺群調査区位置図 (1/1,000) | 8 |
| Fig. 4 | 調査地点図 | 9 |
| Fig. 5 | 遺構配置図(1) (1/100) | (折り込み) |
| Fig. 6 | K 01・02壺棺墓出土状況図 (1/30) | 13 |
| Fig. 7 | K 01・02壺棺実測図 (1/12) | 14 |
| Fig. 8 | K 05・06壺棺墓出土状況図 (1/30) | 15 |
| Fig. 9 | K 05・06壺棺実測図 (1/12) | 17 |
| Fig. 10 | K 08・12壺棺墓出土状況図 (1/30) | 18 |
| Fig. 11 | K 08・12壺棺実測図 (1/12) | 19 |
| Fig. 12 | K 13・15壺棺墓出土状況図 (1/30) | 20 |
| Fig. 13 | K 13・15壺棺実測図 (1/12) | 21 |
| Fig. 14 | K 16・17壺棺墓出土状況図 (1/30) | 22 |
| Fig. 15 | K 16・17壺棺実測図 (1/12) | 23 |
| Fig. 16 | K 18・19・20・21壺棺墓出土状況図 (1/30) | 24 |
| Fig. 17 | K 18・19壺棺実測図 (1/12) | 26 |
| Fig. 18 | K 20・21壺棺実測図 (1/12) | 27 |
| Fig. 19 | K 23・25壺棺墓出土状況図 (1/30) | 28 |
| Fig. 20 | K 23・25壺棺実測図 (1/12) | 29 |
| Fig. 21 | K 26・28壺棺墓出土状況図 (1/30) | 30 |
| Fig. 22 | K 26・28壺棺実測図 (1/12) | 31 |
| Fig. 23 | K 29・30壺棺墓出土状況図 (1/30) | 32 |
| Fig. 24 | K 29・30壺棺実測図 (1/12) | 33 |
| Fig. 25 | K 32・33・34・35壺棺墓出土状況図 (1/30) | 34 |
| Fig. 26 | K 32・34壺棺実測図 (1/12) | 35 |
| Fig. 27 | K 33・35壺棺実測図 (1/12) | 36 |
| Fig. 28 | K 36・37壺棺墓出土状況図 (1/30) | 37 |
| Fig. 29 | K 36・37壺棺実測図 (1/12) | 38 |
| Fig. 30 | K 40・41壺棺墓出土状況図 (1/30) | 39 |

| | | |
|---------|------------------------------------|----|
| Fig. 31 | K 40・41壺棺実測図 (1/12) | 40 |
| Fig. 32 | K 42・43壺棺墓出土状況図 (1/30) | 41 |
| Fig. 33 | K 42・43壺棺実測図 (1/12) | 42 |
| Fig. 34 | K 44・46壺棺墓出土状況図 (1/30) | 43 |
| Fig. 35 | K 44・46壺棺実測図 (1/12) | 44 |
| Fig. 36 | K 47・48壺棺墓出土状況図 (1/30) | 45 |
| Fig. 37 | K 47・48壺棺実測図 (1/12) | 46 |
| Fig. 38 | K 49・51壺棺墓出土状況図 (1/30) | 47 |
| Fig. 39 | K 49・51壺棺実測図 (1/12) | 48 |
| Fig. 40 | K 53・54壺棺墓出土状況図 (1/30) | 49 |
| Fig. 41 | K 53・54壺棺実測図 (1/12) | 50 |
| Fig. 42 | K 55・56・57壺棺墓出土状況図 (1/30) | 52 |
| Fig. 43 | K 55・57壺棺実測図 (1/12) | 53 |
| Fig. 44 | K 56壺棺実測図 (1/12) | 54 |
| Fig. 45 | K 58・60壺棺墓出土状況図 (1/30) | 55 |
| Fig. 46 | K 58・60壺棺実測図 (1/12) | 56 |
| Fig. 47 | K 62・63壺棺墓出土状況図 (1/30) | 57 |
| Fig. 48 | K 62・63壺棺実測図 (1/12) | 58 |
| Fig. 49 | K 64・68壺棺墓出土状況図 (1/30) | 59 |
| Fig. 50 | K 64・68壺棺実測図 (1/12) | 60 |
| Fig. 51 | K 70・73壺棺墓出土状況図 (1/30) | 61 |
| Fig. 52 | K 70・73壺棺実測図 (1/12) | 62 |
| Fig. 53 | K 74・76壺棺墓出土状況図 (1/30) | 63 |
| Fig. 54 | K 74・76壺棺実測図 (1/12) | 64 |
| Fig. 55 | K 03・04・07・10壺棺墓出土状況図 (1/20) | 66 |
| Fig. 56 | K 03・07・10壺棺実測図 (1/8) | 67 |
| Fig. 57 | K 09・11・14壺棺墓出土状況図 (1/20) | 69 |
| Fig. 58 | K 09・11・14壺棺実測図 (1/8) | 70 |
| Fig. 59 | K22・24壺棺墓出土状況図 (1/20) | 71 |
| Fig. 60 | K 22・24壺棺実測図 (1/8) | 72 |
| Fig. 61 | K 27・31・38・39壺棺墓出土状況図 (1/20) | 73 |
| Fig. 62 | K 27・31・38・39壺棺実測図 (1/8) | 75 |
| Fig. 63 | K 45・50・52壺棺墓出土状況図 (1/20) | 77 |

| | | |
|---------|--------------------------------------|--------|
| Fig. 64 | K 50・52壺棺実測図(1/8) | 78 |
| Fig. 65 | K 59・61・65・66・67壺棺墓出土状況図(1/20) | 80 |
| Fig. 66 | K 59・61・65・66・67壺棺実測図(1/8) | 81 |
| Fig. 67 | K 69・71・75・77壺棺墓出土状況図(1/20) | 83 |
| Fig. 68 | K 69・75・77壺棺実測図(1/8) | 84 |
| Fig. 69 | 1～3号祭祀土壙出土状況図(1/20) | 87 |
| Fig. 70 | 1号祭祀土壙出土土器実測図(1/3) | 88 |
| Fig. 71 | 2号祭祀土壙出土土器実測図(1/3) | 90 |
| Fig. 72 | 3号祭祀土壙出土土器実測図(1/3) | 92 |
| Fig. 73 | S B01建物出土状況図(1/50) | 96 |
| Fig. 74 | 遺構配置図(2)(1/100) | (折り込み) |
| Fig. 75 | S X01石組遺構出土状況図(1/40) | 97 |
| Fig. 76 | 調査区出土遺物実測図(1)(1/2) | 99 |
| Fig. 77 | 調査区出土遺物実測図(2)(1/2) | 101 |
| Fig. 78 | 調査区出土遺物実測図(3)(1/2) | 103 |
| Fig. 79 | 調査区出土遺物実測図(4)(1/2) | 105 |
| Fig. 80 | 壺棺時期別構成図(1)(中期中葉) | 109 |
| Fig. 81 | 壺棺時期別構成図(2)(中期後半) | 110 |
| Fig. 82 | 壺棺時期別構成図(3)(後期初頭) | 111 |

表 目 次

| | |
|----------------------------------|----|
| Tab. 1 吉武遺跡群調査一覧表 | 4 |
| Tab. 2 野方・金武線第2次調査出土甕棺墓一覧表 | 93 |

I はじめに

1 調査に至る経過

福岡市では、人口増加に伴なって、これまでとってきた5行政区の内、西区を昭和57年に西区、早良区、城南区に分区し、7行政区とした。分区に伴なって道路整備が急務となり、土木局道路計画課では、金武から野方までの道路新設・改良が計画された。教育委員会では、計画路線内に羽根戸原C遺跡群、太田遺跡、古武遺跡群、七反田遺跡、金武城田遺跡が分布していることが分っており、遺跡はさらに拡大することが予想された。そこで、昭和57年度から現地踏査および試掘調査を実施し、昭和57年度は、金武城田遺跡と、都地小学校西側のアドウ畑を行なった。金武城田遺跡では奈良時代の造構群、都地小学校西側では甕棺群が分布することが明らかとなり、都地遺跡が拡大する様相がみられた。そこで、土木局道路計画課と遺跡の取り扱いについて協議をかさね、やむなく破壊されるものについては、年次計画で道路整備の事前に調査を実施することになった。

発掘調査は、昭和58年度に金武城田遺跡と都地遺跡から開始された。吉武遺跡群の一部（今回報告分）については昭和59年度に発掘調査を行なったものである。吉武遺跡群を含む大字飯盛・吉武地区は土地改良組合によって圃場整備が進められている地域である。道路予定地の隣接地も圃場整備事業に先立って発掘調査を行ない、連続する甕棺墓群、占墳群、古墳時代の掘立柱建物群などの遺構が出上している。隣接地の発掘結果から、野方・金武線道路予定地にも同様の遺構が続くと考えられたので、圃場整備調査区が終了した後、引き続いて発掘を実施した。その後は、昭和60年度の羽根戸原C遺跡の調査、61年度には七反田遺跡と太田遺跡、都地遺跡、62年度は太田遺跡と吉武遺跡群の道路予定範囲内の調査を実施した。

| 遺跡調査番号 | 8426 | | 遺跡番号 | Y S T | |
|--------|------------------------|--------|--------------------|---------|--------------------|
| 調査地 地籍 | 西区大字吉武字三十六146外 | | 分布地図番号 | 093-A-7 | |
| 開発面積 | 3200m ² | 調査対象面積 | 3200m ² | 調査実施面積 | 2300m ² |
| 調査期間 | 1985(昭和60)年3月26日～5月31日 | | 事前審査番号 | 公 57-48 | |

2 調査の組織

野方・金武線第2次調査として実施した古武遺跡群の調査は、本市の土木局道路計画課の令達事業として行なったものである。調査組織は次頁のとおりである。

I はじめに

調査委託：福岡市土木局道路計画課・西区土木農林課

調査主体：福岡市教育委員会文化部文化課（現埋蔵文化財課）

調査総括：文化課長 生田征生（前任）埋蔵文化財課長 柳田純孝 埋蔵文化財第1係長 柳田純孝（前任）埋蔵文化財課第1係長 折尾 学

調査庶務：岡崎洋一（前任）岸田 隆

調査担当：横山邦継 下村 智

調査補助：田中克子 矢野健一（京都大学学生）岩本陽児（九州大学学生、現大学院生）緒方俊輔（奈良大学学生 現太宰府市教育委員会）

整理補助：池田裕司 オ 優 長家 伸（以上九州大学）松尾和浩 大間弘明（西南学院大学）高橋健二（別府大学）大橋隆司 大嶋佳之 楠口宏樹 尾崎利一

整理作業：池田由美 潤 良子 陳 雅文 溝口博子 松尾絹代 安野 良 楠口久子 松尾真澄 前田喜代美

発掘作業：村本健二 青柳貴子 青柳弘子 池田由美 井上カズコ 井上喜美子 井上清子
井上千代子 井上トミ子 井上ヒデ子 井上ムツ子 鬼尾喜代子 岸田 浩 清
末シズエ 倉光京子 倉光千鶴子 倉光信子 倉光初江 小柳和子 柴田タツ子
柴田春代 白坂フサヨ 潤 良子 高松美智子 筒井ひとみ 富崎栄子 富田マ
チ子 富永ミツ子 永井鈴子 中島栄子 平田美絵子 宮原富代 宮崎泰子 矢
富富士子 柳井順子 佛浦八重子 山口タツエ 結城千代子 横溝忠美子 横溝
カヨ子 横溝チエ子 脇坂マキノ 木村厚子 上斐崎つや子 花畠照子 井上磨
智子 斎藤国子 富崎フミ子 西山秀子 吉積ミエ子 松山定美 川口シゲノ
坂田セイ子 萩田常人 高田マサエ 舟川春江 松尾鈴子 山本キクノ 山田ト
キエ 横田松ノ 平田千鶴子 松尾キミ子 宮永鶴子 山下アヤコ 溝口武司
沖 浩人 池田 宏 山下清作 平川謙一 吉岡勝美 池 繁一郎 北蘭 論
小路永智明 藤嶋博明 甲斐美佐江 小林ツチエ 田中カヨコ 原ハナエ 松本
育子 森山早苗 吉竹早苗 堀尾久美子 脇山喜代子

この他、調査にあたっては、道路計画課、西区土木農林課、農業土木課、飯盛・吉武土地改良組合および地元の方々のご理解とご協力を頂いた。

また、報告書作成にあたっては 埋蔵文化財課 二宮忠司 井沢洋一 常松幹雄の各氏には
堺館の接合、実測、製図などのご協力を賜わった。四箇田事務所の臨時職員の方々にも堺館の
接合で多大な援助を頂いた。記して感謝の意を表する次第です。

3 吉武遺跡群とこれまでの調査

室見川左岸の飯盛山からなだらかに伸びる広大な扇状地一帯を、福岡市文化財分布地図では

3 吉武遺跡群とこれまでの調査

吉武遺跡群として範囲を囲っている。面積は40haを越え、周辺は広々とした田園が広がっている。昭和56年から一帯の圃場整備事業が進められ、また田・飯盛塚や野方・金武線などの基幹道路新設が具体化され、事前調査としてこれまで11次の発掘調査を実施している。

吉武遺跡群は、1978年度に作成した福岡市文化財分布地図（西部1）に範囲と名称が記載されている。小河川や地形的な高低、遺物の分布状況から線引が行なわれた。隣接遺跡は北側が日向川を挟んで太田遺跡と羽根戸原C遺跡、南側が谷川を挟んで高木遺跡群、七反田遺跡、都城地城地となっている。

圃場整備に伴う発掘調査は面積が広く、遺構を面的な広がりで捉えることができる。これま



Fig. 1 周辺道路群分布図

- A-2 篠塚太田遺跡群
- A-10 吉武遺跡群
- (A-12) (高木遺跡群)
- A-14 大北遺跡群
- B-3 稲庭古墳

【はじめに】

で圃場整備事業だけでも11haの発掘調査を実施している。このため遺跡の呼称について混乱が生じてきた。

吉武遺跡群は、ほぼ中央部東西方向に大字境が存在する。北側では大字飯盛、南側は大字吉武である。圃場整備の第1次、第2次調査区、田・飯盛線道路調査区は大字飯盛で、「飯盛遺跡」と呼称した。第3次調査からは大字吉武にはいるが、遺構の連続性から「飯盛遺跡」の範囲で考えた。圃場整備第4次調査区の中心部は、分布地図では「高木遺跡群」となっている。谷川をへだてた南側にあるが遺構は連続する。混乱をさけるために「吉武遺跡群」の範囲に含めることにし、「高木遺跡群」という名称は削除した。また、第4次調査の東端部は分布地図では「高木堀柵遺跡」という範囲が二重に表示されている。ここから青銅器や玉類を発見した堀柵墓・木棺墓が発見されたので、ここには「吉武高木遺跡」という名称を与えた。報道では、「飯盛高木遺跡」、「吉武飯盛遺跡」、「飯盛遺跡」などの名称が使用され、あたかも違う遺跡のように受け取られるが、実際は同じ遺跡を指しているのである。

現在、「吉武遺跡群」で名称の統一が進んでいる。吉武遺跡群の中に、特に副葬品を持った弥生時代の墓地群を、「吉武高木遺跡」「吉武大石遺跡」「横渡遺跡」と呼んでいたが、遺跡名としては再考が必要であろう。これまで、報道や活字で「飯盛遺跡」となっているのは「吉武遺跡群」のことを指しているのである。しかし、「飯盛」(イイモリ)という歴史的地名は遺跡名に残しておきたかった。

吉武遺跡群のこれまでの調査は以下のとおりである。

Tab. 1 吉武遺跡群(YST) 調査一覧表

| 次第 | 調査番号 | 調査原因 | 施設・地点 | 調査地 | 調査面積 | 調査期間 | 調査担当者 | 報告書 |
|----|------|------|------------|----------------|----------------------|---------------|---------------------|---------------|
| 1 | 8102 | 圃場整備 | 圃場 1 次 | 西区人字飯盛宇本名 | 12,000m ² | 811101～820315 | 二宮忠司・小秋義彦・田中寿夫 | |
| 2 | 8234 | 圃場整備 | 圃場 2 次 | 西区大字飯盛 | 21,000m ² | 820901～830215 | 二宮忠司 | |
| 3 | 8235 | 道路建設 | 田・飯盛線 1 次 | 西区人字飯盛宇トイ外 | 5,200m ² | 820922～830212 | 山崎龍馬 | 市報集 127集 |
| 4 | 8335 | 圃場整備 | 圃場 3 次 | 内区大字吉武字飯盛110番 | 25,000m ² | 830912～840324 | 横山邦穂・下村智 | 市報(概) 143集 |
| 5 | 8415 | 圃場整備 | 田・飯盛線 2 次 | 西区大字飯盛 | 1,600m ² | 840413～840531 | 浜石耕史 | |
| 6 | 8416 | 圃場整備 | 圃場 4 次 | 内区大字吉武字高木194番 | 26,000m ² | 840701～850320 | 横山邦穂・下村智・常松幹雄 | 市報(概) 143集 |
| 7 | 8426 | 道路建設 | 野方・金武線 2 次 | 西区大字吉武字三十六146番 | 2,300m ² | 850326～850531 | 横山邦穂・下村智 | 市報 187集 |
| 8 | 8518 | 圃場整備 | 圃場 5 次 | 西区大字吉武字高木 | 470m ² | 850702～850724 | 横山邦穂 | |
| 9 | 8535 | 圃場整備 | 圃場 6 次 | 西区大字吉武字大仁 | 28,000m ² | 850801～860331 | 方武・草治・下村智・常松幹雄・浜崎良彦 | |
| 10 | 8650 | 圃場整備 | 圃場 7 次 | 西区大字吉武地区内 | 5,000m ² | 861116～870227 | 方武・草治・常松幹雄 | |
| 11 | 8700 | 道路建設 | 野方・金武線 7 大 | 西区人字飯盛宇トイ | 4,800m ² | 870301～870510 | 二宮忠司・佐藤一郎 | |

II 立地と環境 (Fig. 2~4)

吉武遺跡群は福岡平野の西端部にあたる早良平野に所在する。

この早良平野は地形上は東縁を油山山塊より派生して北に樹枝状に支脈をひろげる七隈一飯倉丘陵によってほぼ限られる。また西縁は背振山塊より金山一西山一飯盛山一長垂山へと続く連山によって遮断された完結する地域をなしている。

平野の西縁に沿って流れる室見川は古來幾度か流路を変更し乍ら、流下地域に多くの恩恵と災害をもたらし続けているが、この本流に流入する幾多の支流はその自然的營力によって広大な扇状地を形成しつづけて来た。この扇状地は室見川左岸の中流域に顕著であって旧石器時代以来の生活舞台となる地理的環境はこれらの形成によって準備されたといえよう。本遺跡群を含む周辺の金武・都地・飯盛西・太田などの遺跡群もこのようないま見川の小支流である日向川の流路に沿って形成された遺跡群である。

この流路地域に形成された各々の遺跡群は夫々に特徴ある内容をもち、旧石器時代包含層、縄文時代後期階六群、弥生時代前期～後期集落址および墓地群、更に古墳時代では集落址と古墳群、歴史時代に至っては古代の寺院址および製鉄址、中世集落址などが含まれる。

各遺跡群は相互に有機的関連をもって成立・展開して来たものと考えられるが、以下では本調査の主なる内容を占める弥生時代壙棺遺跡について周辺遺跡の分布および調査成果について概観し、吉武遺跡群壳棺墓地の理解の一助としたい。

早良平野は早良区東入部一長峰間をもっとも狭隘部とし、袋状をなし北側に開放展開した地形となっており、平野の東・西に伸びる丘陵部および平野内の微高地それに博多湾に面する砂丘地帶には弥生時代集落とともに同時代の墳墓群が散在する。以下ではその主なものを列挙することとする。

1. 長峰壙棺遺跡群 (Fig. 2-1)

室見川左岸にあり、現在まで平野最奥部に位置する。東西270m、南北80m程の舌状丘陵(標高74m)で弥生時代中期壙棺が出土している。

2. 黒塔壙棺遺跡 (Fig. 2-2)

室見川左岸にあり、長峰より1.3km程下流にある。遺跡は西山から派生して西南より北東方向に伸びる丘陵の頂上部(標高70m)を占める保食神社の境内を中心とする東西100m、南北30~60m程の範囲である。

3. 中通壙棺遺跡 (Fig. 2-3)

室見川右岸に位置し、油山山塊より派生する丘陵の裾部(標高34m)に立地し、現在の老松

II 立地と環境

神社境内を中心とする南北120m、東西90mの範囲にあたる。当遺跡は昭和40年代後半の頃に数基の甕棺墓が発見され、一部は早良中学校に保管されている。甕棺は中期後半を主にするものと考えられる。

4. 四箇甕棺遺跡 (Fig. 2-4)

室見川中流域右岸にある四箇遺跡群の一角を占める。標高20m程の微高地に立地し、甕棺墓8基、土壙2基、竪穴20基、石蓋土壙(?)1基が検出された (J-10地点)。

甕棺墓は小児棺3基、成人棺5基であり、時期的には弥生中期前葉にあたる。副葬遺物として第1号甕棺よりボタン状土製品が2点出土している。(1981~82年調査)

5. 田村甕棺遺跡 (Fig. 2-5)

四箇甕棺遺跡より北へ2kmに位置し、標高17mを測る微高地に立地する。1984年の市営住宅建設に伴う調査で前期後半の伯玄式甕棺墓10数基が検出された。墓地は單一期のものである。(田村遺跡第10地点)

6. 野方久保甕棺遺跡 (西区大字野方字柿ノ内)

室見川左岸の標高14mをはかる丘陵上に立地する、甕棺墓の分布は現在の予測では南北100m、東西50m程の範囲となろう。

調査は1986年に実施され、甕棺墓67基が検出された。時期的には弥生前期末~後期初頭に亘るものである。構成は中期前葉~後葉を中心とし、中期前葉(汲田式)の新しいタイプの甕棺墓2基より、夫々細形銅劍1、細形銅劍+把頭飾が出土した。また中期中葉(須玖式)の甕棺墓3基からは堀王製管玉(1)、ヒスイ製勾玉(1)、柳葉形鉄鏃(1)が副葬されていた。

7. 浦田甕棺墓 (早良区重留)

油山山塊より派生する標37m程の舌状丘陵の頂上部から西側斜面にかけて弥生中期~後半の甕棺墓が分布する。1982年・1987年の調査で計15基程の甕棺墓が正式調査されている。

他に室見川右岸の丘陵地帯を主に墓地群の一部が調査されている遺跡がある。

七隈丘陵より派生する標高20m程の舌状台地の先端部に立地する飯倉丸尾遺跡では前期末金海式甕棺に伴って細形銅劍が発見されている。

また室見川右岸にあって東側を北流する金屑川とに狭まれる標高15m程(最高部)の丘陵に立地する有田遺跡群は、丘陵部に多くの浅い谷を樹枝状に形成する南北1.65km、東西0.75km程の規模であり、丘陵の南端部および北西部端に2ヶ所の墓地群が認められる。南端部のものは標高9mを測る県立西福岡高校内にあり、金海式甕棺より細形銅戈一口が出土している。北西部のものは小田部地区の標高8m程の丘陵端部に立地する一群で前期末~中期前半を主とするものである。同群の第86次調査で前期末甕棺より石鏃1点が出土した。

また有田遺跡群より南東1.7km程の田隈地区(標高15m)でも公園建設に際して中期前葉を主とする一群が確認されている。

立地と環境



Fig. 2 這路群位置圖

- 1: 長峰表宿道跡
- 2: 黒岳表宿道跡
- 3: 中通表宿道跡
- 4: 四瀬表宿道跡
- 5: 日村表宿道跡
- 6: 吉武連跡群

Ⅱ 立地と環境

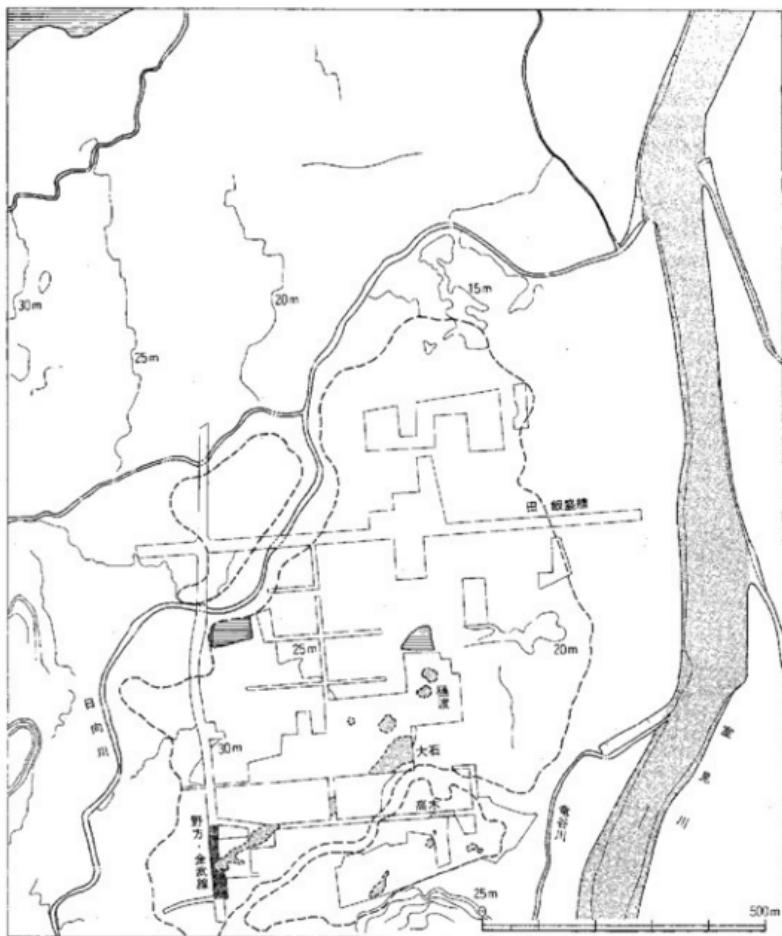


Fig. 3 吉武豪群調査区位置図 (1/1000)

七隈丘陵の一角を占めるカルメル修道院内（標高25m）では前期末を主とする木棺墓・甕棺墓の一群があり、甕棺墓に切られる木棺墓内より円環状銅鏡3個が出土している。更に位置的には西側に移るが飯盛山北麓の羽根戸原B遺跡群（標高30m）でも却て富士ヶ丘団地造成にともなって多くの甕棺墓が発見されたとされ、この南側の羽根戸原C遺跡群第2次調査で発見された墓地（中期中葉を主とする甕棺墓11基・土壙墓1基）と関連をもつ一群と考えられる。尚羽根戸原C遺跡群第4次調査では中期を主とする大規模な集落址が検出され、両者とのつながりがより強く想定されよう。

次に博多湾々岸に位置する砂丘地帯では西新・藤崎地区の墳墓群が知られる。

8. 西新町甕棺遺跡

現博多湾汀線より400m程南に進入した砂丘地帯（標高4.9m）にある。遺跡は東西850m、南北250m程の範囲にある。1976～1978年に亘る地下鉄建設に伴う調査で30基の甕棺墓および祭祀遺構が検出された。甕棺墓は中期中葉の須玖式を半数として中期後半から後期初頭に至る構成である。甕棺墓からは銅劍切先（第19号）およびゴホウラ貝製貝輪3個（第10号）などが出土した。

9. 藤崎甕棺遺跡

西新町遺跡の西側に連なる砂丘上（標高4m）に立地する遺跡群である。規模は東西400m、南北150m程の範囲である。1977～1978年地下鉄建設に伴う調査を第1次として1985年までに11次の調査が行なわれている。

弥生時代墳墓は第1次～甕棺墓91基（前期～終末期）、石棺墓4基・土壙墓23基、特殊墓1基などであり、第2次（1977年）～甕棺墓60基（前期～後期）、石棺墓2基・土壙墓9基であり、甕棺墓から管玉1個が出土した。第4次（1980年）～甕棺墓2基（中期中葉）を検出。第5次（1980年）～前期初頭～後半甕棺墓2基、石蓋土壙墓1基などである。第6次（1982年）～甕棺墓5基検出。第7次（1983年）～甕棺墓19基（中～後期）、土壙12基などを検出した。第8次（1983年）～甕棺墓2

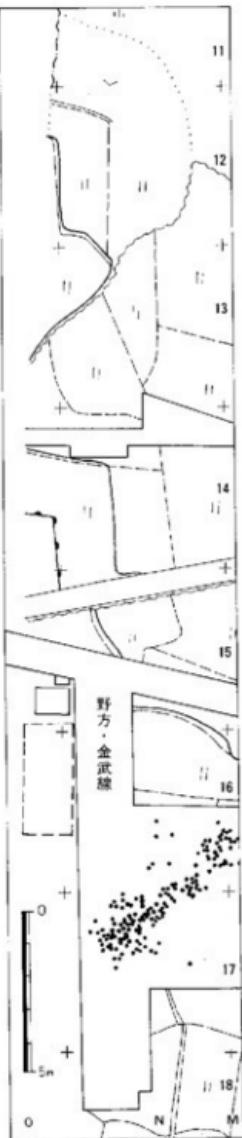


Fig. 4 調査地点図

II 立地と環境

基。第10次（1986年）－壺棺墓6基、土塙など。第11次（1986年）－壺棺墓4基などを検出しておあり、壺棺墓は前～後期を通じて200基を越すものと考えられる。^{（註1）}

- 註1. 「四箇周辺遺跡調査報告書[4]」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第63集』、1981年、福岡市教育委員会
註2. 「早良丘墓とその時代－墳墓が語る激動の弥生社会」、1986年、福岡市立歴史資料館
註3・4－「有田遺跡」、1968年。
註5. 「有田・小田部」第6集、1985年、福岡市教育委員会
註6. 「京ノ原遺跡」、1976年、福岡市教育委員会
註7. 「羽根戸原C遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第134集』、1986年、福岡市教育委員会
註8. 「羽根戸原C遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第187集』、1988年、福岡市教育委員会
註9. 「西新町遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集』、1982年、福岡市教育委員会
註10. 「藤崎遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集』、1981年、「藤崎遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集』、1986年、福岡市教育委員会

さて周辺に散在する壺棺墓地について触れて来たが、十分な内容把握にはほど遠い觀がある。ところで本調査地区の含まれる吉武遺跡群に於ては主に1980年より開始した飯盛・吉武地区圃場整備事業に伴って多くの弥生墳墓が検出された。調査は1981年度を第1次とし、1985年度5次に至った。弥生墓地は各調査で検出した。その概要を記すと、第1・第2次調査では、弥生前期末～中期におよぶ2群の壺棺墓262基が検出され、1次調査で金海式壺棺より細形銅劍切先が出土した。またこの南側に位置する第3次調査区では中期前葉～中期末の壺棺墓140基、箱式石棺墓・木棺墓・石蓋土塙墓各1基を検出した。墓地は南北に長く、大きく北群90基、南群50基で、墓地形成は南群が中期前葉を、北群が中期後葉を初めとする。このうち北群の北端部は径24m・壇高2.5m程度の墳丘墓となり、壺棺墓27基以上・木棺墓・石棺墓各1基で構成される。壺棺・木棺墓からは細形銅劍2口、青銅製把頭飾1、前漢鏡1面（重圓文尾雲鏡）および鉄劍3口、素環頭太刀1口、鉄鎌1、素環頭刀子1口、碧玉製管玉14、水晶製算盤玉2、ガラス小玉36が出土した。また他に遊離資料として細形銅劍1口がある。第4次調査では東・西に群をなし470基以上の壺棺墓があり、他に石棺墓・木棺墓などが検出された。このうち西群は金海式壺棺を初源とする480基以上の墓地で第3次調査の墳墓群につづく。一方東群は金海式壺棺を主とする群があり、高木地区では壺棺墓（34基）と木棺墓（4基）より多数の青銅武器・鏡・玉類が出土した。またこれの北西側150mの第5次調査でも202基以上の壺棺墓・木棺墓・土塙墓が検出され、多数の青銅器・玉類などが出土した（Fig. 3）。第1・2次調査区を除く3～4次の墓地は全て連絡し、南西から北東方向に450m程の延長となる。本調査区はこの連続する墓地群の南西端を占める（Fig. 4）。

- 註1. 「福岡県猶渡遺跡」『日本考古学年報』36、日本考古学協会
註2. 「福岡県吉武高木遺跡の調査」『日本考古学年報』37、日本考古学協会
註3. 註2に同じ

III 調査の記録

概要

調査地区は、福岡市西区大字吉武浦田に所在し、吉武遺跡群の西南部にあたる。調査前は水田となっており、調査予定地区を挟んだ東側および西側の水田地帯は、飯盛・吉武土地改良組合によって圃場整備が進められている地域である。新設される道路も、圃場整備の地割り区画線と一致するように計画されており、昭和59年度は、土地改良区域内の幅16m、長さ200mの3200m²が道路新設予定地として確保されていた。

発掘調査は、道路新設予定地3200m²の内、南側の谷部を除く2300m²について行なった。南側谷部は、既存の小河川が流れしており、また、圃場整備に伴う水路部分の調査で、旧河川による氾濫原と分かり、遺構が全く存在しないことから調査対象外とした。2300m²の内、北側の地形的にやや高い部分1,000m²に遺構が集中する。

出土した遺構の中心は甕棺墓である。大形の成人用と考えられる甕棺墓が51基、小児用とみられる中・小形の甕棺墓が25基、合計76基確認できた。調査時には77基分として番号を付し取り上げたが、ごく一部残っていたK72はその後、土師器甕の底部と判明し、甕棺墓の基数から除外した。

甕棺墓は、表土除去後すぐに検出することができ、殆どが開墾や耕作によって上半部が削平されている。墓壙も、甕を埋置する部分の掘方しか確認できなかつたものが多い。甕棺群の分布状況は、圃場整備地域の調査結果も含めて考えると、西南から北東方向に帶状に広がっていることが見て取れる。総延長150m、北東端部は、昭和60年度に発掘調査し、青銅武器をたくさん副葬した吉武大石遺跡となる。時期的には、弥生時代前中期の金海タイプの甕棺墓から発生し、帶状に分布した数地点に中心部が存在する。その後、後期前半まで甕棺墓が増加し、結果的に帶状分布が形成されたものと推察される。今回報告する76基の甕棺墓は、南西端部近くにあたり、弥生中期前半から後期初頭までの時期幅を持つものである。

甕棺墓に伴うものとしては、祭祀土壙が3基ある。丹塗りの漆や甕を埋置する。小児棺の中には丹塗りの棺が散見されるが、小児棺として取り上げた一部には、祭祀土器が含まれている可能性がある。細かな区別ができなかったので、小形棺の項に含めて説明することにする。

弥生時代以降の遺構・遺物については、調査区北側の旧河川1条、掘立柱建物1棟、古式須恵器、越州窑青磁などがあげられる。調査区東側隣接の圃場整備調査区では10数基の古墳群が広がり、周辺から陶質土器や古式須恵器が出土している。また、さらに東側の字三十六や大門では古代寺院に関する遺物が出土し、越州青磁も多量に出土している事から、関係が注目される。

1 壺棺墓

大形棺

K 01 壺棺墓 (Fig. 6・7 PL. 3・36)

調査区西端部で検出された接口式の壺棺墓である。棺の組み合せは、上棺が壺、下棺が甕となり、ほほ水平に埋置される。主軸は N-7°30'-W で、やや西に寄った北を示す。接口部の粘土目張りは観察されなかった。全体に削平が激しく、墓壙は下端部しか残在していない。

上棺の壺は、鋤先状口縁を有し、外口径 59.8cm、器高 65.9cm、胴部最大径 49.2cm、底径 10.8cm を測る。頭部と胴部の境および胴部には断面 M 字状の突帯が 3 条めぐる。突帯にはヘラ状工具による刻み目が、2 条に分れた突帯頂部に同時に施文されている。同様の刻み目は口縁部外端部にも認められる。器面調整は、頭部上半は磨減ではっきりしないが、下半部にはタテ方行のナデの後、一定間隔で横方向にもナデしている。調整具は幅約 1.2cm 程の板状のものとみられ、9-10 本の浅い擦痕が残り、文様状に見える。胴部外面及び内面もナデ調整。器色は淡い赤褐色を呈し、微細な砂粒を含むきめ細かい胎土を持つ。焼成は良好で胴部に黒斑を有する。

下棺は大形の甕で、胴部突帯以上が垂直に立ち上がり、よく発達した「T」字形の口縁部を有する。口縁下に 2 条、胴部に 2 条の「コ」の字に近い三角突帯をめぐらす。外口径 75.0cm、器高 125.7cm、胴部最大径 70.8cm、底径 16.8cm を測る。器面調整は、外面がナデ、内面がハケ目調整の後ナデが加えられている。色調は、外面が明るい黄褐色、内面が灰褐色を呈し、胎土に 1-3mm 大の砂粒が混じる。焼成は良好である。胴部外面上位に 2 箇所小範囲に赤色顔料の付着した部分がみられる。また、胴部突帯を挟んで 2 箇所に黒斑が残る。

K 02 壺棺墓 (Fig. 6・7 PL. 3・36)

調査区西端部に位置し、K 01 の北側で検出された。上棺が鉢、下棺が甕の組み合わせとなる成人用壺棺墓である。接口式で、上棺の鉢の方の口徑がやや大きい。主軸は東西方向に近く N-62°-E にとる。削平が激しく、下棺は約半分しか残在していなかった。

上棺の鉢は、外口径 86.0cm、器高 57.7cm、底径 12.6cm を測り、内側が発達肥厚した口縁部を有する。口縁部下には 2 条の三角突帯がめぐり、底部はやや座む。茶褐色を呈し、1mm 大の微砂粒を含む良質な胎土で、焼成も良好である。調整は内外面ともナデであるが、内面には工具の擦過痕が観察される。

下棺は大形の甕で、口縁部の特徴は上棺の鉢と良く類似している。内側に発達肥厚した口縁部を持ち、器壁は薄手である。胴部中位よりややさがった位置に「M」字状突帯をめぐらし、口縁部まで垂直に立ち上がる。底部は削平によって欠失している。内外面とも赤褐色を呈し、胎土に 3mm 程度の砂粒を含む。焼成は良好で、口縁部近くに黒斑が見られる。外面はナデ調整、

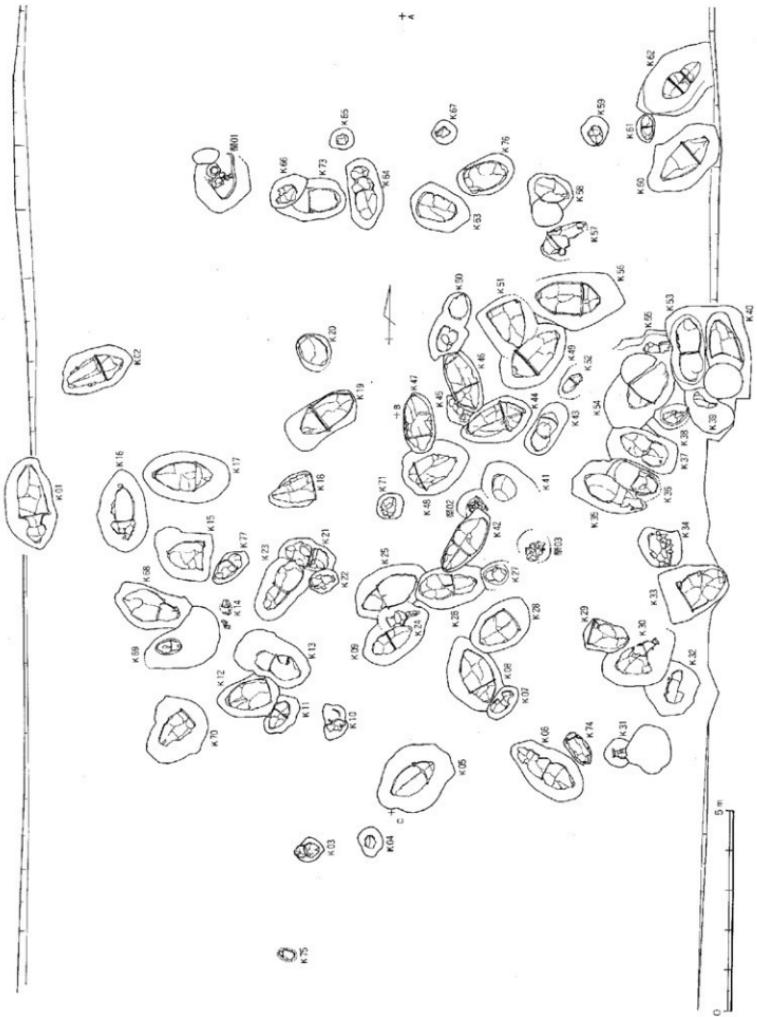


FIG. 5 連續面圖 (1) (1/200)

内面はハケ目調整の後ナ
ゲ調整が加えられている。
外口径 68.0cm、胴部径
64.0cm を測る。器高は
1mを少しこえる程度に
なると考えられる。

K 05 壱棺墓 (Fig. 8

・9 PL. 4・37)

調査区の南側で検出さ
れた壹棺墓で、上棺に口
縁打ち欠きの壺、下棺に
大形の甕を使用し、呑口
式に組み合わせる。主軸
は N-59°-E にとり、
壺の埋置角度は 32°であ
る。

上棺は、口縁打ち欠き
のため詳細は不明であり、
底部は削平で欠失してい
る。胴部に「コ」の字状
突帯が 2 条めぐる。淡褐色
を呈し、薄手の作りで
ある。

下棺は、外口径 53.0cm、
胴部径 62.0cm、底径
10.2cm、器高 90.0cm とな
る。器形は胴中位から内
傾気味に立ち上がり、強
く屈折した逆「L」字状
の口縁部を有する。口縁
下に 1 条、胴部に 2 条の
「コ」の字状突帯がめぐ
る。色調は、淡い紅褐色

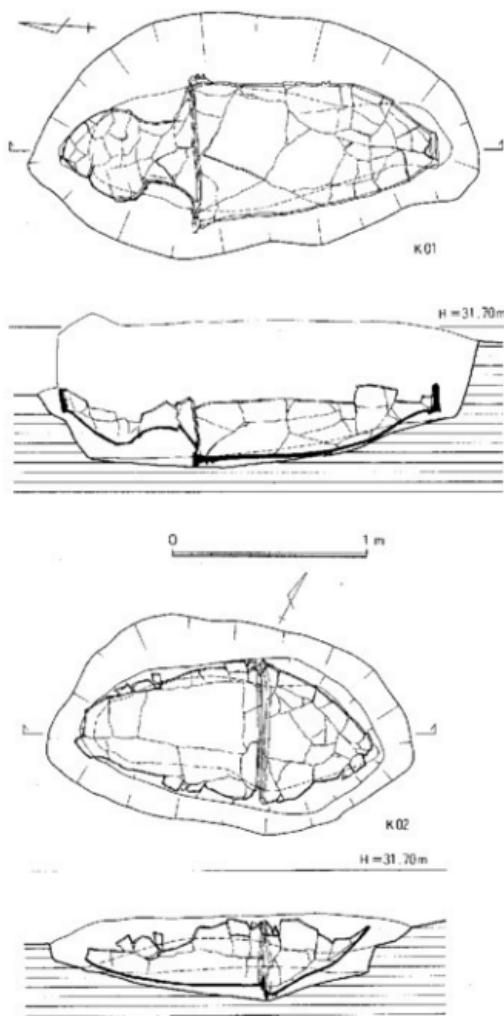


Fig. 6 K01・02 壱棺墓出土状況図 (1/30)

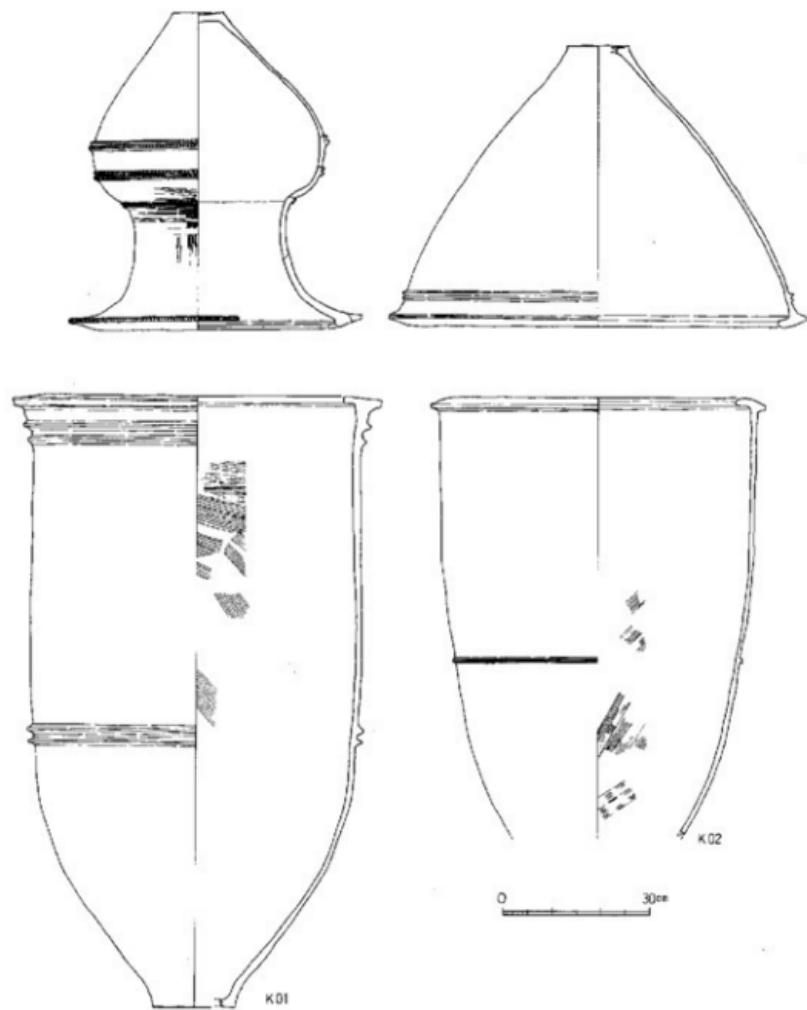


Fig. 7 K01・02 要椎尖測図 (1/12)

1 売棺墓一大形棺一

を呈し胎土に2mm程度の細砂粒を含む。焼成は良好である。胴部上位にハケ日、口縁部内面にはヘラ状工具によると考えられる圧痕がみられる。口縁部から底部にかけては継長に黒斑が残る。

K 06 売棺墓 (Fig. 8
・9 PL. 5・37)

調査区南側で検出された3連の覆L字式賣棺墓である。下棺は大形窓、中位及び上棺は中形窓を使用している。中位の窓は底部を打ち欠いている。主軸はS-58°-Eで、窓の埋置角度は4.5°である。

上棺は、口縁部が内弯気味に外方へ開き、罐部が肥厚する。口縁直下に三角空帶を付し、胴部が中位でふくらみ、すばまりながら底部へ移行する。器壁は非常に薄く、色調は胴部中～上位が灰黒色、底部は淡赤褐色となっている。外面はハケ目調整、内面はナデ調整が施されている。胎土には1～2mmの砂粒が少し混入し、焼成は良好である。外口

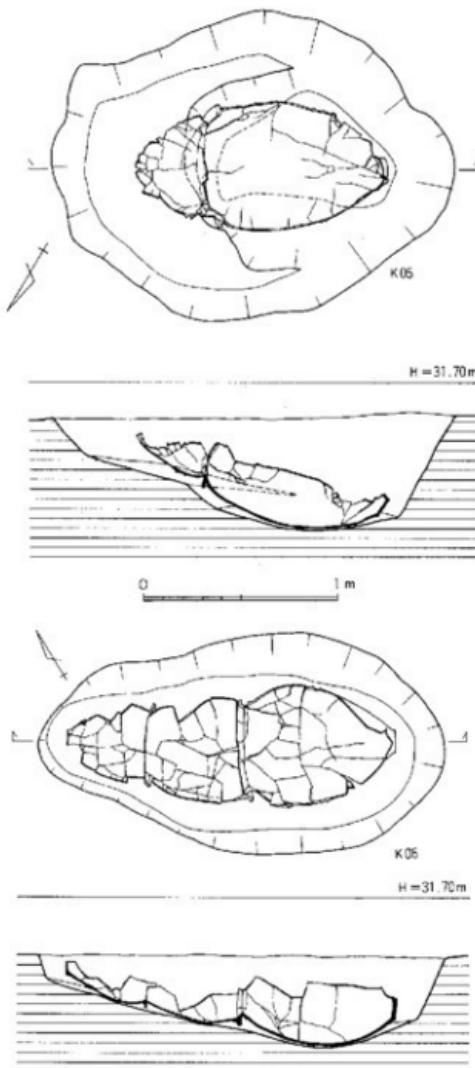


Fig. 8 K 05・06 売棺墓出土状況図 (1/30)

III 調査の記録

径36.0cm、底径8.4cmで、器高は42cm前後になるものと考えられる。

中位の壺は、上壺よりやや大きく、外口径47.2cm、胴部径49.6cmを測る。器高は底部打ち欠きのため判然としないが60cmを少し超えるものと推察される。口縁部は、やや内窓氣味に外反し、口縁直下に三角突帯が1条めぐる。器表は、内外面ともハケ目調整が施され、その後ナデ消されている。特に口縁部は丁寧なナデ調整が加えられている。口縁内部には指頭圧痕が残る。色調は明るい淡黄褐色を呈し、胎土に1mm前後の砂粒を含み、中には3mm大のものまで混入する。焼成は良好である。

下棺は、胴部が倒卵形を呈し、口縁下で強くしまる。口縁部は外傾して「く」字形をなし、口縁下に鋭い三角突帯を1条付す。胴部中位には断面「コ」の字形突帯を2条貼付し、すばまりながら底部へと移行する。外面にはハケ目調整の痕跡が残り、内面の口縁接合部には指頭圧痕が観察される。色調は内外面共に淡褐色を呈し、胴部中位から下半部にかけて大きな黒斑がある。胎土には若干の砂粒も混じるが精良で、焼成も良好である。外口径43.1cm、胴部最大径59.2cm、底径11.2cm、器高75.7cmを測り、器形が少しいびつになっている。

K 08 壺棺墓 (Fig. 10・11 PL. 5・38)

調査区中央部のやや南側に位置し、K 28を切り、K 07に切られる関係で検出された接口式の成人用壺棺墓である。上棺が鉢、下棺が壺の組み合わせで、ほぼ水平に埋置されている。墓壙は削平によって下半部しか残在していない。主軸はS-25°30'-Eをとる。

上棺の鉢は、外口径58.4cm、底径11.2cm、器高41.6cmを測り、逆「L」字状に外反する口縁部を持つ。口縁端部は肥厚し、口縁下に断面「コ」の字形に近い三角突帯を1条めぐらす。外面は黄白色、内面はやや橙色がかった乳白色を呈する。胎土は微細な砂粒を含むが非常に精良で、焼成も良好である。外面調整はタテ方向のハケ目、内面はヘッジ工具によるナデが施され、部分的に荒い擦過痕が観察される。

下棺は大形の壺で、胴部突帯以上がやや内傾氣味に立ちあがり、口縁下でしまる。口縁部は内外によく発達し、外端部が肥厚する。上端部は内傾し、口縁下に鋭い三角突帯を1条めぐらす。胴部中位よりややさがった位置で、端正な断面「コ」の字形の突帯2条を貼付する。内外面ともハケ目調整の後、ハケ目がナデ消されているが、胴部下半は残在している。外口径70.3cm、胴部最大径70.9cm、底径13.4cm、器高101.6cmを測る。器色は淡赤褐色を呈し、胎土に1~3mm大の砂粒を含む。焼成は良好である。胴部下位から上位にかけて黒斑が認められる。

K 12 壺棺墓 (Fig. 10・11 PL. 7・38)

調査区南西側で検出された単式の壺棺墓で、墓壙の切り合ひから、K 13に切られた関係にある。主軸はやや東西に近くN-75°-Eをとる。壺の埋置角度は、口縁部側が少し高く、4.5°を測る。削平が激しく、壺および墓壙は下半部のみしか残存していなかった。壺の痕跡ははっきりしないが、木蓋が使用されたものと考えられる。

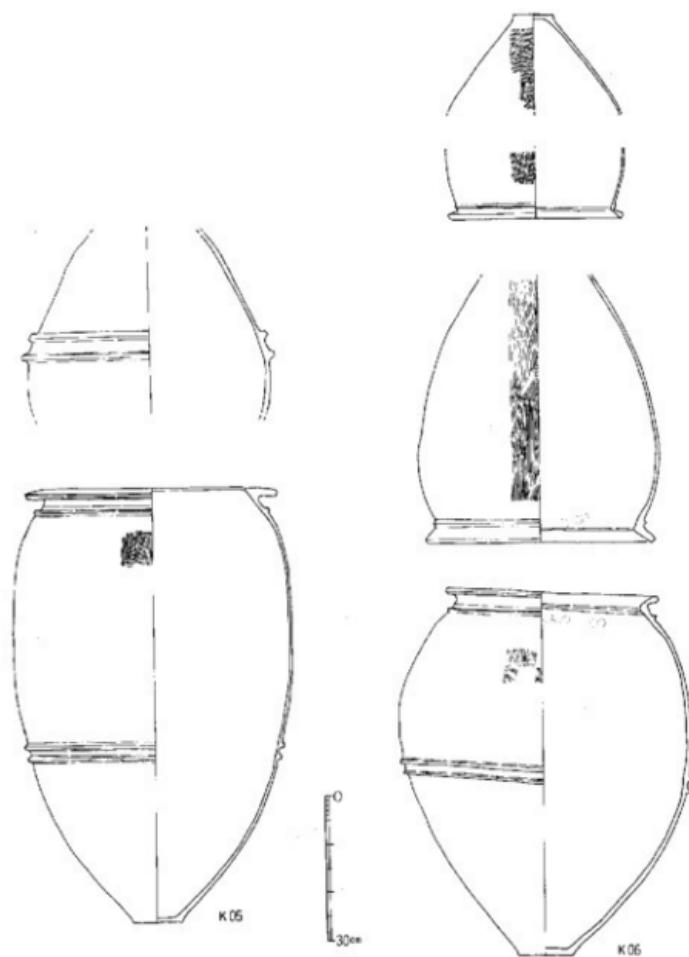


Fig. 9 K05・06 壳棺大形棺 (1/12)

III 調査の記録

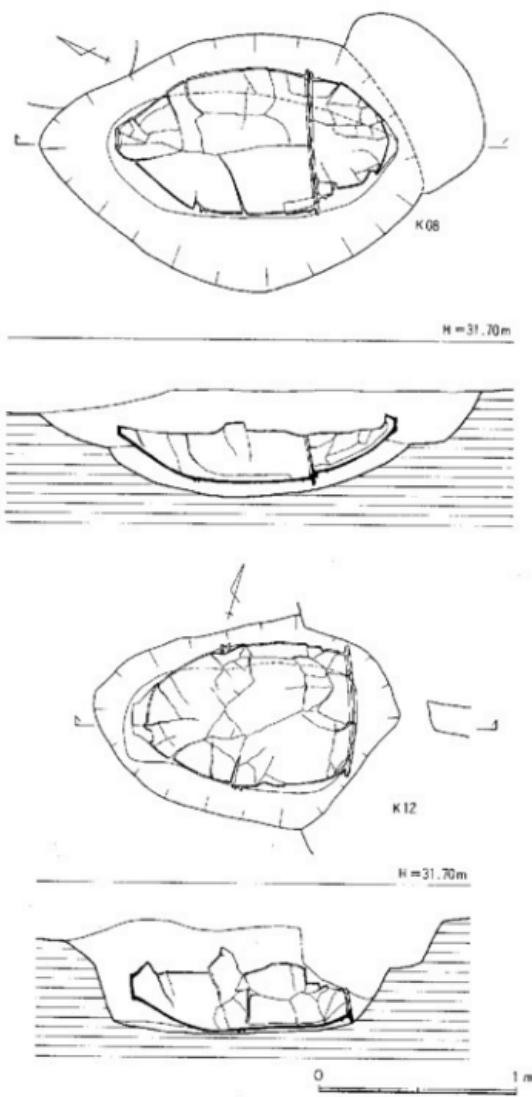


Fig. 10 K08・12 墓棺墓出土状況図 (1/30)

壺は、胴部突帯から内弯気味に立ちあがり頭部で締まりながら内外によく発達した口縁部へと移行する。口縁下には鋭い三角突帯を1条付し、胴部中位には、上下に引き伸ばした断面「コ」の字形の突帯を2条施す。胴部下半は少しいびつなほり平底の底部へ移行する。器色は、外表面が淡灰褐色、内面が暗灰褐色を呈し、胎土に1~2mmの砂粒を含む。焼成はあまり良くなくやや軟質である。胴部内外面はナデ調整が施されているが、外表面はハケ目調整の後、ナデ調整が加えられている。下半部はハケ目痕跡が残る。胴部中位を中心大きな黒斑があり、反対側の胴部上位にも黒斑が認められる。

法量は、外口径67.7cm、器高106.6cmで、胴部最大径は73.8cmを測る。底径はやや大きく14.6cmとなる。

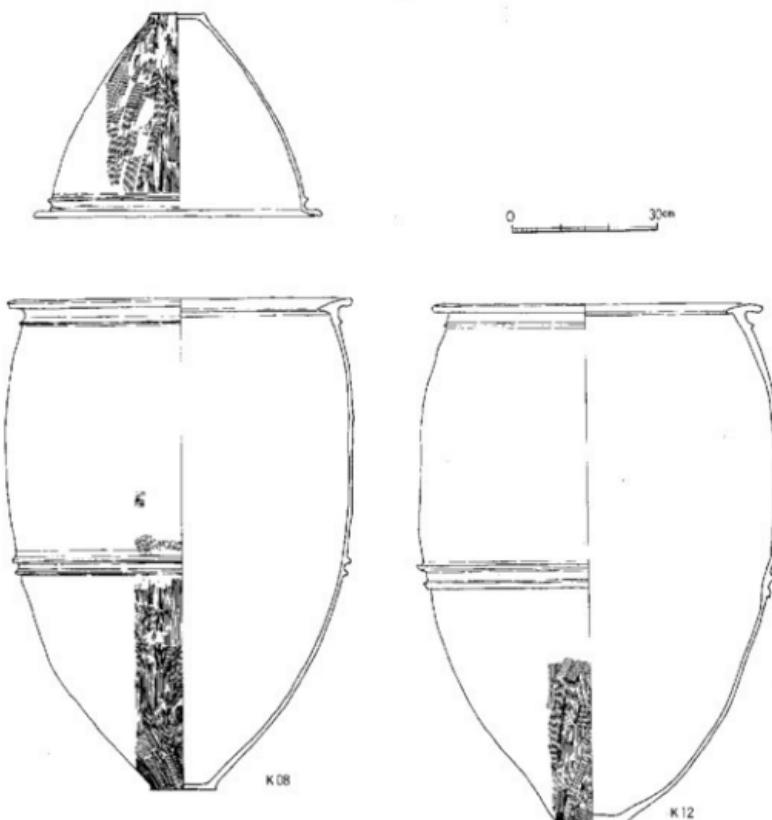


Fig. 11 K08・12 壱棺実測図 (1/12)

K 1 3 壱棺墓 (Fig. 12・13 PL. 7・39)

K 12の墓壙を切って北側に位置する。壹棺群分布域の南西部にあたる。墓壙の残りは他の壹棺墓に比べて良く、棺自体の残りも良かった。残存墓壙の大きさは、長径1m95cm、短径1m10cmの楕円形を呈している。深さは95cmまで確認できた。壹棺は略東西方向をとり、S-63°-Eである。壹棺の埋置傾斜角度は7°を測り、壹と壹とを組み合せた接口式壹棺墓である。

上棺は、中形の壹を使用しており、崩部中位が張って頸部がしまる器形を持つ。口縁部は、内弯気味に外反し「く」の字形を呈する。口縁下には1条の三角突情がめぐる。底部は打ち欠

III 調査の記録

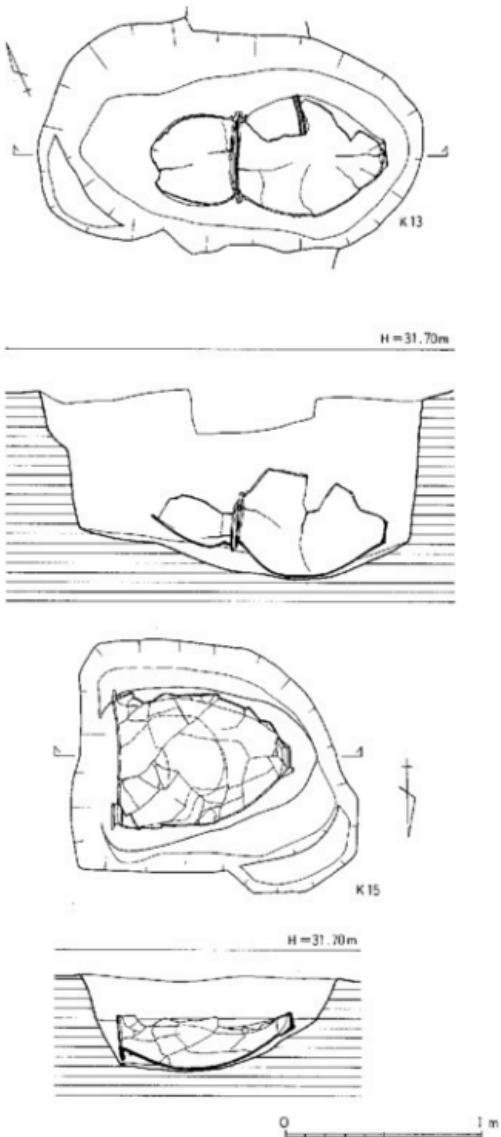


Fig. 12 K13・15 墓壙出土状況図 (1/30)

かれており、残存しない。外口径43.2cm、胴部最大径47.2cmを測る。外面は明るい褐色で、内面は淡褐色を呈する。胎土には粗大な砂粒を多量に含んでおり、きわめて粗く、焼成も良くない。器表が荒れているが、外面にハケ目調整の痕跡が観察される。

下棺の甕は、胴部中位に断面「コ」の字形の突帯を2条めぐらす。この胴部突帯から上下に器体が伸び、急激にしまりながら口縁部と底部へ移行する。口縁部は「T」字状に近く、内口唇部が「コ」の字状に突出する。外口唇部は肥厚し、上端がやや内傾する。口縁下には脱い三角突帯が1条めぐる。

外口径43.5cm、器高74.8cmで、胴部最大径は61.0cmを測る。底部は肥厚した作りになっており、底径12.7cmである。器色は淡い紅味のある灰褐色を呈し、細砂粒の混入する良好な胎土を持つ。焼成はあまり良くなく、器

I 墓棺墓・大形棺

面が磨滅している。調整は、手ナデ以外はっきりしないが、胴部に大きな黒斑が相反する面に2箇所認められる。

K 15 墓棺墓 (Fig. 12・13 PL. 7・39)

調査区西側中央部で検出された単式の墓棺墓である。主軸は東西方向にとり、S-87°-Eとなる。蓋の埋置角度は水平に近く、3.5°を測る。

壺は大形で、外口径59.0cm、器高89.0cm、胴部最大径67.0cm、底径12.5cmを測る。胴部中央部近くに断面「コ」の字形の突帯が2条めぐり、下段の突帯は外方に突出している。体部は胴部突帯からやや内窓氣味に立ち上り、逆「L」字状の口縁部に続く。内口唇は三角状に張り出し、外口唇はやや肥厚する。上端面は水平となる。11線下に断面三角形の突帯が1条めぐる。胴部下半は丸味をもってすばまりながら平底の肥厚した底部へと移行する。器色は暗赤褐色を呈し、胎土は細砂粒を含む良胎で、焼成は良好である。調整は内面がナデ、外面はハケ目調整の後、ナデ消しが加えられているが、下半部はハケ目痕が強く残る。胴部中位から底部にかけ

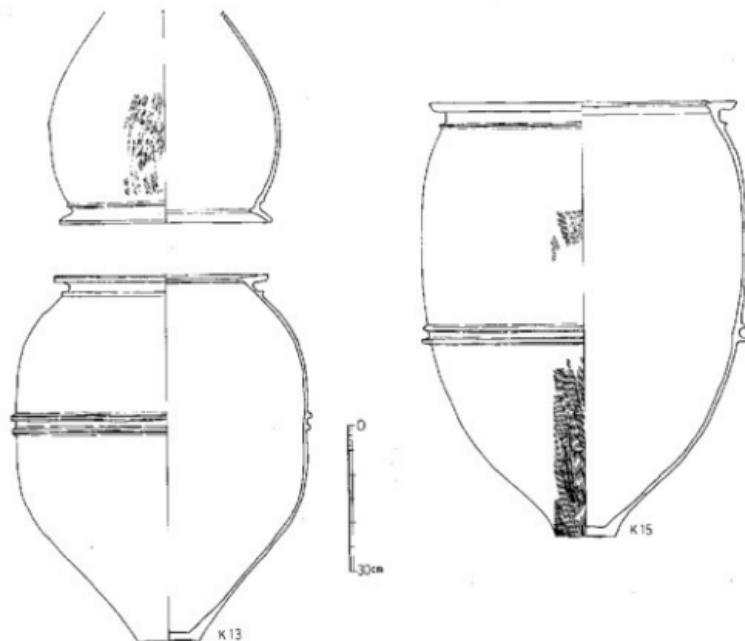


Fig. 13 K 13・15 墓棺実測図 (1/12)

III 調査の記録

て大きな黒斑が認められる。

K 16 鏡棺墓 (Fig.

14・15 PL. 8・39)

調査区西側で検出された成人用鏡棺で、K01の東側に位置する。主軸はほぼ南北方向にとり、N—G—Eとなる。鉢と蓋を接口式に組み合わせたもので、水平に埋置する。墓壙および棺の上半部は、後世の削平によって、大部分がカットされている。

上棺の鉢は、体部がやや丸味を持ち、口縁部に向って少ししまる形態をとる。口縁部は逆「L」字状を呈し、内口唇が内側に張り出す。外口径62.6cm、器高45.0cm、底径13.6cmを測る。口縁下には三角突帯が1条めぐる。器色は薄い赤褐色を呈し、胎土に1~2mmの砂粒と金雲母を混入する。焼成は良好で堅緻である。内外面はハケ目調整の後ナデ調整が加えられている。

下棺は、外口径44.2cm、器高86.3cmの臺で、丸味を帯びた体部に、「T」

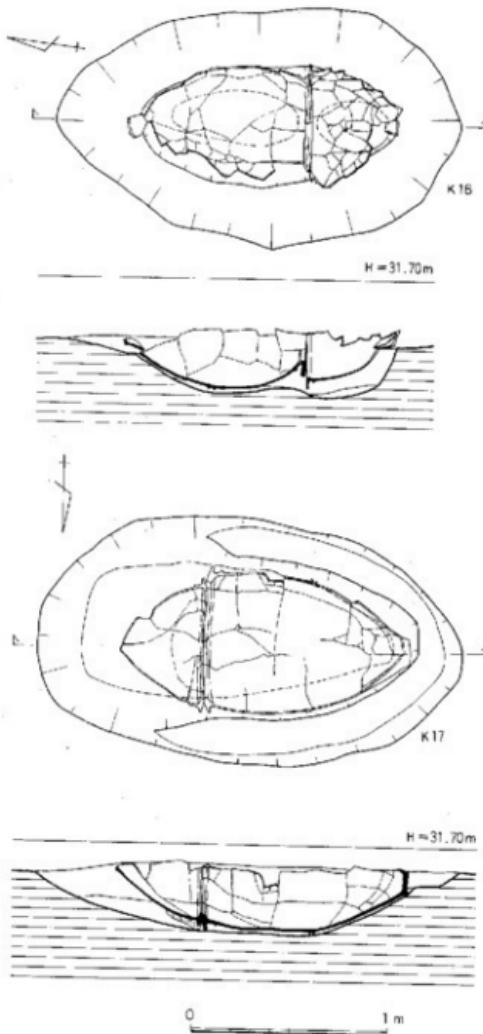


Fig. 14 K 16・17 鏡棺墓出土状況図 (1/30)

1 墓棺墓一大形棺—

字状に近い口縁部を有する。口縁下に1条、胴部に2条の断面「コ」の字形の突帯がめぐる。胴部最大径は56.4cmで、次第にすぼまりながら11.2cmの平底の底部へ移行する。色調は薄い赤褐色を呈し、胎土に1~2mm程度の砂粒と金雲母を混入する。焼成は良好で、内外面ともナデ調整が加えられている。器色、胎土、焼成は上下棺ともよく類似している。

K 17 墓棺墓 (Fig. 14・15 PL. 8・39)

調査区西側で出土した成人用墓棺で、K 16の東側に位置する。K 16の主軸とは直交するような主軸方向をとり、N-89°-Eになる。棺は鉢と甕の組み合わせとなり、埋置角度は、略水平の3.5°である。墓壙および棺の上半は削平によってカットされている。

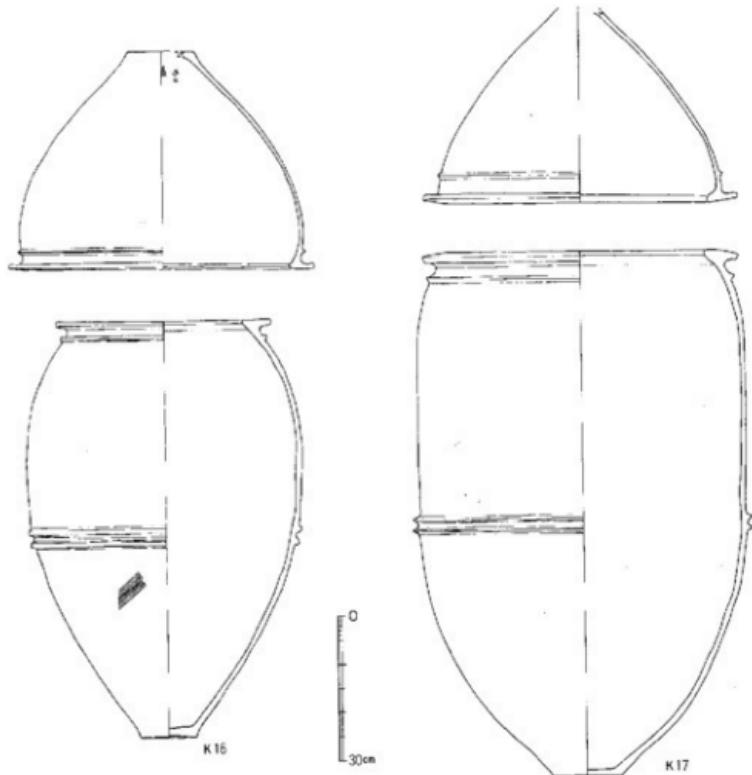


Fig. 15 K 16・17 墓棺実測図 (1/12)

III 調査の記録

上棺は、緩やかなふくらみを持つ体部に「T」字状の口縁部を有する鉢形上器である。口縁下には三角突帯を1条貼付する。外面は褐色を呈し、胎土には粗大な砂粒を多く含む。焼成は良好で焼き締りは良い。内外面とも丁寧なナデ調整が施されている。

下棺は砲弾形を呈した大甕で、胴部突帯から垂直に立ち上り、口縁部近くで縮りながら「T」字状の口縁部へと移行する。内口唇は肥厚し、上端面がやや外傾する。口縁下に1条、

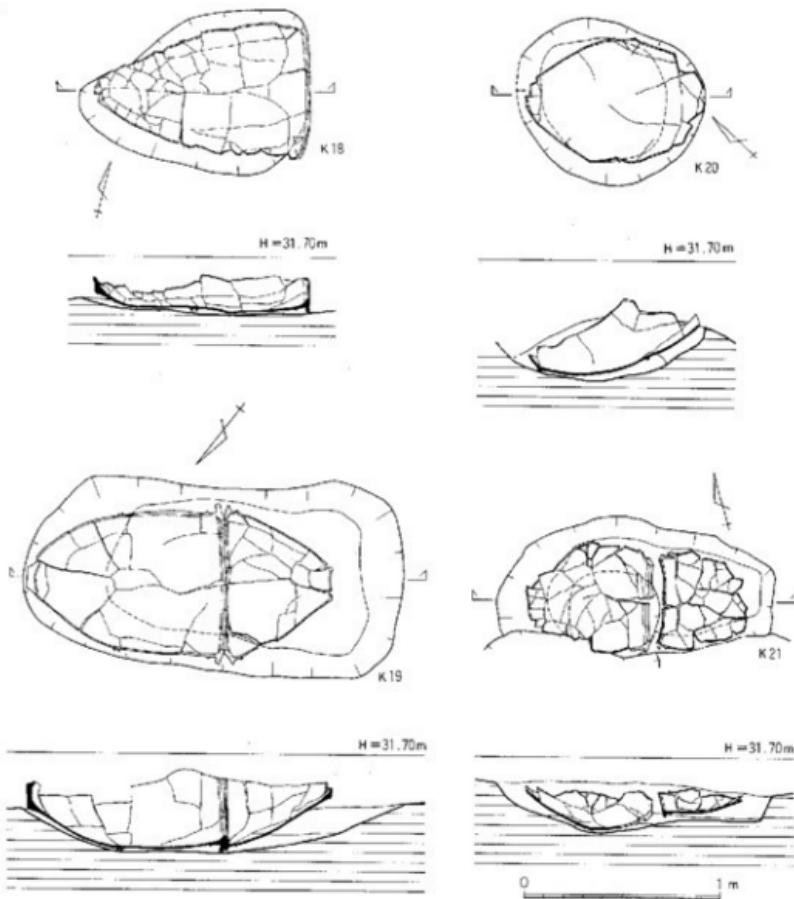


Fig. 16 K18~21 变形墓出土状況図 (1/30)

1 売棺墓一大形棺一

胴部に2条の三角突帯がめぐる。色調は暗褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には1~5mmの粗砂粒が含まれる。外口径65.4cm、器高108.0cm、胴部最大径70.0cm、底径14.0cmを測る。

K 1 8 売棺墓 (Fig. 16・17 PL. 9・40)

調査区中央部に位置し、K 17の東側で検出された。墓壙及び棺の削平が激しく、はっきりしたことは分らないが、単式の賣棺墓と考えられる。主軸は略東西方向でN-77°-Eにとる。埋置角度は、ほぼ水平である。

売は、胴部突帯からやや開き気味に立ち上り、「T」字状の口縁部へ移行する。口縁上端は水平に近く、内口唇が肥厚する。口縁下に1条、胴部中位よりややさがった位置に2条の三角突帯をめぐらす。胴部下半は緩やかにすぼまりながら上げ底の底部へ続く。亦褐色を呈し、胎土に1~2mmの大砂粒が多く混入する。焼成は良好である。調整は内面がナデ、外面がハケ目調整の後ナデ調整になっている。法量は、外口径66.4cm、器高101.0cm、胴部最大径63.2cm、底径13.0cmとなる。

K 1 9 売棺墓 (Fig. 16・17 PL. 9・40)

調査区中央部に位置し、K 18の北側で出土した接口式の成人用賣棺墓である。主軸はN-53°-Eで、鉢と売を組み合わせ、ほぼ水平に埋置する。

上棺の鉢は、外口径75.9cm、器高49.6cm、底径13.6cmを測る。ふくらみを持たない深めの鉢形土器で、外傾する「T」字状の口縁部を有する。口縁下には断面「M」字状の突帯が1条めぐる。外底面は輪状に窪み、黒斑が認められる。器色は淡褐色を呈し、胎土には砂粒を多く混入する。焼成は良好である。

下棺は大形の売で、胴部突帯から垂直気味に立ちあがり、口縁部近くで少し縮りながら肥厚した「T」字状の口縁部へ続く。上端面はやや外傾し、中央部が少し窪む。口縁下に1条、胴部に2条の三角突帯を貼付する。胴部下半には黒斑が認められ、外底面は輪状に窪む。暗黄灰色を呈し、胎土に2mmの大砂粒を多量に含む。焼成は良好で堅硬である。上棺、下棺とも作りが良く類似しており、内外面共ナデ調整が施されている。外口径73.6cm、器高99.0cm、胴部最大径69.6cm、底径11.6cmを測る。

K 2 0 売棺墓 (Fig. 16・18 PL. 10・41)

K 19の北側に位置し、調査区中央部で検出された賣棺墓である。上半部が削平によって破壊されており、詳細は分からぬ。ここでは一応単式の賣棺墓として扱っておきたい。主軸はS-33°-E方向にとり、37°の傾斜角度をもって埋置する。

売は口縁部を欠失し、胴部に断面「M」字状の突帯を1条めぐらす。突帯以下は、すぼまりながら肥厚した底部へ移行する。胴部最大径69.6cm、底径12.0cmを測り、外底面はやや窪む。器色は淡赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成はあまり良くない。器面調整は、内外面ともナデ調整が施されている。

III 調査の記録

K 21 壱棺墓 (Fig. 16・18 PL. 10・41)

調査区中央部で検出された接口式の壹棺墓である。他の壹棺墓と切り合い関係にあり、K 22、K 23壹棺墓から切られている。主軸は略東西方向でN-75°-Eをとり、棺は水平に埋置されている。壹棺の埋位置が浅いため、後世の擾乱によって上半部がかなり削平されている。

上棺は中形の壺を使用し、張りのある胴部と「T」字状に近い口縁部を有する。口縁下に三角突帯が1条めぐる。底部は削平によって欠失する。外口径43.6cm、胴部最大径45.8cm、残存器高44.4cmを測る。外面は淡黄褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。調整は内面がナデ、外面はハケ目調整の後、ヨコナデが施されている。

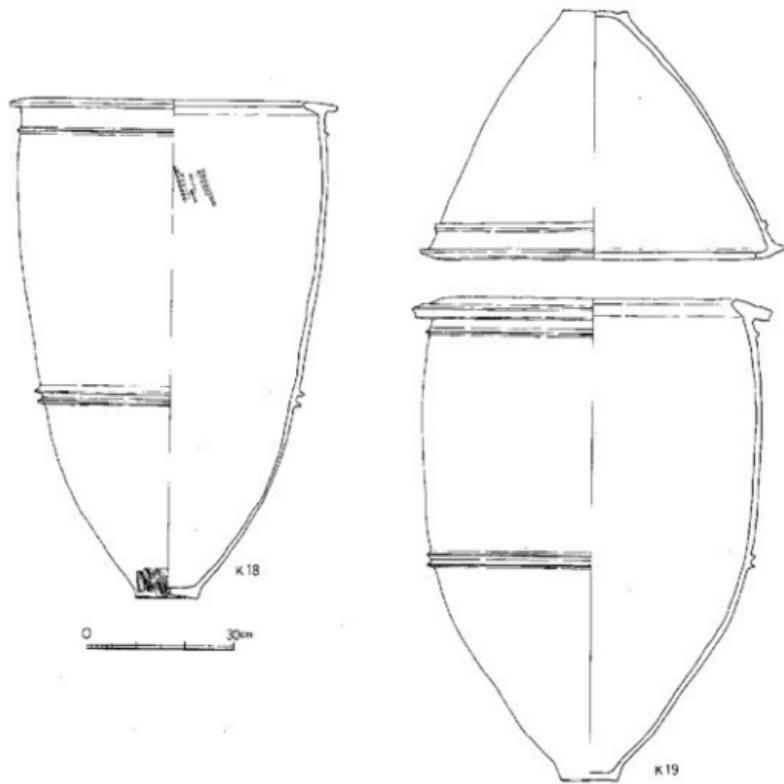


Fig. 17 K 18・19 壱棺実測図 (1/12)

1 壺棺墓一大形棺一

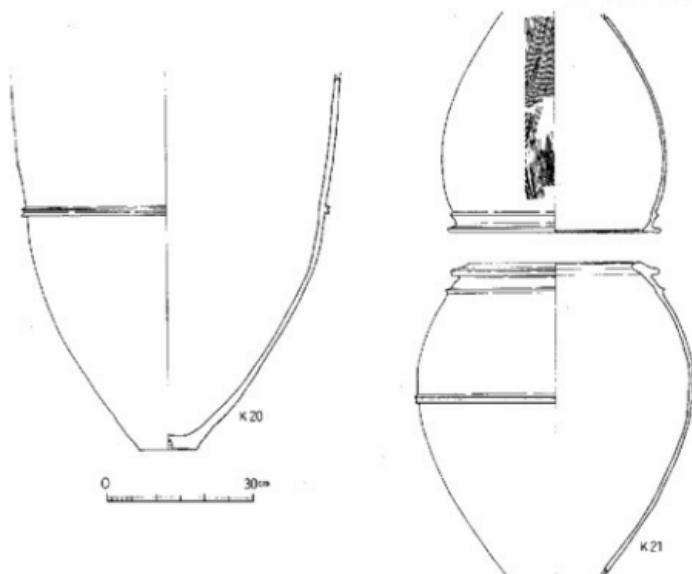


Fig. 18 K20・21 壺棺実測図 (1/12)

下棺の壺は、倒梨形の胴部に、肥厚外傾した「T」字状の口縁部が付く。口縁下に断面三角形の突帶、胴部中位に断面「M」字状の突帶がそれぞれ1条めぐる。底部は消失して不明である。外口径43.2cm、胴部最大径58.0cm、残存器高64.2cmを測る。色調は暗い灰黒褐色を呈し、胎土には1~3mmの砂粒を含むが良胎で、焼成は堅緻である。器面調整は内外面ともハケ口調整の後、きれいにナデ消されている。胴部中位から口縁部にかけて部分的に黒斑が認められる。

K 2 3 壺棺墓 (Fig. 19・20 PL. 10・11・42)

調査区中央部やや南側で出土した接口式の成人用壺棺墓である。壺と壺との組み合わせで、下壺の底部はK21の下にもぐり込む。主軸はN-34°30'-Eにとり、壺棺の埋置角度は15°となる。

上棺は、端部が肥厚した「く」の字状の口縁部とその下に三角突帶を1条持つ中形の壺である。やや赤味を帯びた灰色を呈し、胎土には1~4mm大の砂粒を多く含む。焼成は良くなく軟質である。器面調整は、内外ともハケ口調整の後ナデ消しを行なっている。底部から胴部上位にかけては黒斑が認められる。外口径41.1cm、胴部最大径47.4cm、器高61.7cmで、底径は10.6cmとなり、幾分肥厚する。

下棺は大形の壺で、卵形にふくらみを持った器形を有し、胴部中位には断面「コ」の字状の突帶を2条めぐらす。胴部突帶から上部は内弯気味に立ち上り、頭部で縮りながら強く屈折し

III 調査の記録

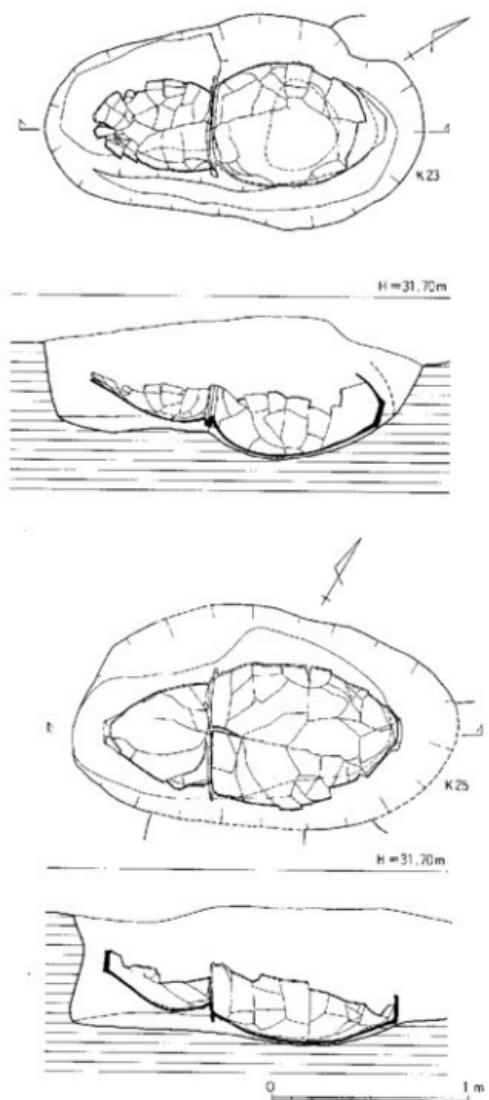


Fig. 19 K 23・25 壱棺墓出土状況図 (1/30)

て口縁部へ至る。上端面はほぼ水平で、内口唇には打ち欠きが施されている。色調は茶褐色から赤褐色を呈し、1~3 mm大の砂粒を多く含む胎土を持つ。焼成は良好で堅緻である。器面内側にはハケ目調整痕が僅かにみられ、外側はハケ目調整の後ナデ消しが加えられている。外口径44.8cm、器高87.1cm、胴部最大径64.9cm、底径12.4cmを測る。

K 25 壱棺墓 (Fig. 19・20 PL. 11・42)

調査区中央部南寄りで検出された接口式の壹棺墓で、K 26壹棺墓の墓壙に切られている。壹と壹との組み合わせを持ち、8.5°の傾斜角度で埋置されている。

上壹は「く」の字状の口縁部を有し、口縁下に三角突帶を1条めぐらす。外口径49.5cm、器高53.4cm、胴径52.5cm、底径11.0cmを測る。淡黄色を呈し、胎土は1~2mmの砂粒を多く含み、粗くなっている。焼成は良く

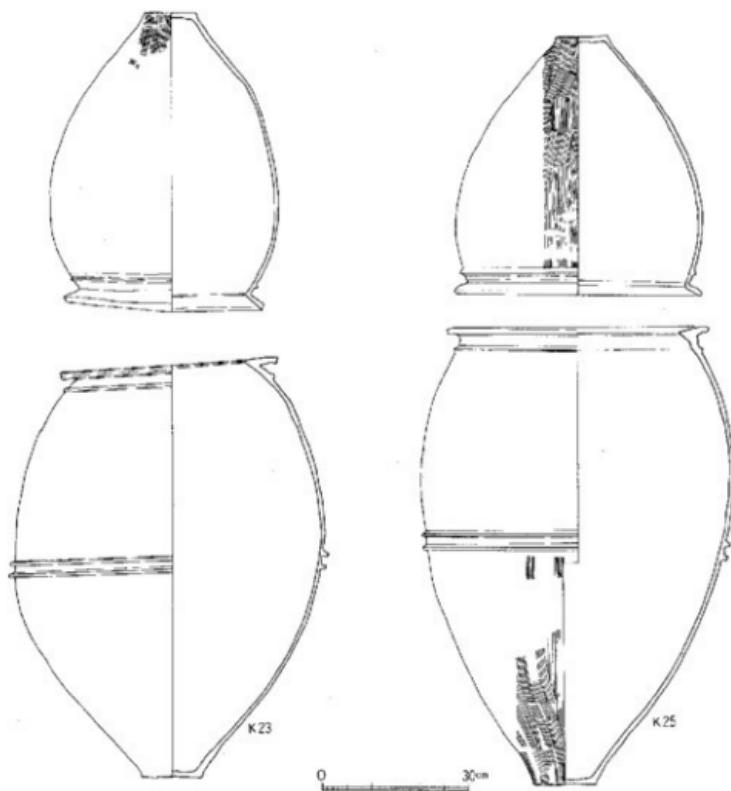


Fig. 20 K23・25 壳棺実測図 (1/12)

ない。内面はナデ調整、外面はハケ目調整が施され、胴部中位を中心に黒斑が認められる。

下蓋は、胴部突帯からやや内寄気味に立ち上り、「T」字状に近い口縁部へ続く。上端面は内傾し、内口唇は内側へ三角状に突出する。口縁下には1条の断面三角形の突帯をめぐらし、胴部中位に断面「コ」の字状の突帯を2条貼付する。内面は灰褐色、外面はやや赤味を帯びた灰色を呈する。調整は内外面ハケ目調整の後ナデ消しを行なっているが、外面下半部はハケ目痕が残る。胎土は、1~2mmの砂粒を含むが良胎であり、焼成は堅緻である。口縁下突帯から底部にかけて、幅20~30cmの黒斑が認められる。外口径54.2cm、胴部最大径64.7cm、底径12.8cm、器高95.0cmを測る。

III 調査の記録

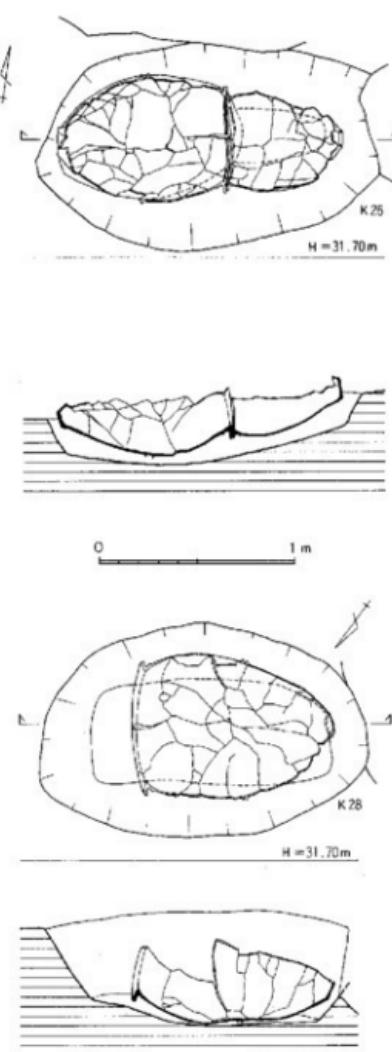


Fig. 21 K 26・28 墓棺墓出土状況図 (1/30)

K 26 墓棺墓 (Fig. 21・22)

Pl. 12・43)

調査区中央部南寄りで出土し、K 25 墓棺墓を切り K 27、K 42 墓棺墓に切られる関係にある。甕と甕とを組み合せた接口式墓棺墓で、主軸は略東西方向の N-81°30' - E にとる。棺の埋置角度はやや上窓が高く 6.5° を測る。

上棺の甕は、外口径 40.4cm、器高 58.9cm を測り、「く」字状に屈折した口縁部と、口縁下に 1 条の三角突帯を持つ。淡黄色を呈し、胎土に 1 ~ 2mm 程度の砂粒を多量に含む。焼成はやや良好である。内面は指おさえの後ナデ調整が加えられ、一部ハケ目痕も観察される。外面はハケ目調整が施され、胴部から底部にかけて部分的に黒斑が認められる。

下棺は、ふくらみを持った大形の甕で、胴部突帯から内窓気味に立ち上り、頭部で縮まりながら屈折して逆「L」字状に近い口縁部へと続く。上端面はやや内傾し、端部が肥厚する。調整は、内外面ともハケ目溝整の後ナデ消されているが、外面はハケ目痕が残る。器色は薄い赤褐色から暗灰褐色を呈し、底部から胴部にかけて黒斑が認められる。胎土には 1 ~ 2mm の砂粒を含むが良胎であり、焼成堅微である。外口径 46.0cm、器高 83.0cm、胴部最大径 63.2cm、底径 11.0cm を測る。

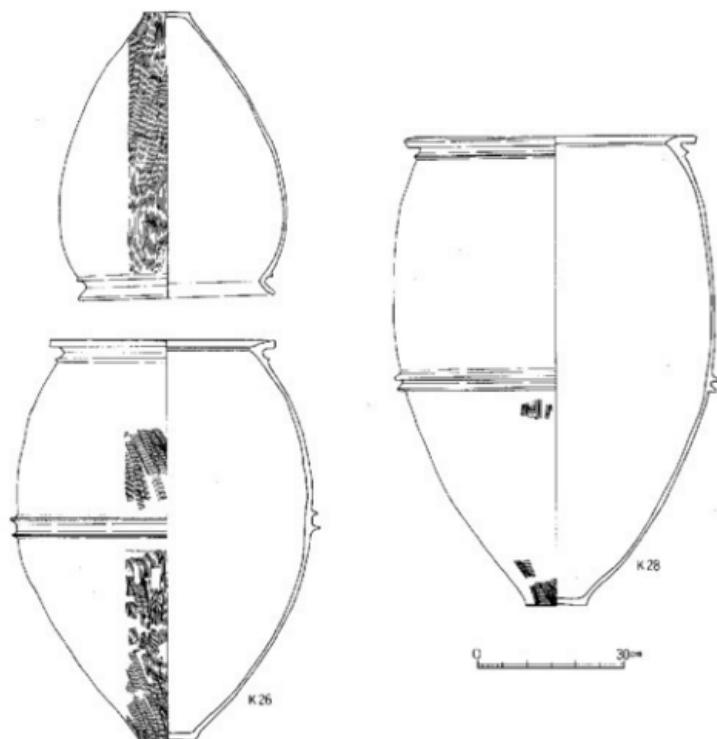


Fig. 22 K26・28 墓棺実測図 (1/12)

K28 墓棺墓 (Fig. 21・22 PL. 13・43)

調査区中央部南寄りで出土し、K08の墓壇を切って埋置されている単式の墓棺墓である。主軸は N-52°30' - E 方向にとり、埋置傾斜角度は約15°である。

壺は、外径60.2cm、器高97.4cmを測る大形で、肩部突帯からやや内弯気味に立ち上り、頸部で縦まりながら強く外方へ屈折する口縁部を持つ。口縁直下に1条の三角突帯、胴部に高い「コ」の字状突帯を2条めぐらす。胴部最大径は67.0cmで、突帯以下はすばまりながら徑12.7cmの底部へ移行する。器面は褐色を呈し、胎土には1~3mm大の砂粒を少量含む。焼成は

III 調査の記録

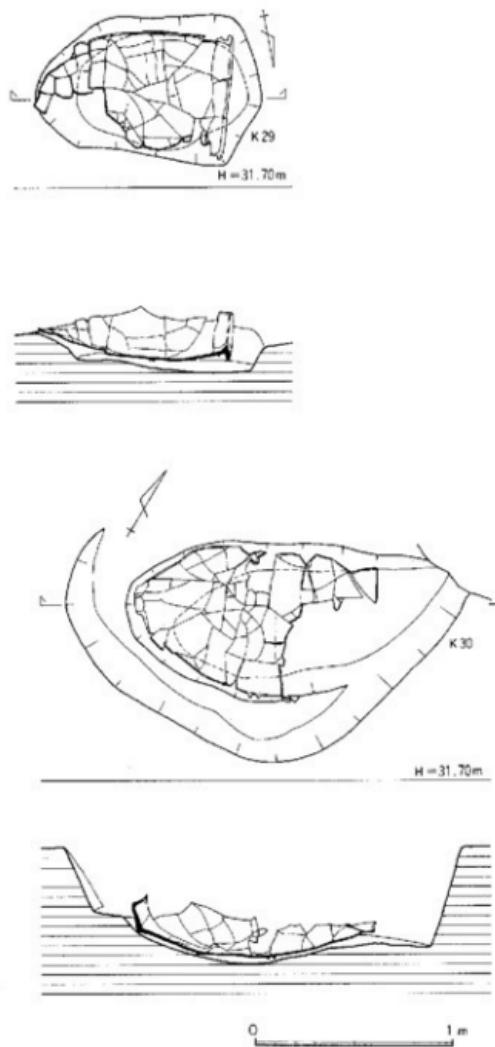


Fig. 23 K 29・30 壳椎墓出土状況図 (1/30)

良好で堅緻である。調整は内外面共ハケ目調整の後ナデ消しが行なわれている。胴部中位を中心とし黒斑が認められる。

K 29 壳椎墓 (Fig. 23・24 PL. 13・43)

調査区南東部で検出された単式の壳椎墓である。主軸は S-80°30'-E にとり、5°の傾斜角度を持って埋置されている。上半部はかなり削平を受け、明確な墓壙を確認することができなかった。

臺は、胸部突帯から垂直に立ち上がり、「T」字状の口縁部へと移行する。口縁直下には三角突帯1条、胸部には断面「コ」の字状の突帯が2条めぐる。胴部突帯には刻み目が施される。底部は消失する。赤褐色を呈し、粘土は精良で、焼成は堅緻である。内外面ともハケ目調整の後ナデ消しが行なわれているが、外面下半部はハケ目が明瞭に残る。胴部上位に小さな黒斑が認められる。外口径62.8cm、胴部最大径63.8cm、残存器高は

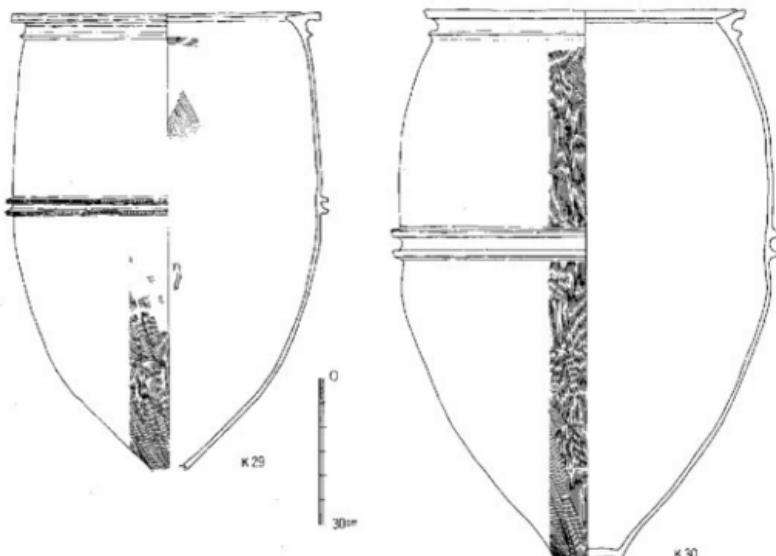


Fig. 24 K29・30 壺棺実測図 (1/12)

88.9cmを測る。

K 3 0 壺棺墓 (Fig. 23・24 PL. 14・44)

調査区東南部で検出され、K29の南側に隣接する。削平が激しく明確なことは分らないが、単式の壺棺墓と考えられる。主軸はN-59°-Eにとり、11.5°の傾斜角度で埋置されている。

壺は、外口径66.0cm、胴部最大径84.0cm、底径14.4cm、器高112.3cmを測る大型品である。胴部中位に断面「コ」の字状の突帯を2条貼付し、内傾する「T」字状の口縁下にも1条の突帯がめぐる。色調は淡い灰褐色を呈し、胎土には1~3mm大の砂粒を混入するが良好で、焼成も堅緻である。調整は、内面がナデ、外面はハケ目調整となる。胴部突帯をはさんで、胴部上位と下位に2箇所黒斑が認められる。

K 3 2 壺棺墓 (Fig. 25・26 PL. 15・44)

調査区東南部で出土し、一部K30の墓壙に切られている。割と深い位置に埋置されているが、最初から口縁部と底部は確認することができなかった。主軸はS-11°-W方向にとり、ほぼ水平に埋置されている単式の壺棺墓である。

Ⅲ 調査の記録

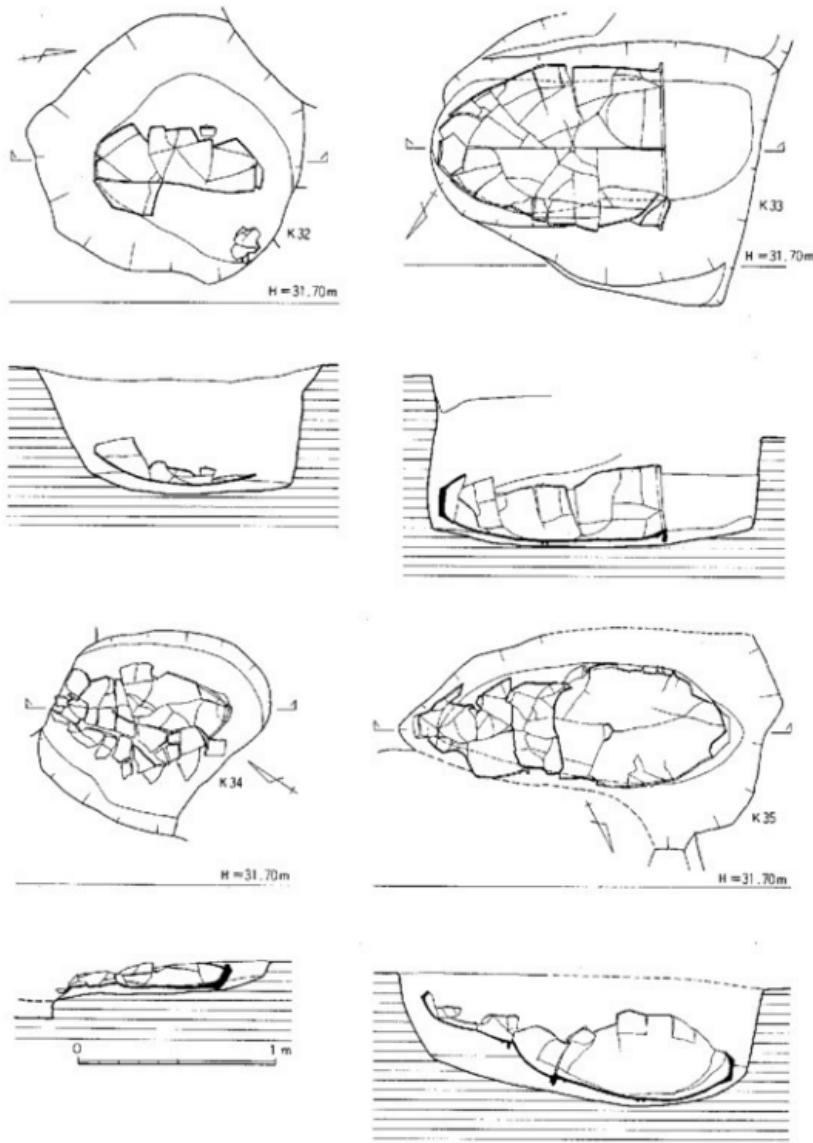


Fig. 25 K 32-35 寛裕墓出土状況図 (1/30)

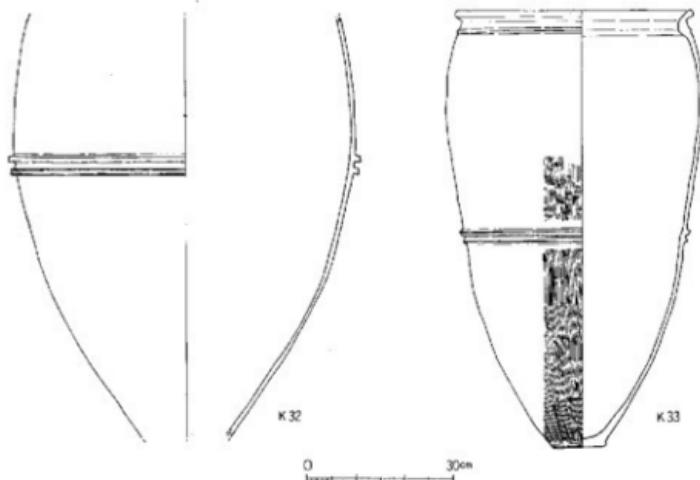


Fig. 26 K 32・34 墓棺実測図 (1/12)

壺は、胴部にふくらみを持つ器形で、胴部中位に断面「コ」の字状の突帯を2条施す。突帯部分の径は71.5cmになり、口縁部及び底部は欠失して不明である。色調は灰褐色を呈し、胎土に砂粒を少し含む。焼成は良好で堅緻である。内外面ともナデ調整が施され、黒色顔料の付着が認められる。墓壇内には丹塗り研磨の漆片が混入していた。

K 3 3 墓棺墓 (Fig. 25・27 PL. 15・44)

調査区東側南寄りで出土した単式の壺棺墓である。主軸はS-59°-W方向にとり、壺の埋置角度は5°である。

壺は、外口径76.0cm、胴部最大径78.0cm、底径14.6cm、器高110.8cmの大形で、胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。明るい黄灰色を呈し、内面はナデ、外面にはハケ目調整が施される。口縁部は逆「L」字状に発達し、端部が肥厚する。口縁下と胴部中位に三角突帯をそれぞれ2条施す。

K 3 4 墓棺墓 (Fig. 25・26 PL. 16・44)

調査区東側中央部寄りに位置し、K33の北側で検出された。棺の埋置位置が浅いため、上部は殆ど削平されて実体が明らかでない。一応単式の壺棺墓として取り扱っておきたい。主軸は、N-34°30'-W方向にとり、水平に近い状態で埋置されている。

壺は、外口径52.0cm、器高90.0cmで、口縁部は「く」の字状を呈し、直下に低い三角突帯が

III 調査の記録

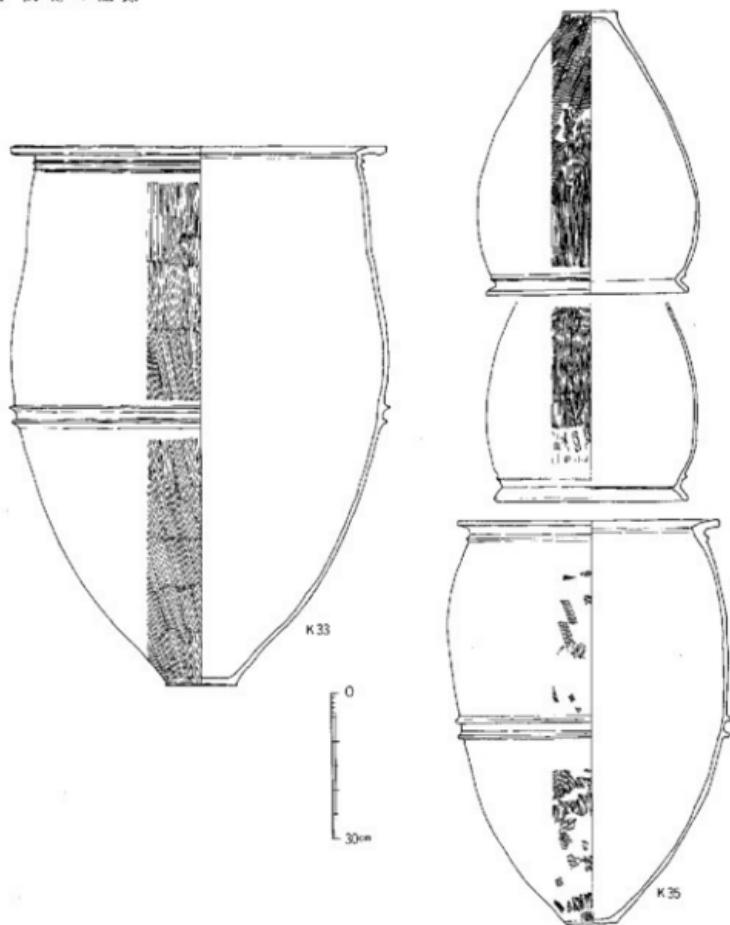


Fig. 27 K 33・35 壺检実測図 (1/12)

1条めぐる。胴部上位はやや張りを持ち、以下はすぼまりながら胴部中位に断面「コ」の字状と断面三角形の突帯を2条貼付する。胴部突帯以下は、さらに縮りながら底部へ移行する。淡橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。焼成は良好で堅緻である。調整は内面がタテ方向のナデ、外面はハケ目調整の後、ナデ消されているが、下半部はハケ目調整痕が明瞭に残る。胴部突帯の貼り付け部分は少し歪つになっている。

K 3 5 壺棺墓 (Fig. 25・27)

PL. 16・45)

調査区東側中央部で検出された三連の接口式壺棺墓である。主軸はN-65°-W方向にとり、壺の埋置角度は13.5°を測る。全て壺の組み合わせである。

上棺は、中形の壺で外口径41.3cm、胴部最大径45.2cm、器高58.4cmで、茶褐色～灰褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。「く」の字状の口縁部を有し、直下に三角突帯1条を貼付する。内外面ともハケ目調整の後ナデ消しを行なうが外面にはハケ目痕が残る。

中位の壺は、底部打ち欠きで、「く」の字状の口縁部を有し、直下に丸味を持った三角突帯が1条めぐる。内面はナデ、外面はハケ目調整が施される。外口径39.7cm、胴部最大径43.0cm、残存高40.2cmで灰褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

下壺は、外口径53.6cm、胴部径56.1cm、底径10.4cm、器高83.4cmを測る。赤褐色を呈し、胎土やや粗で焼成良好である。外面はハケ目調整の後ナデ消されているが、下半部はハケ目痕が残る。口縁部は逆「L」字状を呈し、内口唇が内側に突出する。口縁下に三角突帯1条、胴部中位に断面「コ」の字状突帯が2条めぐる。

K 3 6 壺棺墓 (Fig. 28・29)

PL. 16・45)

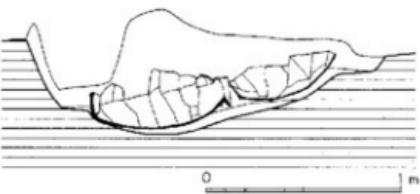
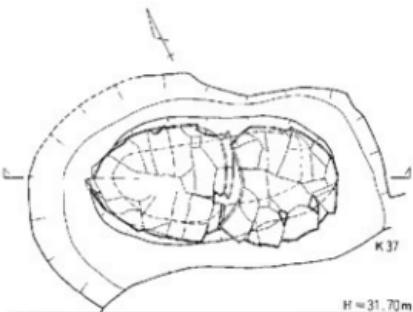
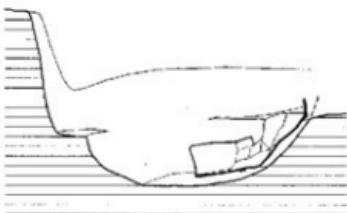
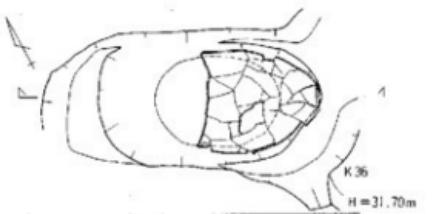


Fig. 28 K 36・37 壺棺墓出土状況図 (1/30)

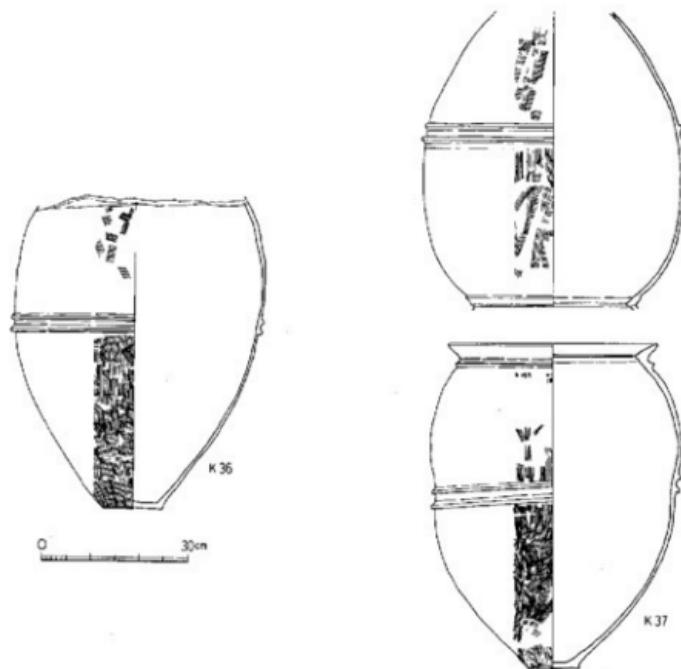


Fig. 29 K 36・37 墓棺実測図 (1/12)

調査区東側中央部のK 35北側に隣接する。口縁部を打ち欠いた壺と壺の組み合わせで、主軸はS-63°-Eにとり、埋置角度は上棺が低い-8.5°である。上棺は搅乱がひどく、誤って取り上げてしまった。

上棺は壺で、胴径41.0cm、底径10.6cm、残存高32.0cmを測る。外面に丹塗りが施されるが磨滅している。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好である。胴部に「コ」の字状突帯が2条めぐる。

下棺は、胴部中位に「コ」の字状突帯を2条めぐらし、突帯から上は内弯気味に立ち上がる。胴径46.5cm、底径12.4cm、残存高62.3cmを測り、明るい灰褐色を呈する。胎土には1~3mmの砂粒を多く混入しやや粗い。焼成は良好である。外面には調整のハケ目痕が残る。他はナデ消す。

K 37 墓棺墓 (Fig. 28・29 PL. 16・17・46)

調査区東側中央部に位置し、K 36の北側に隣接して検出された接口式の墓棺墓である。上下棺とも壺と壺との組み合わせで、主軸はS-62°-Eにとり、埋置角度は11.5°である。

1 烧棺墓一大形棺一

上棺は、口縁部打ち欠きで、底部は削平によって消失する。胴部は丸味を持ってふくらみ、頭部は縮まる。頸部に痕跡的な三角突帯が1条めぐり、胴部には断面「コ」の字状突帯が2条めぐる。色調は灰色を呈し、胎土には砂粒を混入するが良胎である。焼成は余り良くなく、やや軟質である。胴部最大径53.4cm、残存高59.7cmを測る。外面はハケ目調整の後ナデ消されているが、ハケ目痕が残る。

下棺は、胴部中位に「コ」の字状突帯を2条施し、突帯から上方は内弯気味に立ち上がる。頭部は縮り、屈折して「く」の字状の口縁部へ続く。口縁下には鋭い三角突帯を1条めぐらす。淡赤褐色を呈し、胎土は精良にして焼成堅緻である。外面にはハケ目調整が施され、上半部と底部付近はナデ消されている。外口径42.8cm、胴部最大径51.3cm、底径10.2cm、器高67.0cmを測る。胴部下半部と対角方向の肩部に2箇所黒斑が認められる。

K 40 麟棺墓 (Fig. 30・31)

PL. 18・46)

調査区中央部東端で検出された麟棺墓である。現代の井戸に切られており、詳細は不明であるが、一応單式の麟棺墓として取り扱っておきたい。主軸は略南北方向で、S-11°-E にとる。埋置角度は、口縁部側

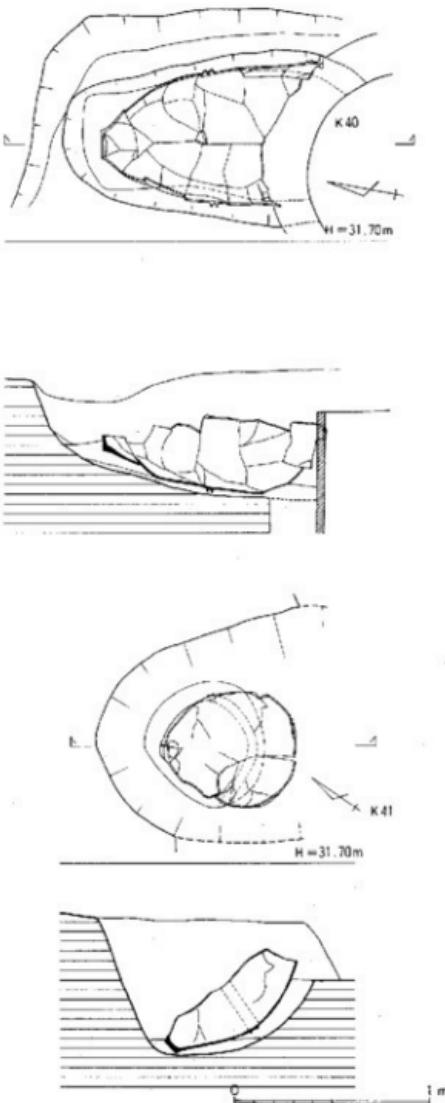


Fig. 30 K 40・41 麟棺墓出土状況図 (1/30)

Ⅳ 調査の記録

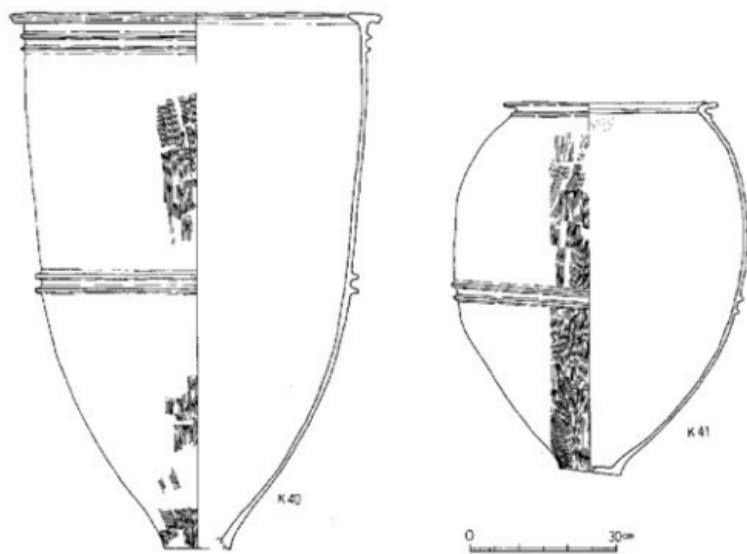


Fig. 31 K40・41 墓棺実測図 (1/12)

が下がっており、 -10° を測る。

壺は、外口径76.2cm、底径13.9cm、器高110.3cmの大形で、「T」字状口縁を有し、口縁下に断面「コ」の字状突帯を2条貼付する。突帯以下は緩やかにすぼまりながら、胴部中位に「コ」の字状突帯2条をめぐらし、それ以下はさらにすぼまりながら底部へ移行する。淡灰褐色を呈し、胎土は精良、焼成も堅緻である。内面はナデ、外面はハケ目調整の後、ナデ調整が加えられている。

K 41 墓棺壺 (Fig. 30・31 PL. 18・46)

調査区中央部で出土。上部が削平されて判然としないが、単式の墓棺壺と考えられる。主軸は S-35°30'-E、埋置傾斜角度は急で 42° を測る。

壺は、外口径44.0cm、胴部径60.0cm、底径12.6cm、器高75.8cmを測り、倒卵形の体部に、逆「L」字状の口縁部を持つ。口縁下に三角突帯1条、胴部に「コ」の字状突帯2条を施す。淡黄褐色を呈し、胎土は良好、焼成はやや軟質である。胴部外面にはハケ目調整痕が残る。

K 4.2 壺棺墓 (Fig. 32・33 PL. 19・47)

調査区中央部で検出され、K 26を切って埋置された接口式の壺棺墓である。壺と壺との組み合わせで、主軸はN=38°30' Eにとり、埋置角度は7°である。

上棺は、外口径40.8cm、胴部径48.1cm、底径12.0cm、器高65.7cmを測る中形の壺である。「く」の字状の口縁部を有し、口縁下に三角突帯を1条施す。胴部最大径は上半部にある。明褐色～淡褐色を呈し、胎土には2～3mm大の砂粒を多量に含み、粗い。焼成はやや良好である。内面はナデ調整、外面はハケ目調整が施される。

下棺は、大形の壺で外口径48.0cm、胴部径83.2cm、底径12.8cm、器高93.0cmを測る。内口唇が内側に突出した

逆「L」字状の口縁部を有し、口縁下に三角突帯が1条めぐる。胴部はふくらみ、中位にやや大きめの「コ」の字状突帯2条を貼付する。暗黄褐色を呈し、粗い胎土を持つ。焼成はやや軟質である。内外面ともナデ調整を施すが、内面にはハケ目痕が残る。

K 4.3 壺棺墓 (Fig. 32・33 PL. 19・47)

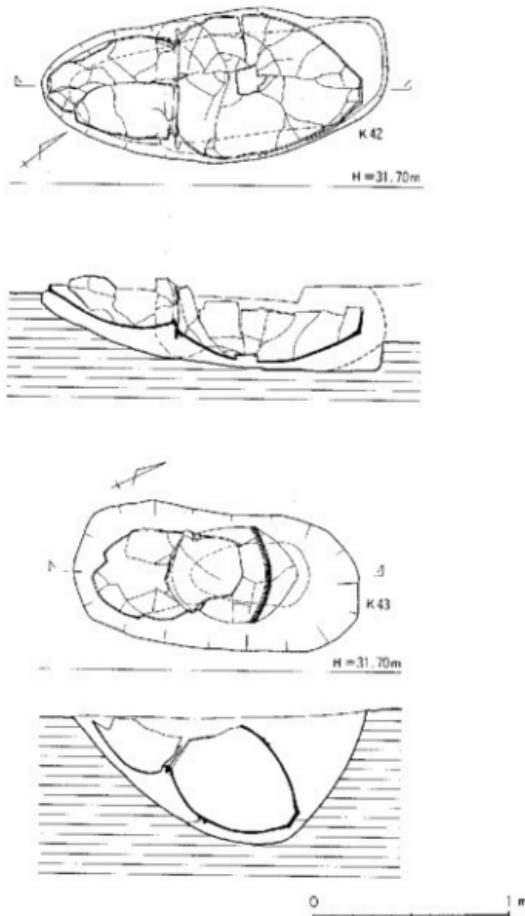


Fig. 32 K 42・43 壺棺墓出土状況図 (1/30)

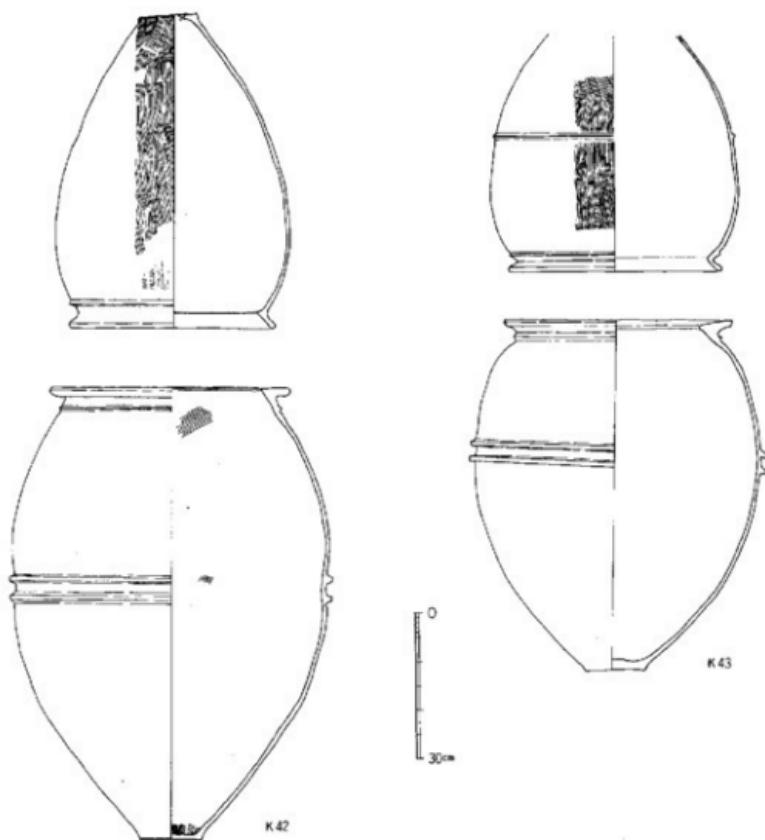


Fig. 33 K42・43 壺棺灰測図 (1/12)

調査区中央部東寄りで検出された接口式の壺棺墓で、壺と壺とを組み合わせ、 37° の傾斜をもって埋置する。主軸はN- 25° -Eにとる。

上棺の壺は、丸味を持った胴部に「く」の字状の口縁部を有し、口縁下と胴部にそれぞれ1条の三角突帯を施す。外口径43.8cm、胴部径51.0cmを測り、底径及び器高は底部が削平されているため実長が出ない。残存器高は48.0cmである。淡赤褐色を呈し、胎土は精良にして、焼成良好である。外面はハケ目調整、内面はナデ調整が施され、外面下半部に黒斑が認められる。

下棺は、胴部の張った倒卵形を呈し、強く屈折した口縁部を有する。口縁直下に三角突帯1条と胴部に「コ」の字状突帯2条を施す。外口径46.8cm、胴部径60.3cm、底径12.2cm、器高72.4cmを測る。色調は内外面とも淡灰褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。底部近くにハケ目痕が残る。

K 4 4 壱棺墓 (Fig. 34・35

PL. 20・47)

調査区中央部で出土した接口式の壹棺墓で、鉢と壺の組み合わせにあら。N=70°-E方向に主軸をとり、8.5°の傾斜角度で埋置される。

上棺の鉢は、丸味を持った体部に外傾する「T」字状口縁部を有する。口縁直下には2条の三角突帯がめぐり、外口径69.6cm、底径12.0cm、器高49.6cmを測る。茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。外面にタテ方向のハケ目調整痕が残る。

下棺の壺は、胴部中位に断面「M」字状の突帯を1条めぐらし、突帯上方は垂直に立ち上がり、内口唇の発達した「T」字状口縁へ続く。外口径67.0cm、胴径59.0cm、底径12.0cm、器高99.0cmを測る。内外面ともナゲ調整が施され、胴部下半に黒斑が認められる。色調は黄灰色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

K 4 6 壱棺墓 (Fig. 34・35 PL. 20・48)

調査区中央部で検出された呑口式の壹棺墓で、K44の北側に隣接し、K50の墓壙に切られている。主軸はS-24°30'-Eにとり、傾斜角度はほぼ水平で1°である。

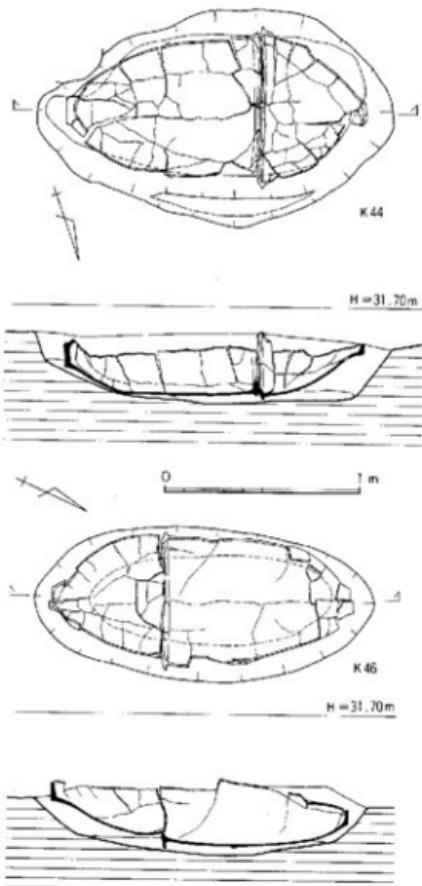


Fig. 34 K 44・46 壱棺墓出土状況図 (1/30)

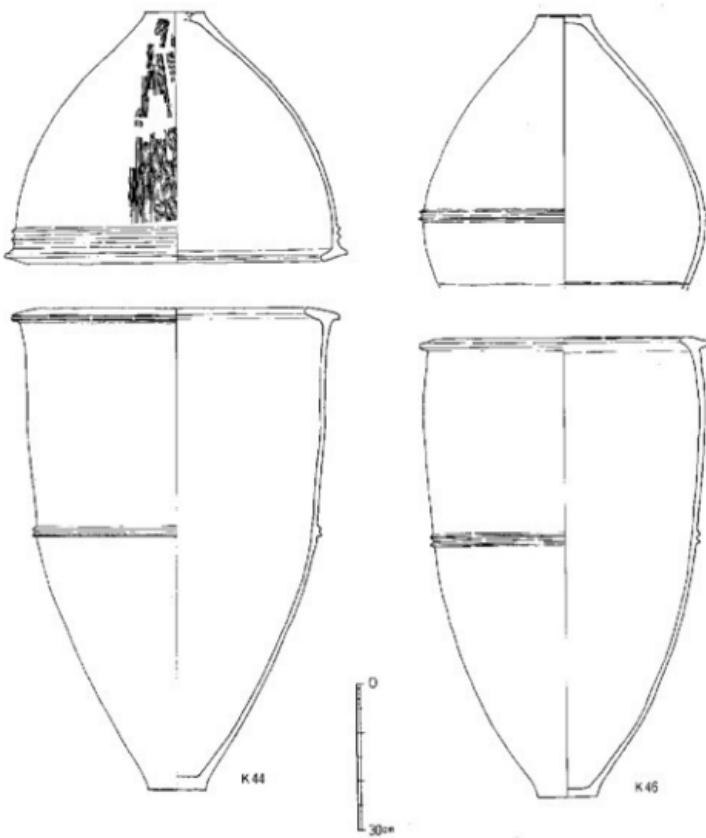


Fig. 35 K44・46 壺棺実測図 (1/12)

上棺は、口縁部打ち欠きの壺で、胴部径59.6cm、底径11.2cmで、残在器高は55.2cmを測る。暗灰褐色を呈し、胎土は精良にして、焼成は堅微である。胴部に三角突帯2条をめぐらす。

下棺は、外口径59.4cm、胴径57.6cm、底径12.0cm、器高90.0cmを測る壺で、「T」字状口縁を有し、胴部に三角突帯2条を施す。茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

K 47 壺棺墓 (Fig. 36・37 Pl. 21・48)

調査区中央部で検出された、鉢と壺組み合わせの接口式墓棺墓である。K48の墓壙を切っているが時期的な差はない。主軸は南北方向をとり S- $8^{\circ}30'$ -E で、埋置角度はほぼ水平である。

上棺の鉢は、削平によって底部を欠失し、全体の様子は分らないが、外口径72.0cm、残在器高42.0cmを測る。逆「L」字状の口縁部を有し、口縁下に三角突帯が1条めぐる。黄褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。外面はハケ目調整、内面にはナデ調整が施される。

下棺は大形の壺で、外口径67.8cm、胴部径66.0cm、底径13.0cm、器高104.2cmを測り、やや外傾する「T」字状口縁を有する。口縁下に1条、胴部に2条の三角突帯を貼付する。灰褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。内外面ともハケ目調整の後ナデ消されているが部分的にハケ目痕が残る。

K 4 8 墓棺墓 (Fig. 36・37

PL. 21・49)

K47の南側に位置し、調査区の中央部で検出された接口式の墓棺墓である。鉢と壺組み合わせ、主軸は S- 65° -W方向にとり、7°の傾斜角度を持って埋置される。上面は削平によってかなりカットされている。接口部には黄白色粘土の目貼りが確認された。

上棺の鉢は、削平によって底部を欠失し、外口径68.0cm、残在器高24.0cmを測る。逆「L」字状の口縁部を有し、内口唇は内側に突出する。口縁下に三角突帯を1条貼付する。内面はナ

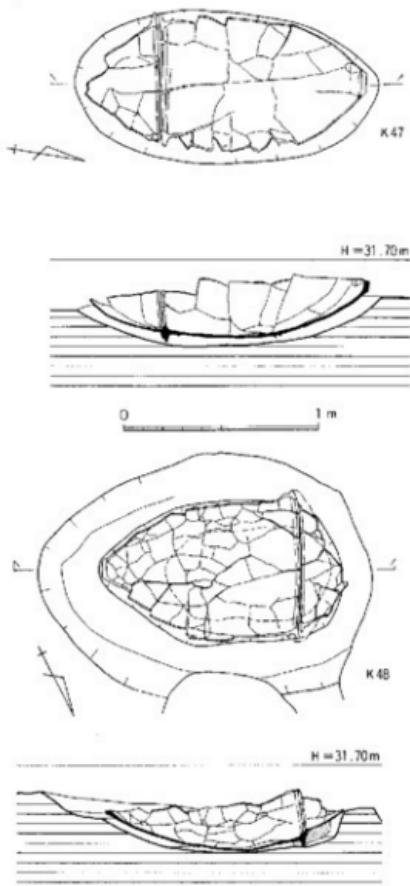


Fig. 36 K 47・48 墓棺墓出土状況図 (1/30)

III 調査の記録

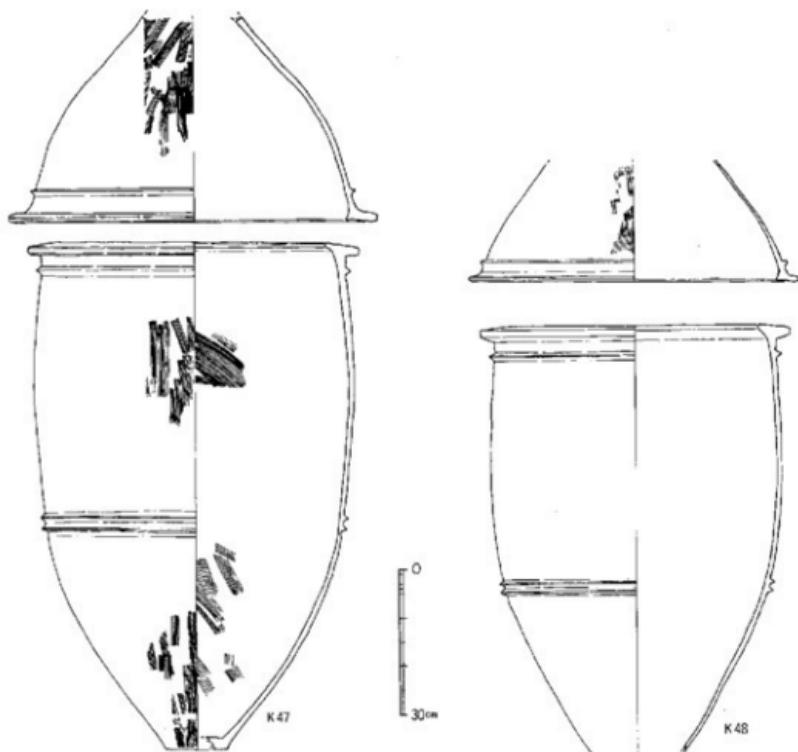


Fig. 37 K47・48 壺棺実測図 (1/12)

ア、外面にはハケ目調整痕が残る。淡褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

下棺は、削平により底部を欠尖する大形の壺で、肥厚した「T」字状口縁部を持つ。胴部中位よりやや下がった位置に三角突帯を2条貼付し、それより上方は垂直気味に立ち上がり口縁部へ移行する。口縁下には鋭い三角突帯を1条めぐらす。暗灰褐色を呈し、胎土は1mm程度の砂粒、雲母を含む精良なもので、焼成は良好である。外口径73.2cm、残在器高87.8cmで、内外面ともナデ調整が加えられている。胴部下位に黒斑が認められる。

K 4 9 壺棺墓 (Fig. 38・39 PL. 22・49)

調査区中央部で検出された接口式の壺棺墓で、鉢と壺の組み合わせになる。北側のK51と切り合になるが、墓壙では明確にできなかった。壺の特徴からK51よりもやや古い様相を持って

いる。主軸は S - 45° - W に方向をとり、埋置角度はほぼ水平で 3.5° を測る。

上棺は、外口径 72.6cm、底径 13.0cm、器高 47.3cm を測る鉢形土器で、「T」字状口縁を有し、口縁直下に三角突帯を 1 条施す。赤褐色を呈し、内外面ともナデ調整が施される。砂粒を多く含む粗い胎土を持ち、焼成は良好である。

下棺は、大形の売形土器で、胸部突帯から垂直気味に立ち上がり、頭部がやや縮まって内口縁が肥厚する「T」字状口縁へ続く。口縁下に突帯はなく、胸部に三角突帯が 2 条めぐる。肩部突帯以下は、すばまりながらやや上げ底の底部へ移行する。黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含むが、焼成は良好で堅硬である。内面にはナデ、外面はハケ目調整の後横ナデが加えられている。外口径 66.4cm、胸径 67.6cm、底径 12.8cm、器高 103.5cm を測る。

K 51 売棺墓 (Fig. 38 - 39 PL. 22)

調査区中央部で検出され、K 49 の北側に隣接して埋置されている。上半部は削平されではっきりしないが、単式の

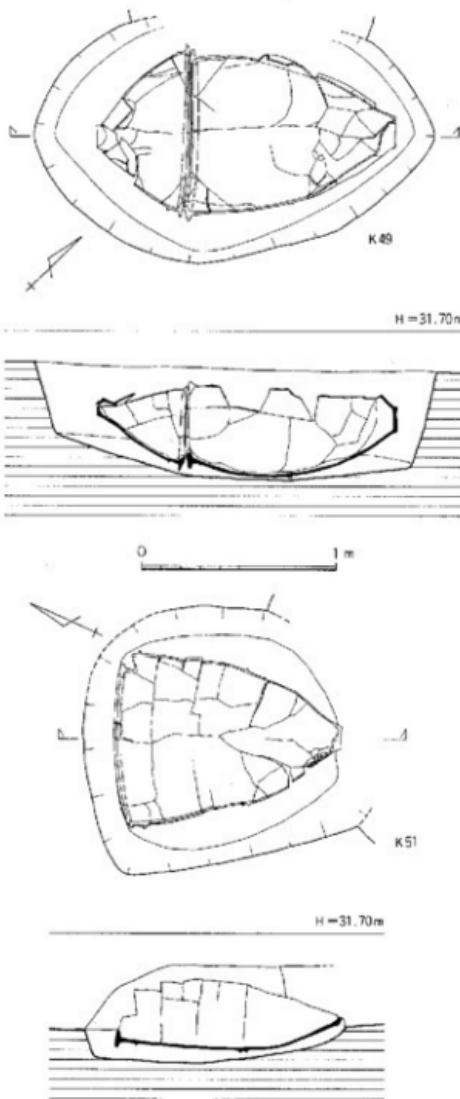


Fig. 38 K 49・51 売棺墓出土状況図 (1/30)

Ⅲ 調査の記録

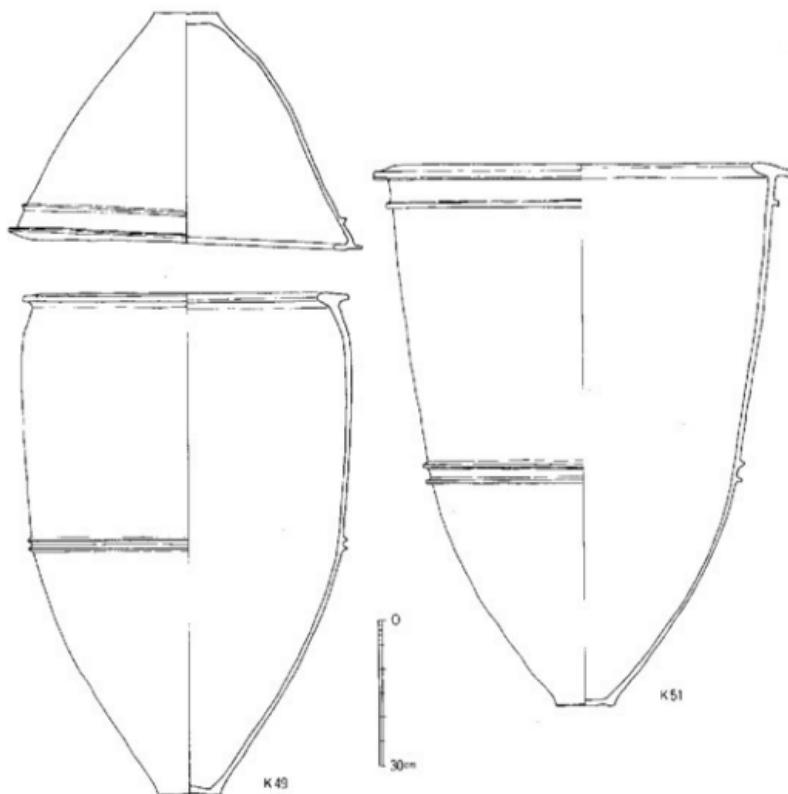


Fig. 39 K49・51 墓棺実測図 (1/12)

墓棺墓と考えられる。主軸はN-23°-W方向にとり、埋置角度は8.5°を測る。

堀は、底部からL1縁部に向って開き気味に立ち上がり、発達した「T」字状口縁を有する。口縁下に1条、胴部下半に2条の断面「コ」の字状突帯を施し、外底面は輪状に窪む。外口径85.2cm、胴径80.4cm、底径12.0cm、器高111.0cmを測る。暗茶褐色を呈し、胎上には1~3mmの砂粒が多く混入し、中には4~6mmの粗砂粒も含む。焼成は下半部がやや甘く軟質である。内外面ともナデ調整が施される。

K 53 墓棺墓 (Fig. 40・41 Pl. 18・50)

1 墓棺墓一大形棺 -

調査区東端部で出土し、K40の西隣りに位置する接口式の壺棺墓である。甕と甕との組み合わせで、主軸はN-5°-W方向にとり、傾斜角度はほぼ水平で3.5°を測る。

上棺は、外口径54.0cm、胴径61.0cm、底径9.4cm、器高73.0cmを測り、胴部にふくらみを持った変形土器である。口縁部は逆「L」字状を呈し、口縁下に三角突帯1条、胸部中位に「コ」の字状突帯2を施す。淡褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

下棺の甕は、外口径46.3cm、胴径62.7cm、底径13.1cm、器高82.6cmを測る。胴部中位よりやや下に垂れ気味の「コ」の字状突帯を2条を施し、突帯より上方は内弯気味に立ち上がる。口縁部は「く」の字状に屈折し、口縁下に三角突帯を1条貼付する。淡灰褐色を呈し、胎土に砂粒を

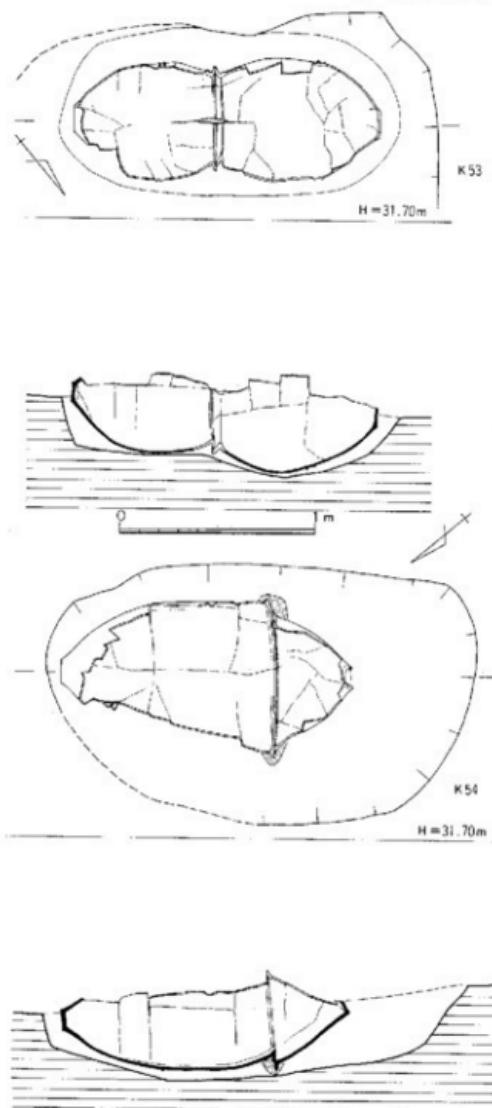


Fig. 40 K53・54 墓棺墓出土状況図 (1/30)

III 調査の記録

含むが、焼成は良好である。内外面ともナデ調整が施され、胸部上位に黒斑が認められる。

K 54 瓢棺墓 (Fig. 40・41 PL. 23・50)

調査区東側中央部で検出された接口式の瓢棺墓である。現代の肥料溜めによって下棺の一部が破壊されている。上棺は鉢、下棺は大甕の組み合わせになっている。S-38°-Wに主軸をとり、埋置角度はほぼ水平で4°を測る。

上棺の鉢は、底部からストレートに広がる体部を有し、「T」字状に近い平坦面を持つ口縁

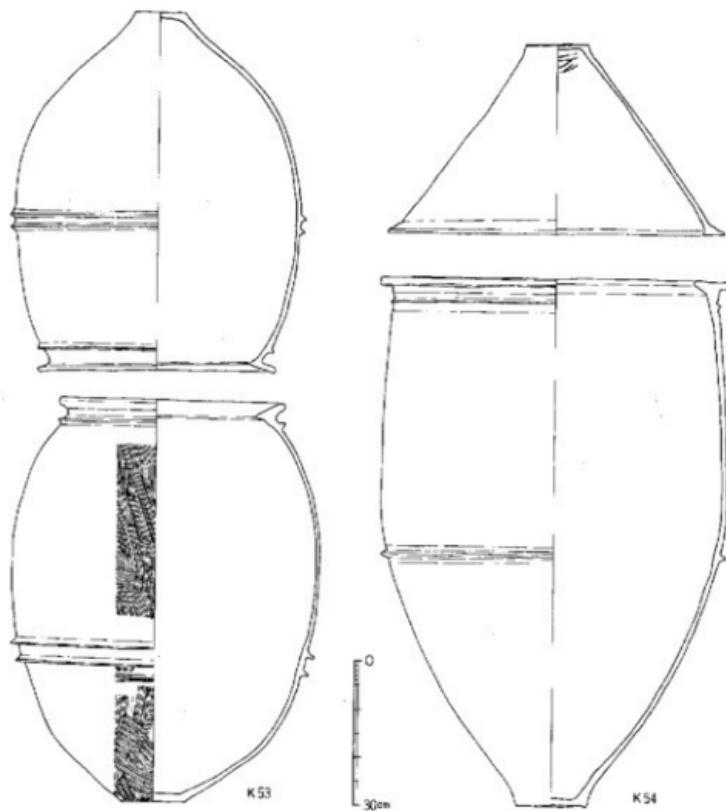


Fig. 41 K 53・54 瓢棺実測図 (1/12)

1 墓棺墓一大形棺

部へ移行する。口縁下に突帯は認められない。外口径69.0cm、底径12.8cm、器高39.2cmを測る。灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。内外面はハケ目調整の後ナデ調整が加えられている。

下棺は、外口径72.0cm、胴径71.2cm、底径14.2cm、器高109.0cmを測る大甕で、「T」字状口縁を有し、口縁下と胴部にそれぞれ1条の三角突帯を施す。胎土に1~3mmの砂粒を多く含むが良胎であり、焼成は堅緻である。淡黄灰色~暗灰色を呈し、外面底部から胴部中位にかけて黒斑が認められる。

K 5 5 墓棺墓 (Fig. 42・43)

調査区東側中央部に位置し、上面は耕作によって削平され、かつ現代の肥料滴め及びK53に切られられており、接口部分の一部しか残在していなかった。主軸はN-75°30'~E方向にとり、埋置角度は判然としない。甕と甕との組み合わせで、接口部には目貼り粘土が観察される。

上棺は胴の張った甕形土器で、「く」の字状に近い口縁部を有し、口縁下に三角突帯1条をめぐらす。淡灰褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。調整は内面がナデ、外面にはハケ目調整が施される。外口径44.8cm、残存器高25.5cmを測る。

下棺の甕は胴中位まで残存し、外口径47.0cm、残存器高33.2cmを測る。暗赤褐色を呈し、胎土に1~3mmの砂粒を含むが良胎で、焼成は堅緻である。内外面ともナデ調整が施される。器形は胴部からしまりながら立ち上がり、「T」字状の口縁部へ続く。口縁下には近接した三角突帯が2条めぐる。胴部上位には黒斑が認められる。

K 5 6 墓棺墓 (Fig. 42・44 PL. 24・51)

調査区東側中央部で検出された接口式の墓棺墓である。K49の北側、K51の東側に位置する。鉢と甕を組み合わせ、主軸は略東西方向のS-87°~Eで、埋置傾斜角度はほぼ水平に近い3°を測る。

上棺の鉢形土器は、体部中位から内弯気味に立ち上がり、上端部が外傾する「T」字状口縁へ移行する。内口唇は肥厚し、口縁下に断面三角形の突帯が2条めぐる。内面は茶褐色、外面は灰褐色を呈し、微細な砂や雲母を含む精良な胎土を持つ。焼成は良好で堅緻である。外口径73.4cm、底径14.0cm、器高46.2cmを測る。内外面ともナデ調整が施される。

下棺は、大形の甕で、胴部中位よりやや下がった位置に、断面三角形の突帯を2条施し、突帯より上方は内弯気味に立ち上がる。口縁部は「T」字状を呈し、上端面が外傾する。外口唇端部は凹線状にやや窪み、口縁下には近接する三角突帯が2条貼付される。胴部突帯以下は、丸味を持ってすぼまり、平底の底部へ移行する。外口径92.2cm、胴部最大径は上位にあり88.2cm、底径15.2cm、器高110.6cmを測る。1~3mmの砂粒を少量混入する良質な胎土を持ち、焼成は器壁が厚く良くない。部分的に生焼けで粘土化している。器色は暗茶褐色を呈し、内面はやや濃い茶褐色となっている。口縁部より胴部中位下にかけて細長い黒斑が認められる。

K 5 7 墓棺墓 (Fig. 42・43 PL. 24・51)

III 調査の記録

調査区東側北寄りで出土した呑口式の甕棺墓である。鉢と甕を組み合わせ、S-53°-Wに

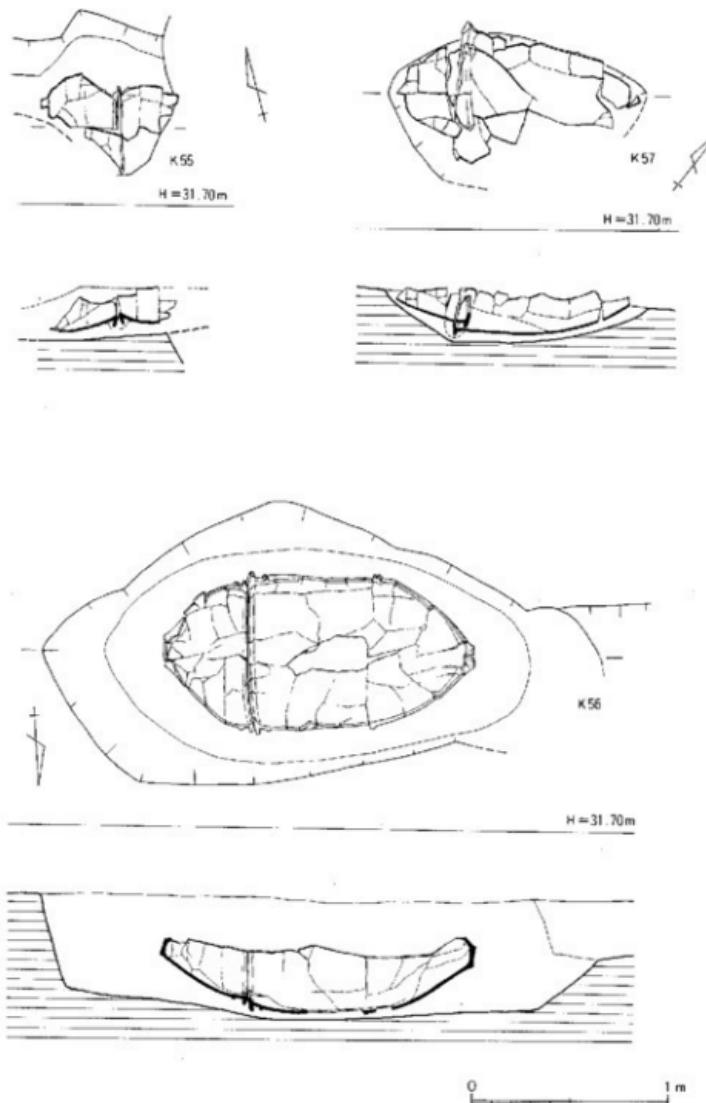


Fig. 42 K 55・56・57 甕棺墓出土状況図 (1/30)

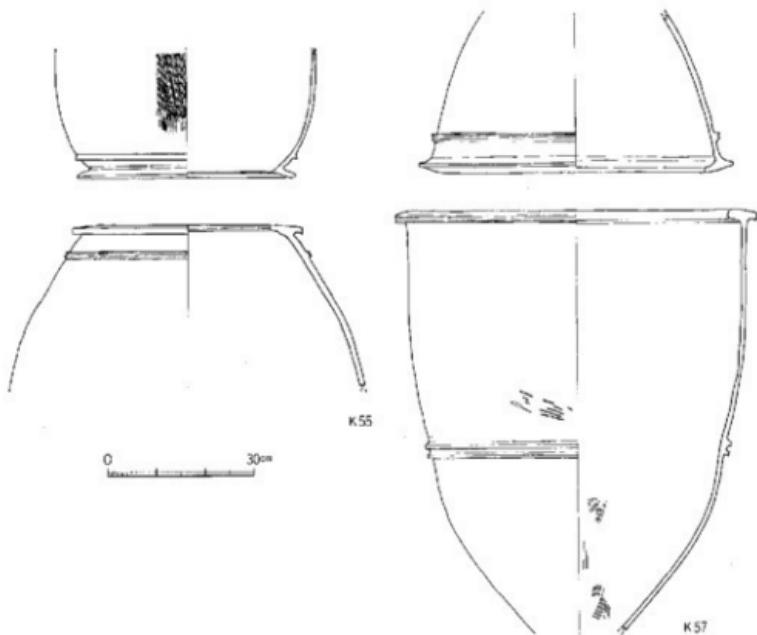


Fig. 43 K55・57 瓦棺実測図 (1/12)

主軸をとり、埋置傾斜角度は 5° である。埋置位置が浅いため耕作による削平が激しく、墓壙、棺とも下半部しか残存していない。

上棺の鉢は、外口径64.0cm、残存器高32.0cmで、底部は削平により欠失する。上端部が外傾する「T」字状口縁を有し、口縁下に断面「M」字状の突帯が1条めぐる。灰褐色を呈し、胎土に3~5mmの砂粒を含む。焼成は良好で堅緻である。調整は内外面とも丁寧なナデ調整が施される。

下棺は、大形の壺形土器で、胴部突帯から垂直気味に立ち上がり、内口唇が肥厚した「T」字状口縁へ移行する。口縁下には突帯は無く、胴部中位よりやや下がった位置に、断面「コ」の字状の突帯が2条めぐる。突帯以下はしまりながら底部へ移行するが、底部は削平で欠失している。外口径74.0cm、胴部径69.0cm、残存器高97.0cmを測る。内面は黄灰色、外面は暗茶褐色を呈し、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好である。内外面ともナデ調整が施されるが、外面胴部にヘラ状の工具痕、内面下半にハケ目痕が残る。胴部上半の相対する面に黒斑が2箇所認

III 調査の記録

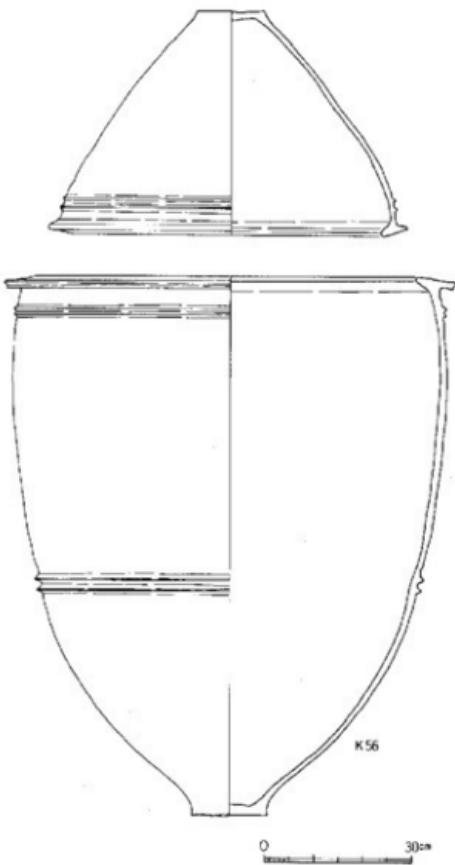


Fig. 44 K 56 壺棺実測図 (1/12)

式の壺棺墓である。鉢と壺を組み合わせ、北東方向のN-48°-Eに主軸をとり、埋置角度はほぼ水平である。

上棺の鉢は、外口径62.0cm、底径13.4cm、器高51.4cmで、「T」字状の口縁部を有し、口縁下に2条の三角突帯を貼付する。やや窪んだ底部から開き気味に立ち上がり、深い鉢形土器になる。外面は暗茶褐色、内面は暗褐色を呈し、胎土は精良にして、焼成堅緻である。内外面と

められる。黒斑は口縁上端部にも広がっている。

K 58 壺棺墓 (Fig. 45・46
PL. 25)

調査区北側東寄りで検出された壺棺墓である。埋置位置が浅いため、上部は削平されており、全体の様子は明らかでないが、単式の壺棺墓と考えられる。主軸はN-73°-Wをとり、壺の埋置傾斜角度は3°である。

壺は胴部中位よりやや下がった位置に断面「コ」の字状突帯を2条めぐらす。突帯より上部はやや内寄気味に立ち上がり、下部はすぼまりながら平底の底部へ移行する。胴径59.5cm、底径12.5cm、残存器高86.0を測る。口縁部は削平によって欠失する。色調は淡灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。外面上位はハケ目調整の後ナデ調整が施され、下位は粗いハケ目痕が残る。内面はナデ調整。胴部上半に黒斑を有する。

K 60 壺棺墓 (Fig. 45・46
PL. 26・52)

調査区北東隅で出土した接口

もナデ調整が施される
が、外面底部近くには
ハケ目痕が残る。

下棺の壺は、胸部中位よりやや下がった位置に、断面三角形の突帯を2条貼付する。胸部突帯より上方は垂直
気味に立ち上がり、内
口唇の発達した「T」
字状口縁へ移行する。
口縁上端部はやや外側
へ傾斜する。口縁下に
は突帯は認められない。
胸部突帯より下半部は、
ストレートに径を減じ
肥厚した底部へ続く。
外底部は僅かに窪んで
いる。色調は内外面と
も暗褐色を呈し、胎土
は砂粒が多く含み、粗
い。焼成は良好で堅敏
である。内外面ともナ
デ調整が施され、胸部
上半に黒斑が認められ
る。法量は、外口径
69.0cm、器高94.5cm、
胸部径62.0cm 底径
11.3cmを測る。上棺の
鉢と下棺の壺は諸要素
が類似しており、同時
に製作された可能性が
高い。上棺と下棺の特

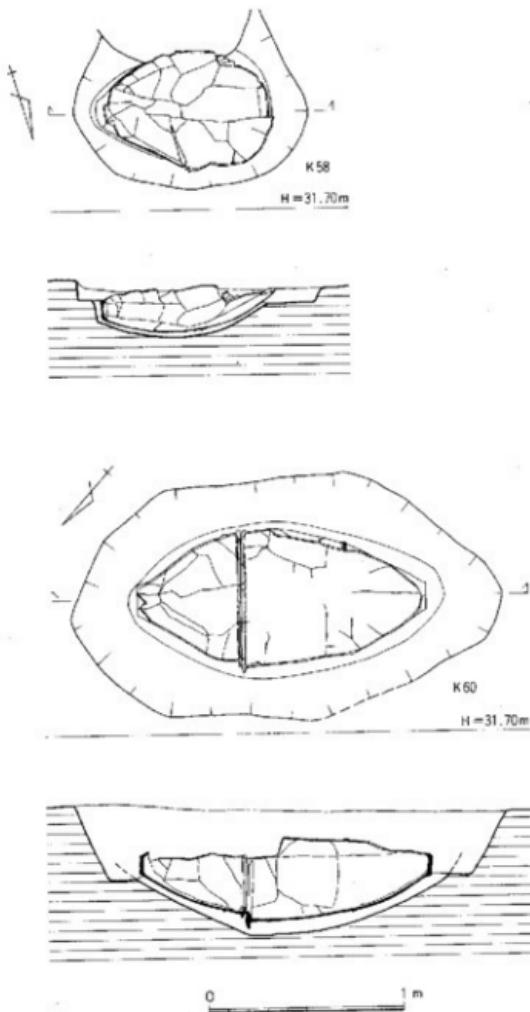


Fig. 45 K58・60 墓棺墓出土状況図 (1/30)

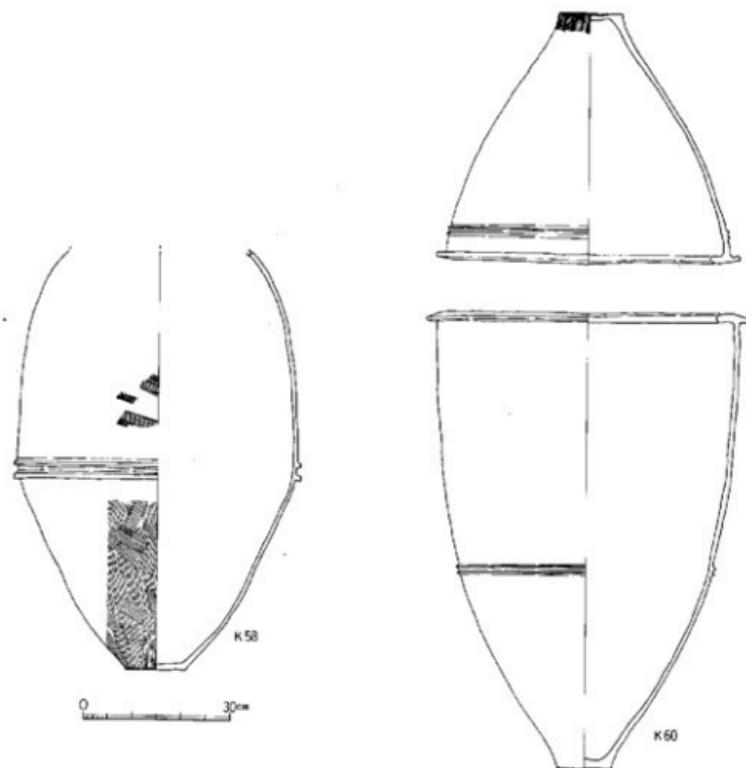


Fig. 46 K 58・60 墓棺実測図 (1/12)

徵が良く類似した合口壺棺墓は他にも数例存在する。

K 62 壺棺墓 (Fig. 47・48 PL. 27・52)

調査区北東隅で検出された接口式の合口壺棺墓である。壺と壺とを組み合わせ、北東方向のN-43°30'-Eに主軸をとる。棺の埋置傾斜角度は4°である。埋置位置が深いために、墓壙及び壺棺の残り具合が比較的良かった。墓壙は長径2m45cm、短径1m45cm、深さは確認面から70cmを測り、梢円形を呈する。墓壙の一部は調査区外へ伸びる。

上棺は、外口径39.8cm、脇部最大径43.0cm、底径9.8cm、器高50.5cmを測り、「く」の字状口

縁と、口縁下に三角突帯を1条めぐらす甕形土器である。器色は黄灰色を呈し、胎土に2mm前後の砂粒を混入する。焼成は良好である。調整は、内面がナデ、外面はタテ方向のハケ目が施される。胴部中位から下半にかけて黒斑が認められる。

また、胴部中位から上位にかけてカーボンが付着しており、上棺は日用品を転用したものと推察される。

下棺の壺は、倒卵形の器形を有し、胴部中位に断面「コ」の字状の突帯を2条めぐらす。胴部突帯から上方は内湾して立ち上がり、頸部で縮って「く」の字状の口縁部へ移行する。口縁直下に三角突帯を1条貼付する。外口径38.5cm、胴径58.8cm、底径10.8cm、器高71.5cmを測る。器色は黄灰色を呈し、胎土は細砂粒を含む精良なものである。焼成は良好で、堅歛である。内外

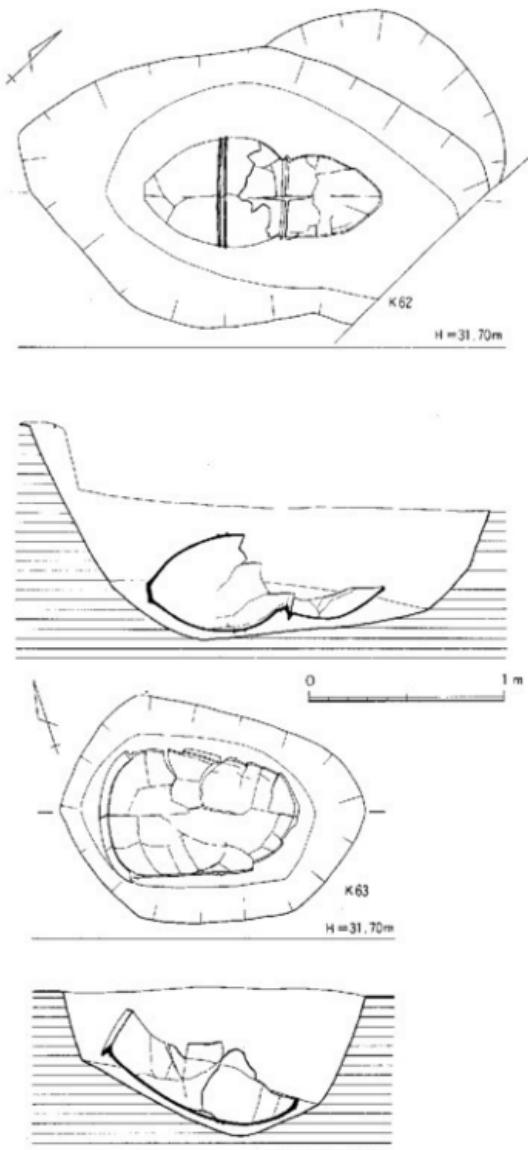


Fig. 47 K 62・63 壱棺墓出土状況図 (1/30)

Ⅲ 調査の記録

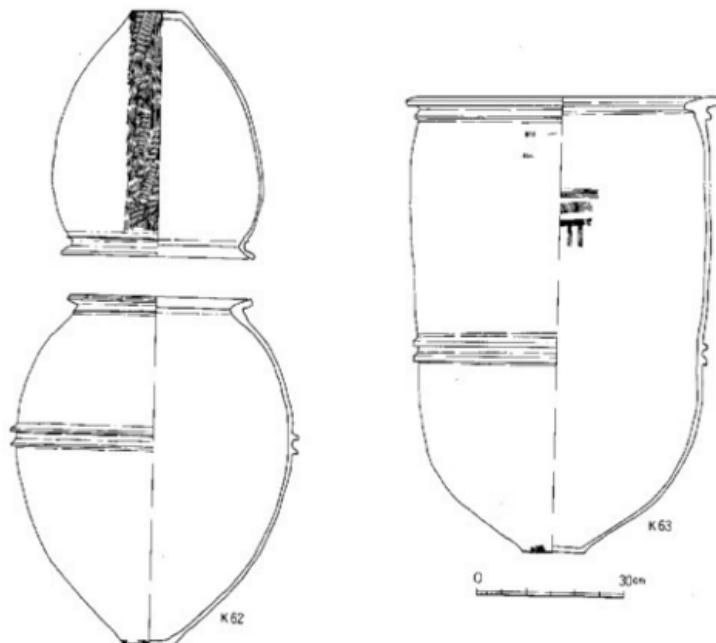


Fig. 48 K 62・63 墓棺実測図 (1/12)

面ともナデ調整が施され、底部付近にハケ目痕が若干残る。胴部上半に径10cm程の黒斑が認められる。

K 63 墓棺墓 (Fig. 47・48 PL. 27・53)

調査区北側中央部で検出された単式の墓棺墓である。墓壙及び棺の残り具合は比較的良かったが、上棺が確認されなかったので、単式と見做して差つかえあるまい。主軸は、東西方向に近くN-73°30'-Wにとり、27°の傾斜角度を持って埋置される。

墓は、大形でなんどうな器形を有する。胴部中位よりやや下がった位置に、断面「コ」の字状突帯を2条めぐらし、突帯から上方は垂直に立ち上がる。口縁部は、ぶ厚く肥厚した「丁」字状を呈し、上端部は内傾する。口縁直下に「コ」の字状突帯を1条施す。胴部突帯以下は、垂直に下向し、急にすばまりながら平底の底部へ続く。下半部の器壁は、上半部に比べ非常に薄く脆弱である。器色は黄味がかった灰褐色を呈し、胎土に1-3mmの砂粒を多く含む。焼成は良好にして堅緻である。内外面ともナデ調整が施され、部分的にハケ目痕が残る。内面には

粘土帯の接合面がよく観察される。胴部外面には対角方向に黒斑が2箇所みられる。法量は、外口径64.8cm、胴部径61.3cm、底径12.1cm、器高94.9cmを測る。

K 64 壺棺墓 (Fig. 49 · PL. 28 · 53)

K 63の西側に位置し、調査区北側中央部で出土した接口式の三連接続壺棺墓である。主軸は略南北方向をとり、N-10°30'Wで、19°の傾斜角度を持って埋置される。壺2個体と壺1個体の組み合わせである。

上棺の壺は、球形の胴部を有し、胴部中位に断面「M」字状に近い「コ」の字状突帯を2条めぐらす。口縁部は打ち欠かれ、底部は削平によつて消失する。色調は暗黄灰色を呈し、胎土に3mm程度の砂粒を混入する。焼成は良好で、胴部上位に径13~14cmの黒斑が認められる。外面ともナデ調整が施されるが、外面には僅かにハケ目痕が残る。胴部最大径48.8cm、残存器高35.0cmを測る。

中棺も壺形土器で、口縁部と底部を打ち欠く。胴部最大形はやや上位にあり、その部

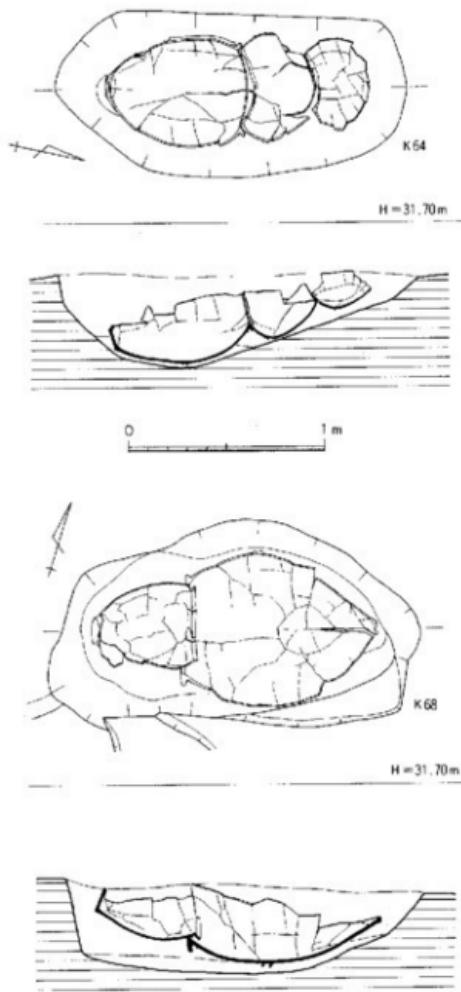


Fig. 49 K 64 · 65 · 68 壺棺墓出土状況図 (1/30)

III 調査の記録

分に、「M」字状に近い突帯を連続して4条めぐらす。胴部最大径54.2cm、残存器高34.0cmを測る。黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。内外面にはナデ調整が施される。

下棺は、外口径38.8cm、胴径54.8cm、底径10.4cm、器高73.9cmを測り、「く」の字状に屈折する口縁部を有する。口縁下に三角突帯1条、胴部中位に「コ」の字状突帯2条を貼付する。灰褐色を呈し、胎土には1~2mmの砂粒や雲母を混入する。焼成は良好で堅緻である。

K 68 瓢棺墓 (Fig. 49・50 PL. 29・54)

調査区南西部で出土した呑口式の瓢棺墓である。甕と甕との組み合わせで、主軸はS-74°-E、棺の埋置角度はほぼ水平で4°を測る。

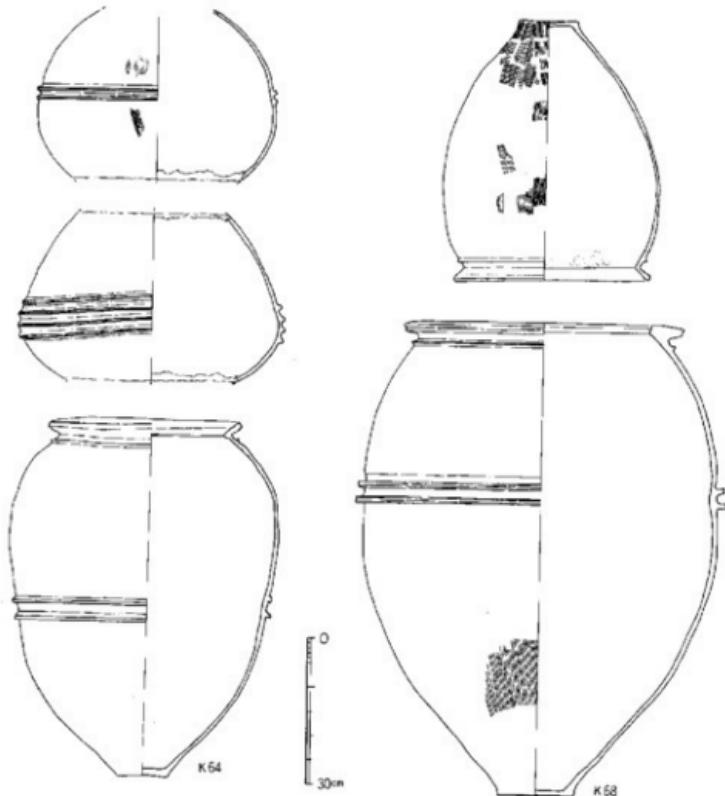


Fig. 50 K64・68 瓢棺実測図 (1/12)

I 売棺墓 大形棺一

上棺の妻は、下棺に比べ極端に小さく、外口径40.4cm、胴径44.0cm、底径12.2cm、器高52.6cmを測る。「く」の字状の口縁部を有し、口縁下に三角突帯1条をめぐらす。淡褐色を呈し、胎上・焼成とも良好である。内面はナデ調整、外面はハケ目調査の後、ナデ調整が施される。下半部に若干ハケ目痕が残る。

下棺の妻は、胴部が倒卵形に張り、中位よりやや上部に端部中窪みの「コ」の字状突帯を2条めぐらす。口縁部は肥厚し、「T」字状に近い形態をとる。上端部は水平に近く、内外口唇端部が凹線状に窪む。淡褐色を呈し、胎上・焼成ともに良好である。内外面にはナデ調整を加えるが、下半部にハケ目痕が一部残る。外口径57.0cm、胴径75.4cm、底径15.0cm、器高97.0cmを測る。胴部上位から底部付近にかけて大きな黒斑が認められる。

K 70 売棺墓 (Fig. 51 · 52 PL. 30 · 54)

調査区南西端で出土した単式の売棺墓である。北東方向のN-47°-Eに主軸をとり、妻の埋置角度は12°を測る。

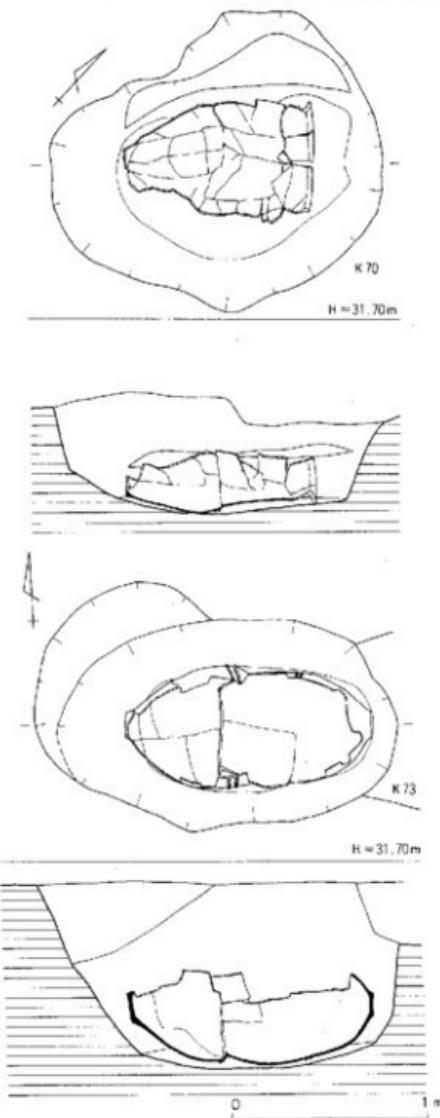


Fig. 51 K 70 · 73 売棺墓出土状況図 (1/30)

Ⅲ 調査の記録

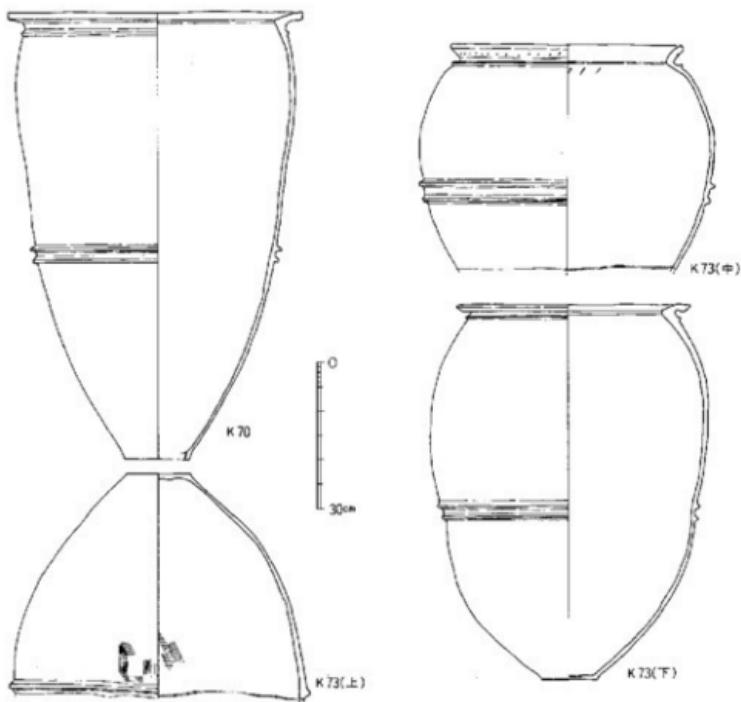


Fig. 52 K70・73 壺棺実測図 (1/12)

壺は、底部から開き気味に立ち上がる長胴形で、逆「し」字状の口縁部を有し、口縁下に三角突帯1条、胴部中位に「コ」の字状突帯2条を施す。器色は淡黄色を呈し、胎土・焼成とも良好である。外口径60.0cm、胴部最大径57.2cm、底径13.4cm、器高92.0cmを測る。内外面ともナデ調整が施され、胴部下半に黒斑が認められる。

K73 壺棺墓 (Fig. 51・52 PL. 31・55)

調査区北側で検出した接口式の壺棺墓である。K64の西側に位置し、K66の墓壙下部で確認された。棺の埋置位置は他の壺棺墓に比べて深く、残り具合は良好であった。K73の棺の組み合わせは、胴部上半を打ち欠いた壺と完形の壺を接続し、接口部を別個体の壺で覆うという特異なものであった。主軸は東西方向のS-87°-Wにとり、埋置傾斜角度はほぼ水平である。

上棺の壺は、「コ」の字状の胴部突帯以下しか残存せず、胴径61.5cm、底径13.0cm、残存器

高46.3cmを測る。淡赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。内外面ともナデ調整が施されるが、下調整のハケ目痕が部分的に残る。

被覆の壺は、張りの強い胴部に、「く」の字状の口縁部を有し、口縁下に1条、胴部に2条の「コ」の字状突帯をめぐらす。外口径47.4cm、胴径60.0cm、残存高46.3cmを測り、底部は打ち欠く。明灰色を呈し、胎土・焼成とも良好である。内外面ともナデ調整が施される。

下棺の壺は、外口径49.8cm、胴部最大径55.5cm、底径11.4cm、器高77.2cmを測る。器形はふくらみを持ち、逆「L」字状の口縁部を有する。口縁下に1条、胴部に2条の三角突帯を施す。暗灰褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。内外面ともナデ調整が加えられ、胴部に2箇所黒斑が認められる。

K 74 壺棺墓 (Fig. 53・54 PL. 32)

調査区南側東寄りで検出された接口式の壺棺墓である。鉢と壺を組み合わせ、主軸はN-35°-Wで、水平に埋置される。削平が激しく、墓壙及び棺は一部しか残存していない。

上棺は、外口径52.4cm、残存器高15.4cmの鉢形土器で、口縁部は「く」の字状に外反し、内口唇は内側に突出する。口縁下には三角突帯を1条めぐらす。赤褐色～褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。外面はハケ目、内面はナデ調整が施される。胴部上半に黒斑が認められる。

下棺は、逆「L」字状に近い口縁部を有する壺形土器である。口縁下に1条、胴部に2条の

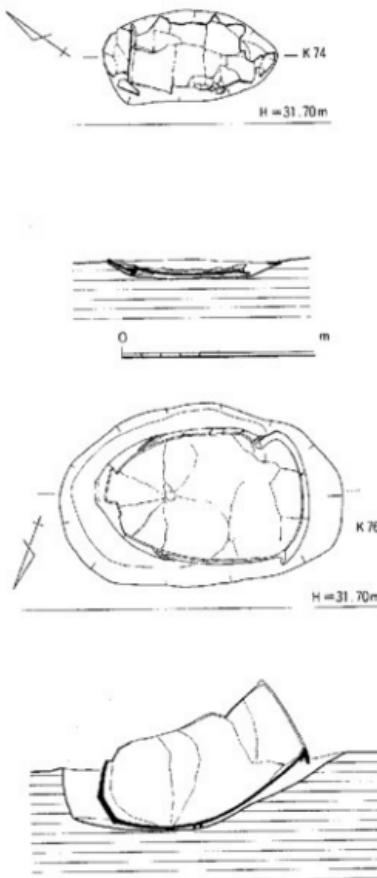


Fig. 53 K 74・76 壺棺墓出土状況図 (1/30)

III 調査の記録

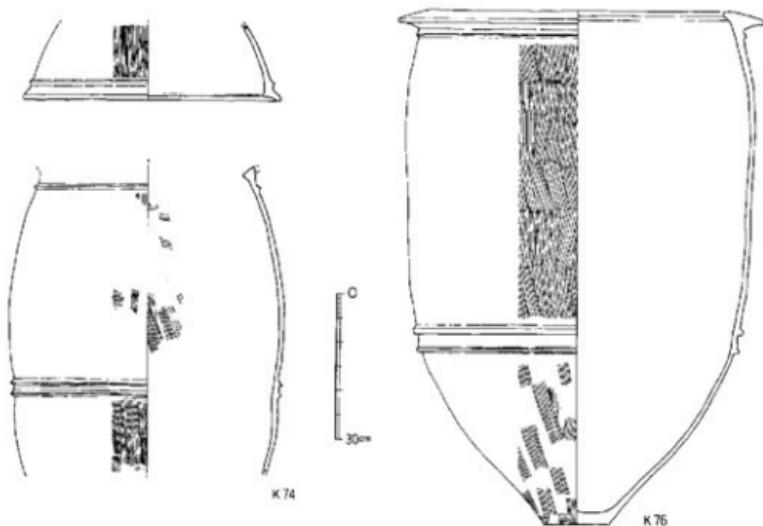


Fig. 54 K74・76 墓棺実測図 (1/12)

断面三角形の突帯を貼付する。胴の張りは弱く、胸部下半以下は欠失する。胴径55.6cm、残存器高62.8cmを測る。胎土には1~4mmの砂粒を含み、焼成は良好である。灰褐色を呈し、内外面ともハケ目調整の後、ナデ調整が施される。胸部突帯以下はハケ目痕がそのまま残る。

K76 墓棺墓 (Fig. 53・54 PL. 32・54)

調査区北側中央部で出土した単式の墓棺墓である。周辺には単式の墓棺墓が分布する。主軸はN-69°-W方向にとり、墓の埋置傾斜角度は大きく、30°を測る。

墓は、胸部中位よりやや下がった位置に、断面「コ」の字状の突帯を2条施し、胸部突帯から上方はほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は「T」字状口縁に近いが、外口唇が外側へ突出する。上端部はやや外傾し、口縁直下に断面三角形の突帯を1条めぐらす。器色は暗黄灰色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好で堅密である。器面調整は、内面がナデ、外面にはハケ目調整が施される。外面向下半部は、ハケ目調整の後、ナデ調整が加えられている。法量は、外口径74.8cm、胸部最大径71.0cm、底径13.2cm、器高105.6cmを測る。

以上、51基の大形棺について個別に説明を加えてきたが、墓棺の分布、時期別な造営及び展開、墓棺の諸要素や諸特徴などについては、まとめの頁で述べたい。

小形棺

K 03 壱棺墓 (Fig. 55・56 PL. 4)

調査区南端部で出土し、壺と壺を覆口式に組み合わせる小児用の壹棺墓である。主軸は東西方向に近い S-78°30'-W で、ほぼ水平に埋置する。

上棺は、逆「L」字状口縁部を有する壹形土器である。整理時のアクシデントで破片が不足し、全体が接合できなかった。外口径35.6cm、胴部径36.2cm、底径7.0cm、器高38.0cm（推定）を測る。口縁下に1条、胴部に2条の断面「M」字状の突帯をめぐらす。内面は淡褐色を呈し、口縁部から外面にかけては赤色顔料を塗布する。胴部突帯間には暗文風のヘラ磨き、底部付近にはタテ方向のヘラ磨きが施される。胎土は精良にして、焼成良好である。

下棺は口縁部打ち欠きの壹形土器で、破片の不足から不充分な接合にとどまった。扁球形の胴部を持ち、下半はすばまりながら平底の底部へ移行する。肩部に3条の突帯をめぐらし、上と下が断面「コ」の字状、真中が断面三角形を呈する。突帯間には赤色顔料を塗布し、内面にも顔料の残痕が認められる。胴径50.0cm、底径12.3cm、器高は口縁部が欠失しているので、はっきりしない。内外面とも淡灰褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

K 04 壱棺墓 (Fig. 55 PL. 56)

調査区南端部で検出した小児用の壹棺墓で、K 03 の東側に位置する。削平が激しく、2個体の器を使用した合口か、あるいは単式かはっきりしない。主軸は南北方向の N-9°-W にとり、埋置傾斜角度は 34°近くを測る。小形の壹形土器で、口縁部を欠失し、頭部から底部までの一部が残存していたに過ぎなかった。

K 07 壱棺墓 (Fig. 55・56 PL. 5・56)

調査区南端中央部に位置し、K 08 の墓壙を切って埋置されている。壺と壺とを組み合せた覆口式の壹棺墓で、主軸は北東方向の N-46°30'-W にとり、棺の埋置傾斜角度は 5°である。下棺の壺は口縁部が打ち欠かれている。

上棺の壺は、外口径30.6cm、胴部最大径29.8cm、底径9.0cm、器高33.1cmを測る。口縁部は「く」の字状に外反し、胴部最大径はやや上部にある。器色は淡黄灰色を呈し、胎土には 2mm 前後の砂粒を含む。焼成は良好で堅緻である。内面はナデ調整、外表面はハケ目調整が施されるが、口縁部直下は横ナデのためハケ目痕が消失している。底部付近はハケ目痕が顯著である。

下棺は、「く」の字状の口縁部を有し、胴の張った器形を持つ壹形土器である。口縁直下に三角突帯を1条めぐらす。外口径33.0cm、胴部最大径37.3cm、底径9.5cm、器高42.0cmを測る。胎土には 1mm 前後の砂粒を中心に 3mm 位までの砂粒を含む。焼成は良好で堅緻である。色調は内面が淡黄褐色、外表面は暗黄褐色を呈し、内外面ともナデ調整が施されている。外表面下部にはナデ調整前のハケ目調整痕が残る。

III 調査の記録

K 09 壺棺墓 (Fig. 57・58 PL. 6・56)

調査区中央部南寄りで検出された壺棺墓で、出土状況では中形の壺を呑口式に組み合わせていた。主軸は S-60°-W で、10°の傾斜を持って埋置される。北側には K24、K25が出土している。

上棺の壺は、破片の接合が不充分で、一部しか固化できなかった。口縁部は内弯気味に外反

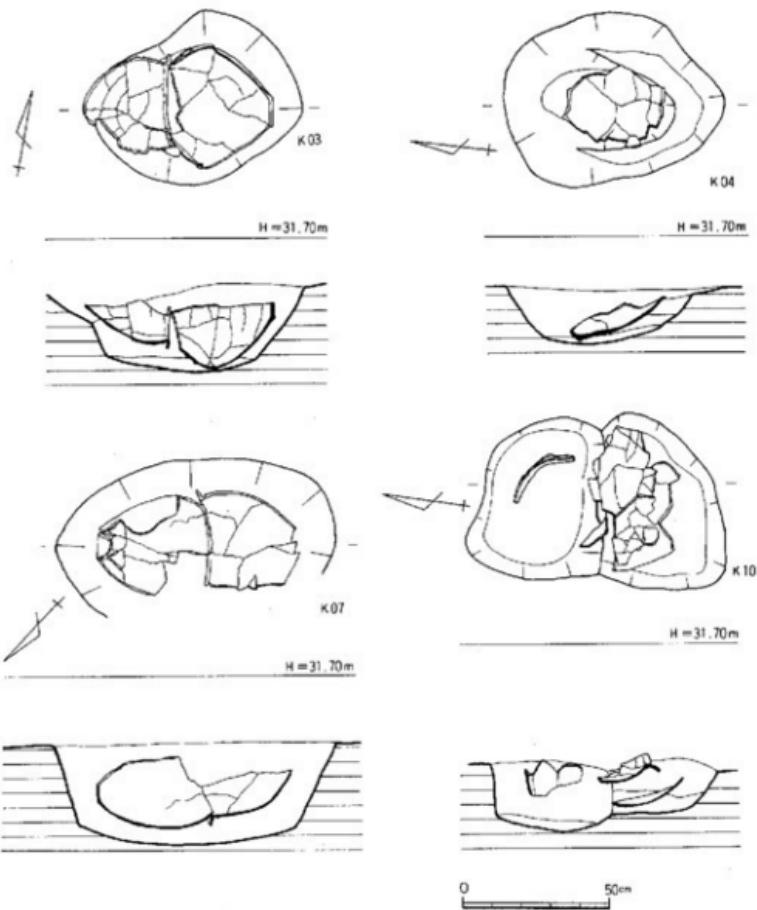


Fig. 55 K 03・04・07・10 壺棺墓出土状況図 (1/20)

1 壳棺墓一小形棺一

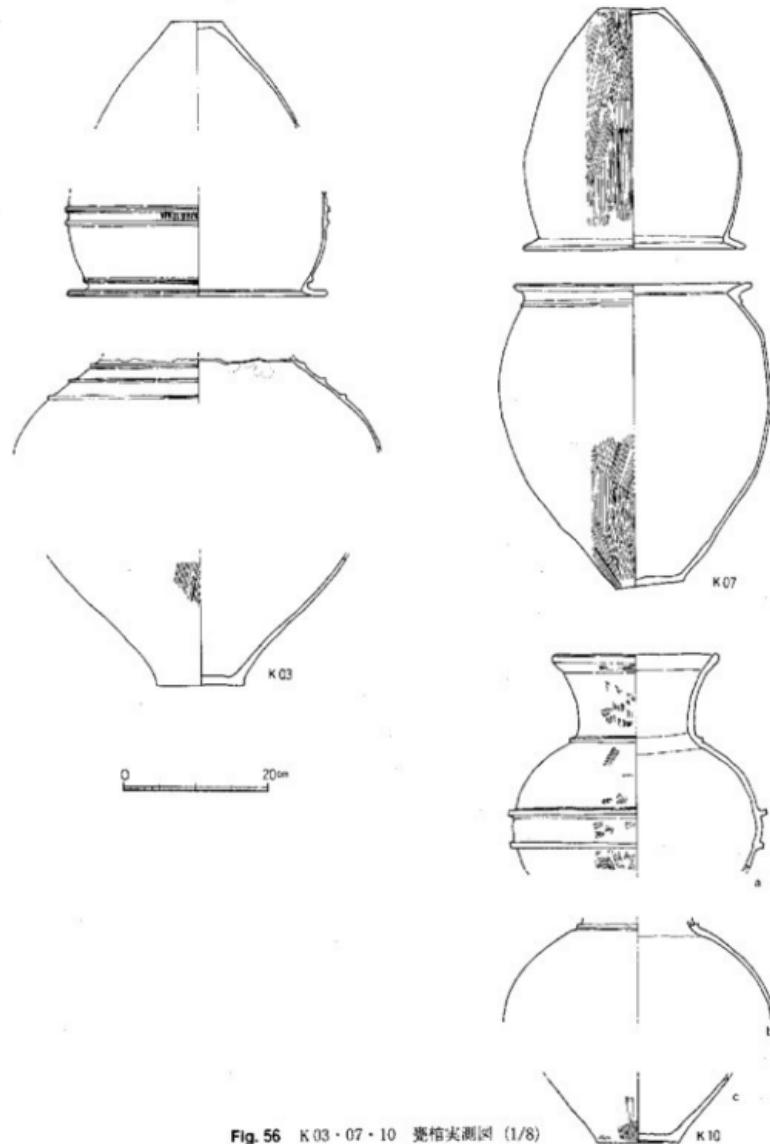


Fig. 56 K 03・07・10 壳棺実測図 (1/8)

III 調査の記録

し、「く」の字状口縁を呈する。口縁下には断面三角形の突帯が1条めぐる。暗褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は不良でやや軟質である。外口径40.0cmで、内外面とも器表の磨滅が激しい。器形的には下甕に類似すると考えられる。

下棺の甕は、外口径45.0cm、胴部最大径44.5cm、底径10.4cm、器高57.0cmを測り、口縁部は内窓気味に外反し、「く」の字状を呈する。口縁下に鋭い三角突帯を1条施し、胴部最大径は上位にある。色調は黄灰色で、胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好で堅緻である。内面はナデ調整、外面にはハケ目調整が施され、黒斑が認められる。一部には煤の付着も観察される。

K 10 甕棺墓 (Fig. 55・56 PL. 6・56)

調査区南側中央部で出土し、大部分が削平されて破片が一部散乱している状態であった。調査時には破壊された小児棺として番号を付し取り上げたが、器種が顔料を塗布した壺・甕で、埋置状況が組み合わせ状態を呈していないことなどから、小児棺ではなく祭祀遺構の可能性も否定しきれない。しかし、ここでは一応小形棺の項に含めて説明しておきたい。

aは、口縁が外反し、球形の胴部を有する特異な壺形土器である。口縁端部は肥厚し、頸部に三角突帯1条、胴部に「コ」の字状突帯2条をめぐらす。外口径23.0cm、胴部径36.0cmで、器高は底部を欠失しているので推定し難い。淡茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。外面には黒色顔料を塗布したとみられる箇所が観察される。内面はナデ、外面はハケ目調整の後、ナデ調整が施されている。

bは、壺形土器の胴部上半部で、頭部に三角突帯を1条めぐらす。外面にはハケ塗り状の赤色顔料が塗布され、頸部内面にもハケ塗り状の赤色顔料が一部認められる。

cは、甕形土器の底部と考えられ、底径11.4cmを測る。内面はナデ調整、外面はハケ目調整の後、ナデ調整が加えられ、赤色顔料が塗布される。底面はやや窪む。

K 11 甕棺墓 (Fig. 57・58 PL. 7・56)

調査区南側中央部で検出され、K 12の東側に位置する。接口式の甕棺墓で、壺と甕を組み合せる。主軸はS-13°30'-Wで、埋置角度はほぼ水平の3°である。

上棺は口縁部打ち欠きの壺で、胴部に「コ」の字状突帯2条、肩部に三角突帯1条をめぐらす。残存高31.2cm、胴部径39.6cm、底径10.2cmを測る。明褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

下棺は、外口径38.8cm、胴部最大径36.6cm、底径10.8cm、器高42.9cmを測る甕形土器で、逆「L」字状の口縁部を有する。口縁直下に三角突帯1条を施す。淡褐色～明褐色を呈し、胎土に粗大な砂粒を多量に含み、焼成はやや良好である。内面はナデ、外面にはハケ目調整を施す。

K 14 甕棺墓 (Fig. 57・58)

調査区南側西寄りで検出されたもので、破壊散乱した壺形土器が広がっていたので、一応小形棺に含めて取り上げた。墓壙および埋置状態ははっきりしない。

1 壶棺墓—小形棺—

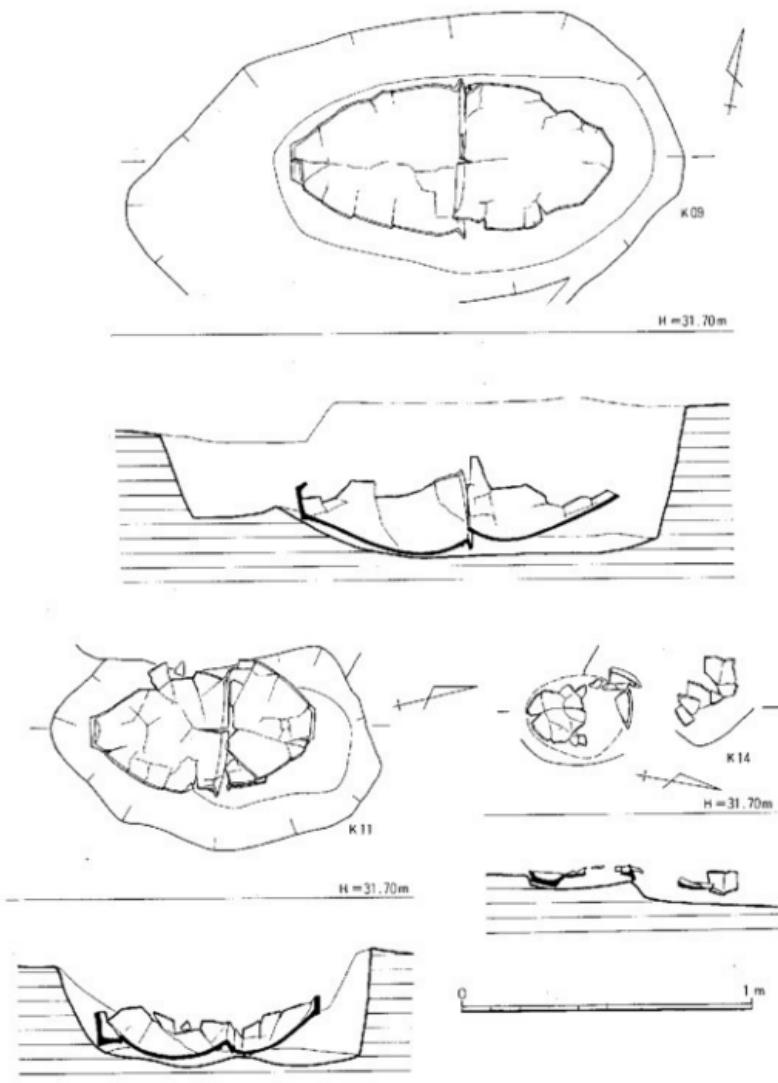


Fig. 57 K09・11・14 壶棺墓出土状況図 (1/20)

III 調査の記録

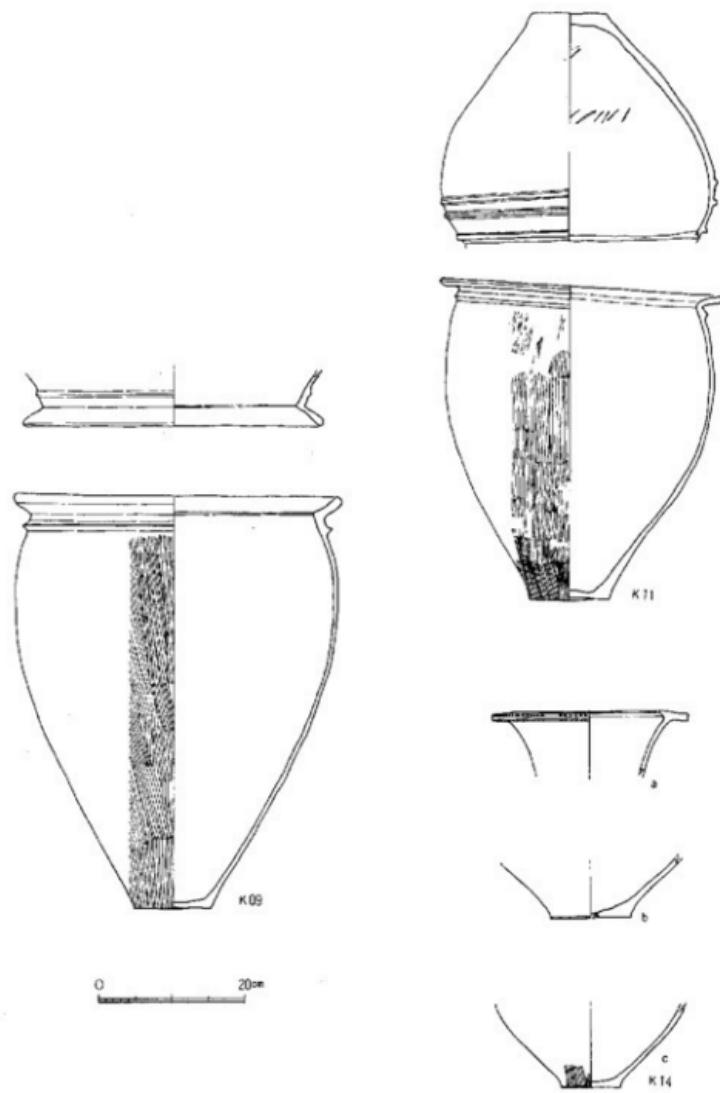


Fig. 58 K09・11・14 麗棺実測図 (1/8)

1 壺棺墓一小形棺一

aは、錐先状口縁を有する壺形土器の口頭部である。上端部はやや外傾し、外端部は凹線状に窪み、刻み目を施す。外口径13.5cmを測る。

b・cは、壺形土器の底部と考えられ、bは底径11.2cm、cは底径8.0cmを測る。cの底部外面にはハケ目調整痕が残る。

K 2 2 壺棺墓 (Fig. 59・60 PL. 10)

調査区中央部で出土し、埋置関係はK21を切り、K23に切られている。削平が激しく、単式かどうかはっきりしないが、一応単式として取り扱っておきたい。主軸はN-76°30'-Eで、埋置角度はほぼ水平の2°である。

壺は、外口径18.4cm、胴部最大径43.8cm、底径9.4cm、器高53.0cmを測る。口縁部は逆「L」字状を呈し、口縁下には三角突帯が1条めぐる。底部は肥厚し、外底面が輪状に窪む。器色は暗褐色を呈し、胎土はやや粗く、焼成は良好である。内面はナデ調整、外面にはハケ目調整が施される。底部近くに黒斑が認められる。

K 2 4 壺棺墓 (Fig. 59・60 PL. 11・57)

K25の南側に位置し、調査区中央部南寄りで出土した。さらに南に位置するK09に切られる。主軸はN-65°30'-Eで、ほぼ水平に埋置される。壺棺墓の配列から小児棺と考えるが、周辺から丹塗りの壺と壺の一部が出土しているので、祭祀土器の可能性も否定しきれない。一緒に

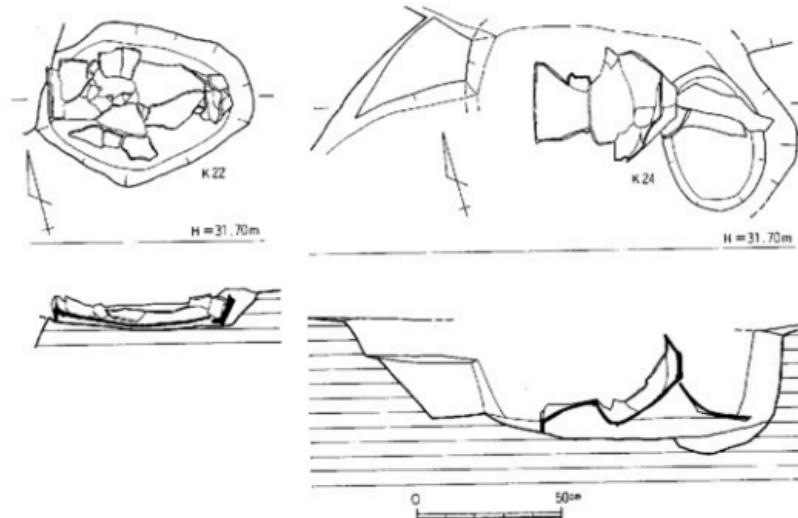


Fig. 59 K22・24 壺棺墓出土状況図 (1/20)

III 調査の記録

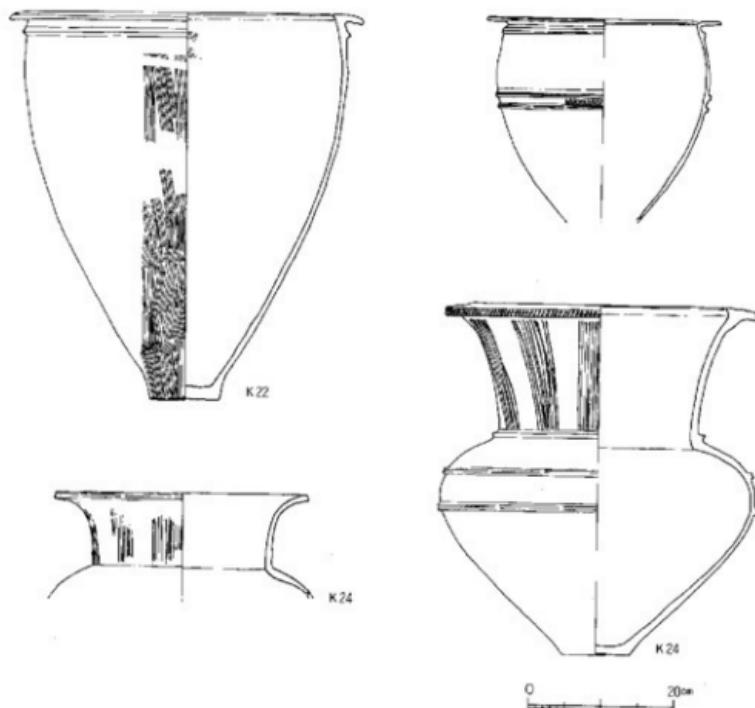


Fig. 60 K 22・24 墓棺実測図 (1/8)

説明を加えておきたい。

棺は、単式の壺形土器で、鋤先状口縁を有し、外端部に刻み目を施す。頭部に三角突帯1条、胴部に断面「M」字状突帯2条を施す。外口径42.6cm、胴部径43.8cm、底径9.0cm、器高48.0cmを測る。灰褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。頭部にヘラ状工具による暗文を施す。

棺の東で出土した壺は、扁球形の胴部から頭部が立ち上がり、口縁部が外反するタイプである。外口径34.8cm、胎土の色調は淡褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。内外面とも丹塗りが施され、外面はヘラ研磨される。胴部上位以下は欠失する。

壺形土器は、口縁部が逆「L」字状に外方へ発達し、口縁直下に1条、胴部に2条の「M」字状突帯をめぐらす。外口径32.2cm、胴部最大径29.4cmを測り、底部は欠失する。明るい灰褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。内面はナゲ調整、外面には丹塗りが施され、ヘラ研

1 壺棺墓一小形棺一

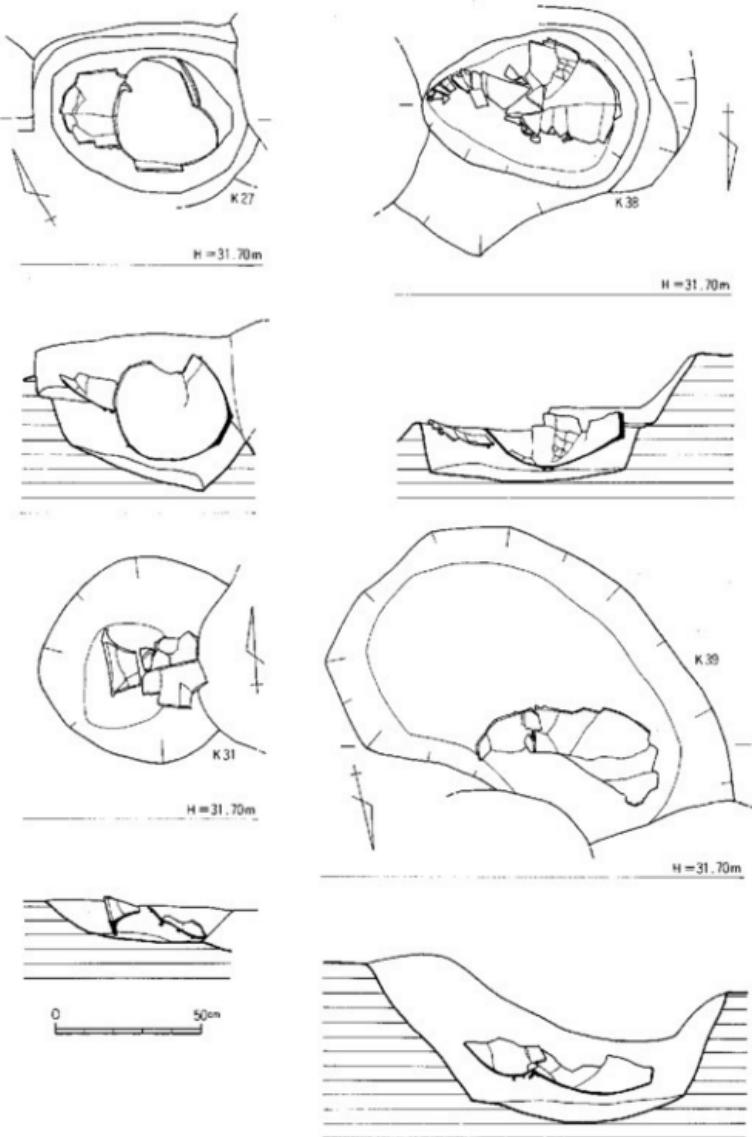


Fig. 61 K 27 · 31 · 38 · 39 壺棺墓出土状况图 (1/20)

III 調査の記録

磨が加えられる。胴部突帯間にはタテ方向にヘラで連続短沈線を入れる。

K 27 壺棺墓 (Fig. 61・62 PL. 12・57)

調査区中央部やや南寄りで出土し、K 26の墓壙を切った状態で検出された。壺と壺を覆口式に組み合わせ、主軸はN-72°-E、埋置角度は24°を測る。

上棺の壺は、口縁部を打ち欠き、口縁下と胴部中位に断面「M」字状の突帯をめぐらす。外面は丹彩され、突帯間に施文が施される。内口径24.4cm、胴部最大径29.0cm、底径6.7cm、器高31.3cmを測る。黄灰色を呈し、胎土は精良で、焼成も良好である。

下棺の壺は、張りの強い胴部を持ち、頸部に三角突帯1条、胴部に「コ」の字状突帯2条を貼付する。口縁部は打ち欠かれており、胴部最大径40.0cm、底径11.0cm、残存器高35.0cmを測る。黄灰色を呈し、胎土は精良で、焼成堅緻である。内外面ともナデ調整が施され、外面頭部近くには丹塗りが観察される。

K 31 壺棺墓 (Fig. 61・62 PL. 14・57)

調査区南東隅で出土し、激しい削平や攢乱を受けており、詳細ははっきりしない。瓢形土器の上半部の一部が残存していた。主軸は東西方向にとり、傾斜角度はほぼ水平である。

口縁部は鋲先状を呈し、外端部に刻み目を施す。頸部に三角突帯1条、胴部上位には刻み目を有する大形の突帯を貼付する。大形突帯以下は、胴部の屈曲の度合いが異なり、緩やかなるくらみを持つ長めの胴部へ移行する。胴部上位にも「M」字状突帯が2条めぐる。口縁部内面と外面には丹塗りが施され、頸部から胴部上位にかけて暗文がみられる。胎土は精良で、焼成も良好である。口縁部上端面に一部黒斑が認められる。外口径34.2cm、胴径44.0cm、残存器高30.0cmを測る。

K 38 壺棺墓 (Fig. 61・62 PL. 17)

調査区中央部東端に位置する。壺と壺を覆口式に組み合わせるが、削平が激しく詳細ははっきりしない。主軸は東西方向にとり、水平に埋置される。

上棺は、口縁部打ち欠きの壺で、「M」字状突帯を持つ胴部の一部しか残存しておらず、図化できなかった。淡褐色を呈し、胎土・焼成は良好である。

下棺の壺も口縁部を打ち欠いており、ふくらみの強い胴部を有する。胴部中位に「M」字状突帯2条、締った頸部に1条の突帯をめぐらす。胴部最大径45.0cm、底径9.6cm、残存器高43.0cmを測る。暗褐色を呈し、内面はナデ調整、外面はハケ目調整の後ナデ調整が加えられている。底部近くはハケ目痕が残る。頸部突帯より上は丹塗りが施され、胴部上位に丹の斑痕がみられる。胎土には1~2mmの砂粒を混入するが良好で、焼成も堅緻である。

K 39 壺棺墓 (Fig. 61 PL. 58)

K 38の東側に位置し、調査区の中央部東端にあたる。現代の井戸によって大部分が破壊されている。主軸は東西に近くN-77°30'-Wで、約13°の傾斜角度をもって埋置される。壺と壺を

1. 麦棺墓一小形棺一

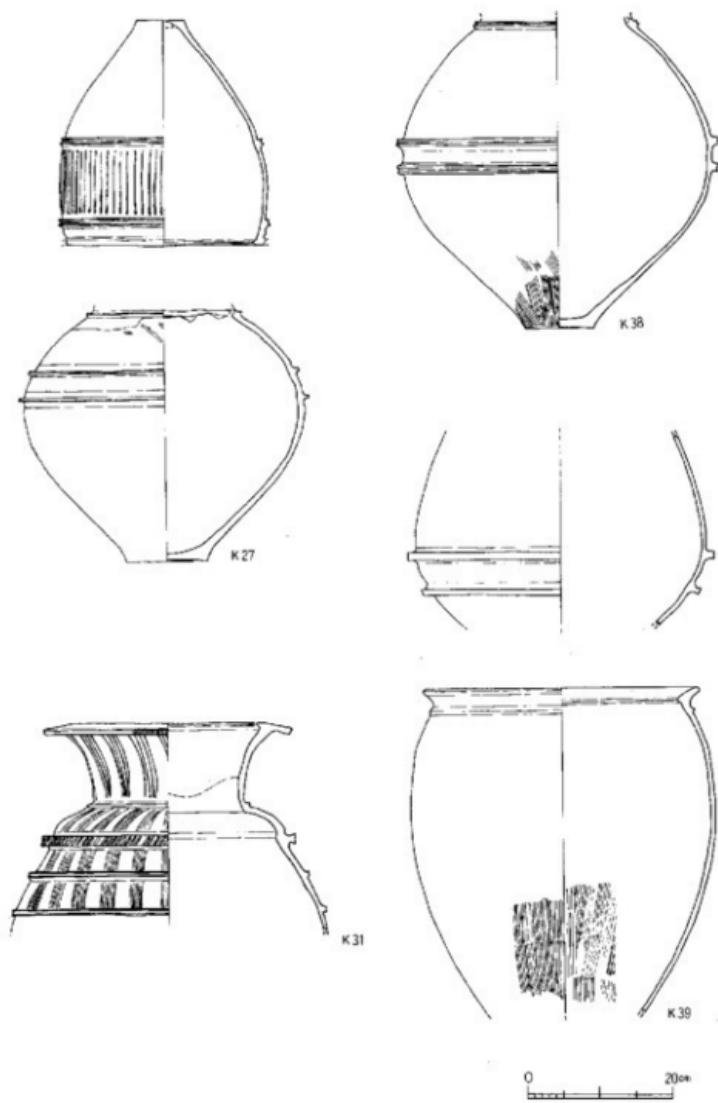


Fig. 62 K.27・31・38・39 麦棺尖測圖 (1/8)

III 調査の記録

呑口式に組み合わせる。

上棺は、口縁部打ち欠きの壺形土器で、胴部上位に「コ」の字状突帯を2条めぐらす。底部は削平によって消失する。器色は赤褐色を呈し、胎土は1mm前後の微砂粒が少量混入する精良なもので、焼成も良好である。胴部最大径42.2cm、残存器高26.3cmを測る。

下棺は、「く」の字状口縁を有する壺形土器で、口縁直下に三角突帯が1条めぐる。胴部は緩やかにふくらみ、最大径が中位にある。底部は削平によって消失する。外口径38.2cm、胴部最大径42.0cm、残存器高44.7cmを測る。器色は暗灰褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。調整は、内外共ハケ目調整の後ナデ調整が加えられているが、下半部はハケ目痕が残る。

K 4 5 壵棺墓 (Fig. 63・64)

調査区中央部で検出し、K 44、K 46の西側に位置する。埋置位置が浅いため、削平が激しく詳説ははっきりしない。主軸は南から35°程東方向にとると考えられ、ほぼ水平に埋置される。口縁部及び底部がいずれも消失しているが、壺と壺の組み合わせになるとみられる。

K 5 0 壵棺墓 (Fig. 63・64 PL. 22・58)

調査区中央部やや北寄りで検出された接口式の壺棺墓である。壺と壺とを組み合わせ、出土状況はやや離れているが、本来接合していたものと考えられる。主軸はN-22°-Eで、ほぼ水平に近い埋置角度をとる。

上棺の壺は、ふくらみの強い胴部に三角突帯1条をめぐらし、突帯より口縁部に向って内弯気味に立ち上がり、「T」字状の口縁部へ移行する。口縁部内口唇は打ち欠きが施される。底部は肥厚し、外底部はやや窪む。器色は暗褐色から灰黒褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。外口径31.7cm、胴部最大径48.0cm、底径12.2cm、器高57.0cmを測る。外面上部には下調整のハケ目痕が残る。

下棺の壺も、プロポーションが上棺と良く類似する。胴部の三角突帯は2条で、「T」字状口縁の発達した内口唇は打ち欠きで除去されている。外口径35.9cm、胴部最大径49.0cm、底径8.9cm、器高59.1cmを測る。底部は肥厚し、外底面はやや窪む。器色は赤味を帯びた灰褐色から灰黒褐色を呈し、胎土は精良で、焼成も堅密である。内外面ともハケ目調整の後、ナデ調整が施されているが、外面上部にハケ目痕が観察される。外口唇端部にはタテ方向の細かな刻み目が施される。

K 5 2 壵棺墓 (Fig. 63・64 PL. 23・58)

調査区中央部東寄りで出土した。K 43の北側、K 49の東側に位置する。壺と壺とを組み合わせた接口式で、主軸はほぼ北東方向のN-43°30'-Eにとり、6°の傾斜角度を持って埋置する。

上棺の壺は、外口径23.8cm、胴部最大径22.4cm、底径5.3cm、器高30.8cmを測り、「T」字状に近い口縁部を有する。器色は淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。焼成は良好である。内面はナデ調整、外面はハケ目調整が施される。

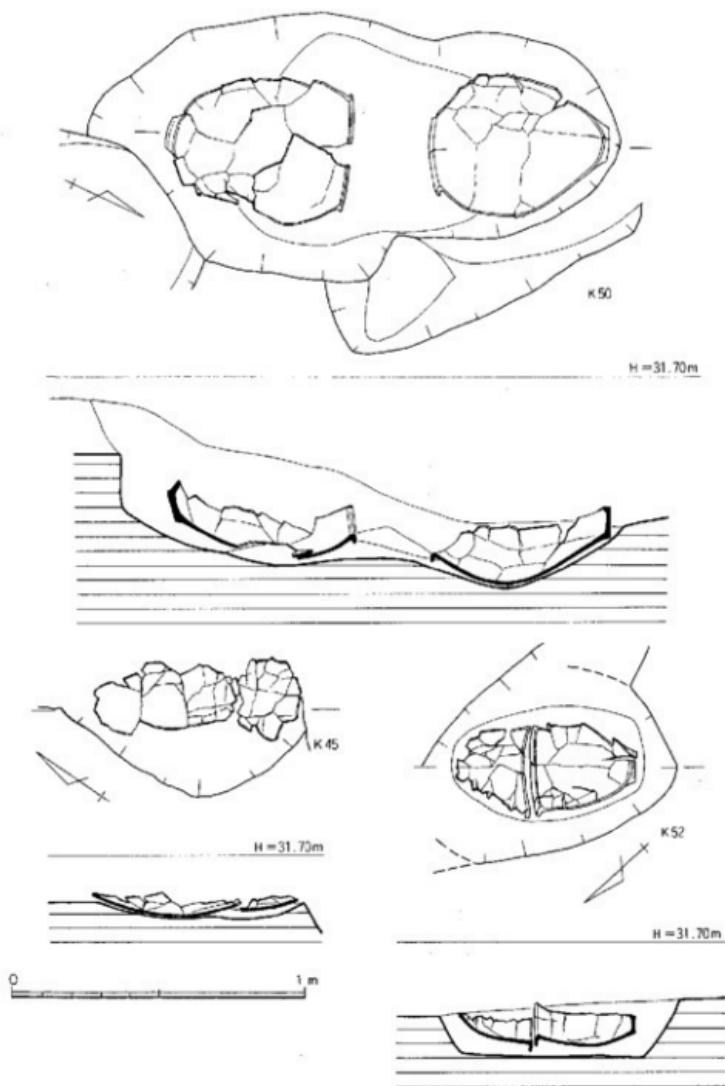


Fig. 63 K 45 · 50 · 52 墓棺出土状況図 (1/20)

II 漆柾の記録

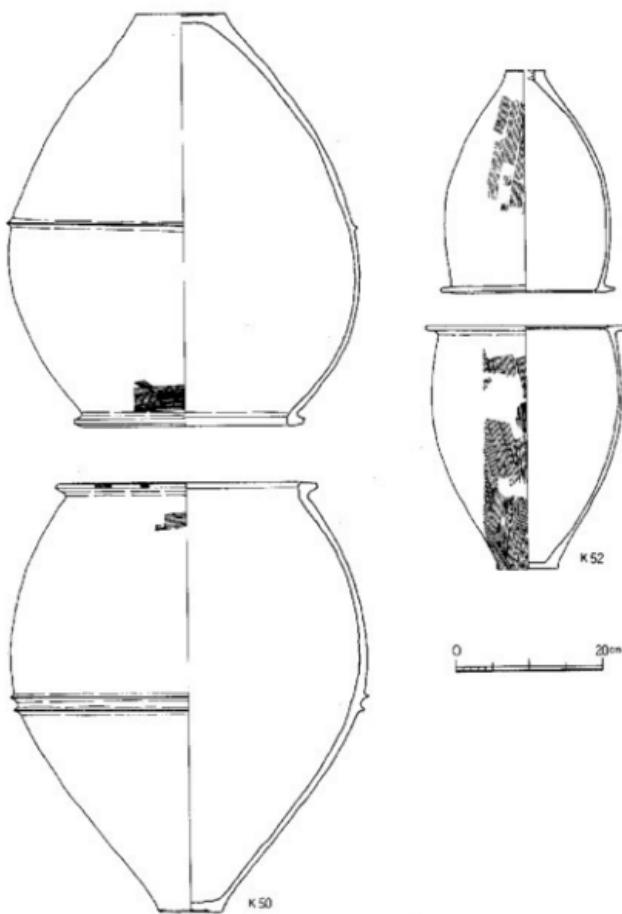


Fig. 64 K 50・52 漆柾実測図 (1/8)

下棺は、「T」字状口縁を有する壺形上器で、器形は上壺と良く類似する。胴部最大径は中位にあり、底部の器壁は肥厚する。灰褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。焼成はやや良好である。内面はナデ調整、外面はハケ目調整が施される。法量は、外口径27.8cm、胴部最大径26.0cm、底径8.4cm、器高33.8cmを測る。

K 6 9 壱棺墓 (Fig. 65・66 PL. 25・58)

調査区北東部で検出された壹棺墓で、削平が激しく、棺・墓壙とも一部しか残存していなかった。主軸はN-13°-Wで、埋置角度は33°を測る。

残存していた棺は、壺形土器の胴部以下で、胴部に「コ」の字状突帯を2条施す。突帯以下は丸味を持ってあげ底の底部へ移行する。赤褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。残存器高38.2cm、胴部径50.6cm、底径10.8cmを測る。器面調整は、内面がナデ、外面にはハケ目調整が観察される。

K 6 1 壱棺墓 (Fig. 65・66 PL. 26・59)

調査区北東部で出土した接口式の壹棺墓である。壺と壺とを組み合わせ、主軸はほぼ南北のN-6°-W、埋置角度は7°である。

上棺は、外口径30.4cm、胴部最大径29.0cm、底径5.4cm、器高28.7cmを測る壺形上器で、逆「L」字状の口縁部を有する。口縁下に1条、胴部には2条の「コ」の字状突帯をめぐらす。底部はやや上げ底となる。外面には丹塗りが施され、内面上部にも丹彩がみられる。胎土は良好で焼成堅密である。

下棺の壺は、「く」の字状口縁を有し、外口径29.9cm、胴部径28.8cm、底径9.9cm、器高31.3cmを測る。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。内外面ともハケ目調整の後ナデ調整が施されるが、外面はハケ目痕が残る。

K 6 5 壱棺墓 (Fig. 65・66 PL. 59)

調査区北端部中央で出土し、上部は削平されて一部しか残存していなかった。主軸はN-61°-Eで、38.5°の傾斜角度をもって埋置される。

棺は、壺形土器で、球形の胴部を持ち、胴部中位に「コ」の字状突帯2条をめぐらす。口縁部は消失し、胴部径30.6cm、底径9.0cm、残存器高26.4cmを測る。黄灰色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。焼成は良くない。外面胴部突帯以上には丹塗りが施される。

K 6 6 壱棺墓 (Fig. 65・66 PL. 28・59)

調査区北側西寄りで検出され、K73の墓壙の上で出土した単式の壹棺墓である。削平が激しく下半部しか残存しない。主軸はS-52°-Eで、16°の傾斜角度を持って埋置される。

壺は、外口径40.0cm、胴部最大径43.6cm、底径9.2cm、器高50.0cmを測る。「く」の字状の口縁部を有し、口縁下に三角突帯を1条めぐらす。胴部最大径は上位にある。器色は黄灰色を呈し、胎土は粗く、焼成は良好である。内面はナデ調整、外面にはハケ目調整が施される。

Ⅲ 調査の記録

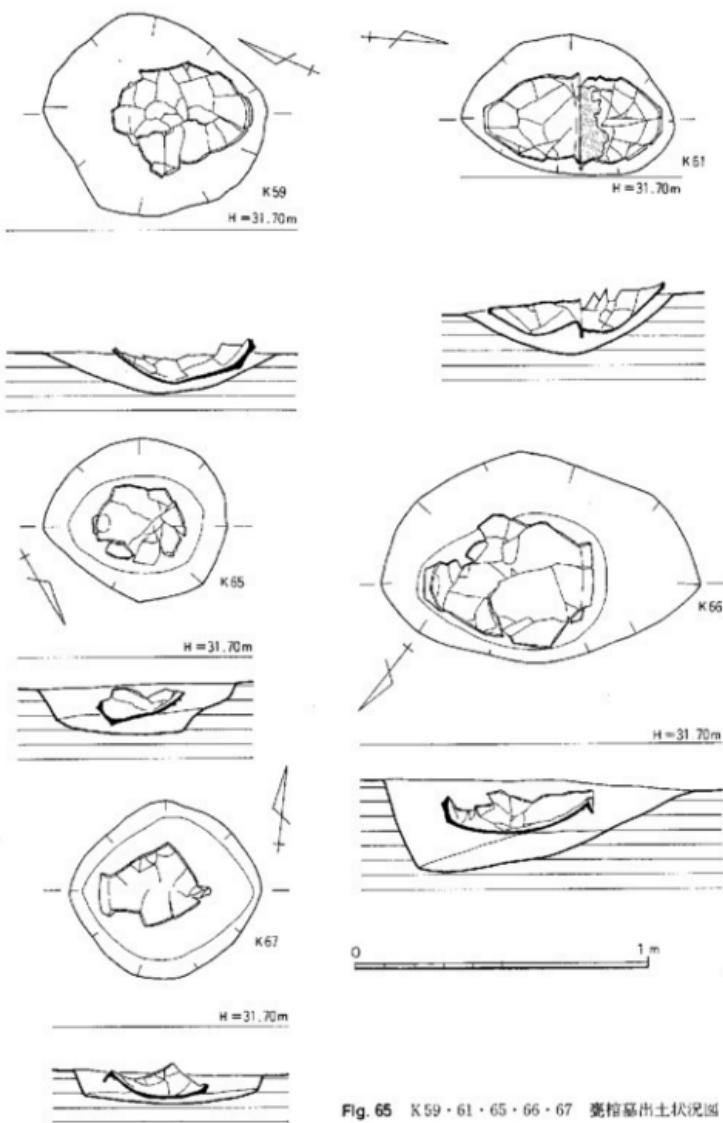


Fig. 65 K59・61・65・66・67 壺棺墓出土状況図 (1/20)

1 壺棺墓一小形棺

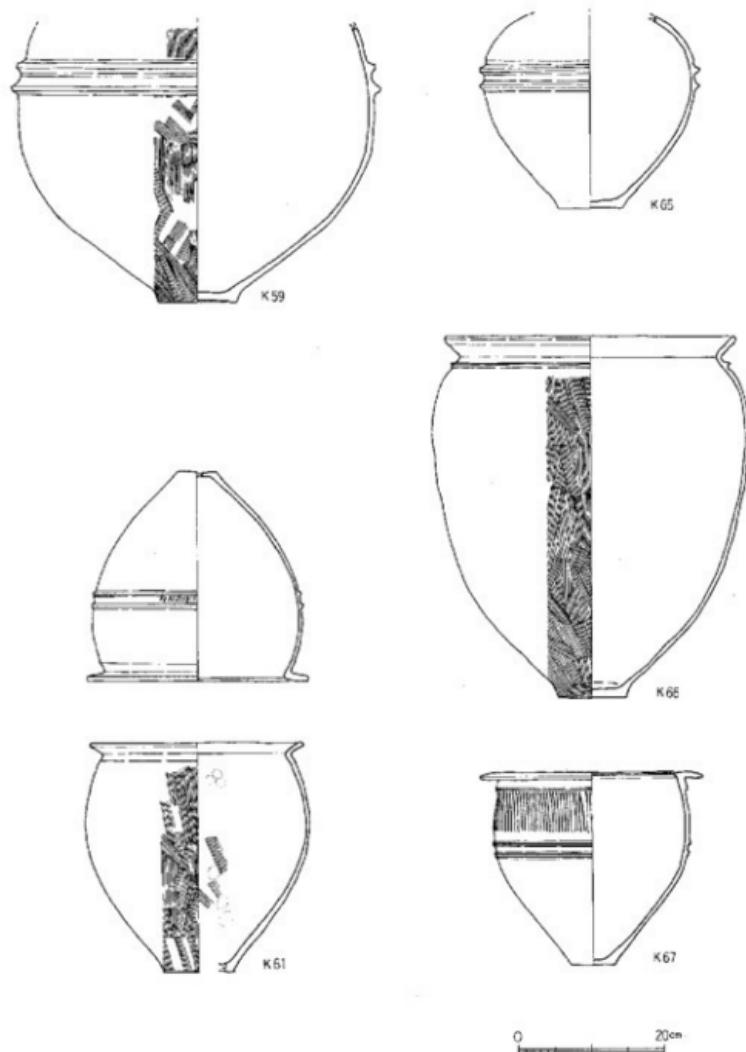


Fig. 66 K59 · 61 · 65 · 66 · 67 壺棺实测图 (1/8)

目 檻 査 の 記 錄

K 6 7 壺棺墓 (Fig. 65・66 PL. 29・59)

調査区北端部中央で検出した単式の壺棺墓である。削平が激しく、下半部しか残存していないかった。主軸は東西方向に近く S-83°-W で、25°の傾斜角度で埋置される。

甕は、逆「L」字状の口縁部を有し、外方に強く突出する。口縁下に 1 条、胴部に 2 条の「M」字状突帯をめぐらす。外口径 33.8cm、底径 6.8cm、胴径 29.8cm、器高 29.5cm を測る。外面および内面上端部には丹塗り研磨が施され、外側突帯間にタテ方向の暗文が施文される。

K 6 9 壺棺墓 (Fig. 67・68 PL. 30)

調査区南西部に位置する。甕と甕とを接口式に組み合わせ、主軸は東西方向の N-81°-E にとる。傾斜角度は水平に近く 5° を測る。

上棺の甕は、逆「L」字状の口縁部を有し、口縁下に 1 条、胴部に 2 条の低い突帯をめぐらす。外口径 30.6cm、残存器高 16.0cm で、突帯付近に赤色顔料が観察される。焼成は良くなく器表は荒れているが、本米は全体が丹塗りになっていたものと考えられる。

下棺の甕は、外口径 29.4cm で、口縁部が「く」の字状を呈し、端部が跳ね上げ状になる。口縁部から底部まで整理時に充分接合できなかったので、器高ははっきりしないが 35-40cm になるものと推察される。淡橙褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

K 7 1 壺棺墓 (Fig. 67 PL. 31)

調査区中央部で出土した。上面の削平が激しく、一部しか残存していない。単式か 2 個体の器を使用したのか明確にできなかった。主軸は N-43°-E で、やや傾斜角度を持って埋置される。

甕は、逆「L」字状の口縁を有し、胴部最大径は中位にくるものとみられる。全体の接合が不充分で、実測できなかった。淡褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

K 7 5 壺棺墓 (Fig. 67・68 PL. 59)

調査区南端部で検出した。削平が激しく単式かどうかはっきりしないが、主軸は東西方向で、水平に埋置される。

甕は、口縁部を欠失し、胴径 38.8cm、底径 11.6cm を測る。胴部に低い「コ」の字状突帯を 2 条めぐらす。淡赤褐色を呈し、胎土は精良にして、焼成は良好である。外面に丹の斑痕がある。

K 7 7 壺棺墓 (Fig. 67・68 PL. 33・59)

調査区西側で検出された。壺と壺を呑口式に組み合わせる壺棺墓である。主軸は N-50°-E で、10.5° の傾斜角度をもって埋置される。

上棺は、口縁部打ち欠きの壺形土器で、胴部中位に「コ」の字状突帯を 2 条めぐらす。胴部から頸部に移行する部分にも三角突帯を 1 条施す。赤褐色を呈し、胎土・焼成とともに良好である。胴径 36.8cm、底径 10.6cm、残存器高 37.5cm を測る。

下棺は、「く」の字状口縁を有する壺形土器である。口縁下に 1 条の三角突帯をめぐらし、

1 壺棺墓—小形棺—

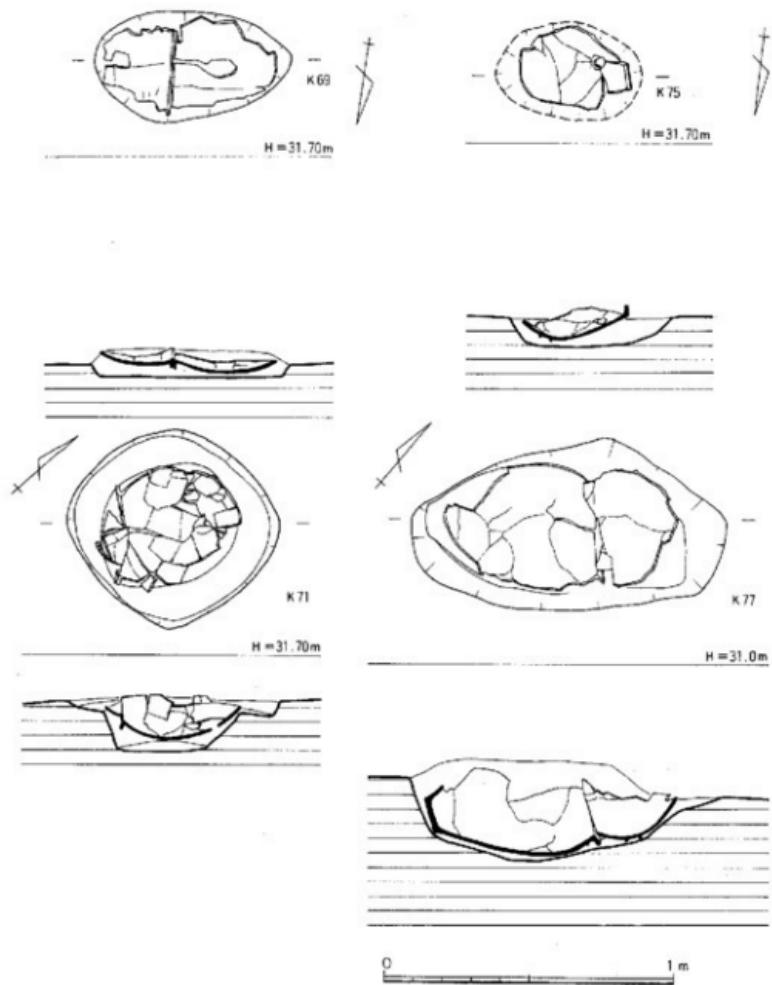


Fig. 67 K69・71・75・77 壺棺墓出土状况图 (1/20)

III 調査の記録

頸部には穴帶を付さない。外口径38.8cm、胴部最大径41.2cm、底径10.8cm、器高59.0cmを測る。胎土には砂粒や雲母などが混入し、焼成は良好である。器色も暗黄褐色で、ハケ目調整の後ナデ調整が施されている。外面底部近くにはハケ目痕が残る。

以上、小形壺25基について説明を加えたが、K 72は壺棺ではなかったので、削除した。

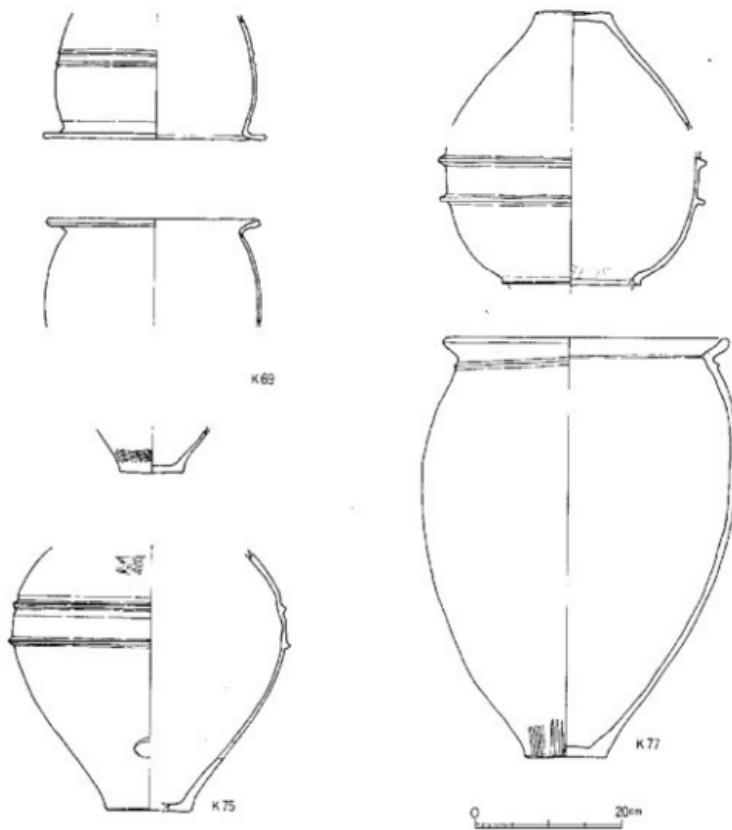


Fig. 68 K 69・75・77 壺棺実測図 (1/8)

2 祭祀土壙 (Fig. 69~72 PL. 33・34・60)

概要 墓地内では丹塗り土器を小土壙に埋納した遺構が3ヶ所検出された。

遺構は墓地中央部に2ヶ所 (SK02・03)、北西部に1ヶ所 (SK01) であり、他にも小児壙棺墓としたK10・14・24壙棺などは祭祀遺構である可能性を残している。

祭祀に使用された器種は口縁部が朝顔状に開く丹塗り壺、鋤先状口縁を有する丹塗り壺、丹塗り壺、袋状口縁を有する丹塗り壺、脚台付丹塗り壺などがある。

(1) 1号祭祀土壙 (Fig. 69・70 PL. 33)

本土壙は東西1.45m、南北1.3m程の隅丸方形のプランをなし、内部は長短が1.15×0.7m程の二段の土壙となっており、土器群はこの中に埋納される。

土器群は現存で深さ20cm程の土壙底面よりやや浮いた位置にある。図に位置をとどめているのは脚台付丹塗り壺と鋤先口縁の丹塗り壺である。以下では出土遺物の個別の説明を加える。

出土土器 (Fig. 70 PL. 60)

壺 1は脚台付壺である。扁球状の胴部からよくしまった頭部へ移り、ゆるやかに外方に開く口縁部を有する優美な土器である。

胴部最大径部から頭部にかけて5条の断面「M」字形の突帯を廻らし、突帯間には焼成前の穿孔を行う。またこの孔の周囲を円形に径1.8cm程の尖った工具で搔き取っている。注口土器の可能性が高い。

器面調整は、外面で頭部以下に暗文を施す。刷毛目の単位は幅2mmに7本程度のものである。胴部最大径の位置では、4本単位の縱刷毛目調整を施す。胴下半は横位のヘラミガキを加える。また脚部は縱方向の粗いヘラミガキの後、暗文をほどこす。

内面は、口縁上端部が横位の丁寧なヘラ巻きを加える。また頭部にはしほりが残り、胴部中位よりやや上った位置に指おさえ後幅1.5cm程の板状工具で横方向にナデを施す。

また脚部は上部にしほりが残り、中位以下はナデ調整となる。器色は外面赤褐色(丹塗り)、内面は淡褐色を呈し、壺部底は淡黒褐色となる。胎土には微細な砂粒を少量含み、焼成はやや軟質である。口径15cm、胴部最大径15.7cm、脚端部径13.6cm、器高21cmをはかる。

2は鋤先口縁壺である。朝顔状に開く口縁部は端部が垂れる。また頭部中位に3条の複合三角突帯をめぐらす。頭部以下は故意に割り取られる。

調整は外面が横位のナデで、内面は不定方向のナデである。器色は淡い灰褐色を呈する。外口径34.6cm、内口径23.6cm、残存高16.5cmを計る。胎土に粗い1~5mm程の砂を混入する。焼成は軟質である。

3は肩がはり、口縁が朝顔状に外方に開く壺である。

Ⅲ 調査の記録

器面調整は、口縁より胴部上半までヘラ状工具による横位の研磨、胴部下半は継位のヘラ研磨、外底はナデである。内面は口縁部が刷毛目調整後ナデを施す。また外面頭部に縦のヘラによる暗文を施す。暗文は頭部全周で6ヶ所にあり、10~11本単位である。

丹塗りは器外面と内面口縁部までに亘る。

口径30.9cm、胴部最大径31.2cm、底径8.3cm、器高34.9cmをはかる。胎土に1mm以下の微砂粒を少々含む。器色は灰褐色を呈し、焼成はやや軟質である。

4は全体に薄づくりの袋状口縁壺である。

口縁外面は丸味をおびる。調整は口縁部横ナデで以下は内外面ともにナデである。口径10cmを計る。胎土は細砂を含み、焼成は堅緻である。

5は半球状の胴部に直線的に外方に聞く長頭壺である。頭部に一条の低い三角突帯をめぐらす。器色は外面が灰褐色を呈し、内面は黄灰色となる。外面には黒色顔料を塗布している。器面調整は外面継刷毛目後にナデを加える。内面は粗い刷毛目調整後ナデを加え、頭部は指おさえ後に刷毛目を施す。

口径17.5cm、頭部径13.4cmをはかる。胎土は密で微砂を混じる。焼成は堅緻である。

甕 (Fig. 70-6・7)

6は口縁部外唇のよく発達した甕である。

口縁直下には1条の三角突帯をめぐらし、内面は口唇部が短く突出する。器面調整は、外面継の刷毛目調整後ナデを加える。また口縁部外面および内面は横ナデである。

器色は外面が暗灰褐色を呈し、内面は明灰褐色となる。

また胎土は密で、胎土中に径2mm程度の砂粒を混入する。焼成は堅緻である。口径は外径41cm（内径32cm）を計る。

7は口縁部が「く」字に緩く屈開する薄手の甕である。

器面調整は外面で1cm間に6~10本程の単位の縦刷毛目調整後ナデを加える。また口縁部内外面は横位のナデで内面胴部はナデである。

器色は内・外面ともに黄色味をおびた灰褐色を呈し、外面には黒色顔料塗布の痕跡が残る。胎土は密で、胎土中に微砂を混入する。また焼成は堅緻である。口径は外径21cm（内径16cm）を計る。

2 祭祀土 墓

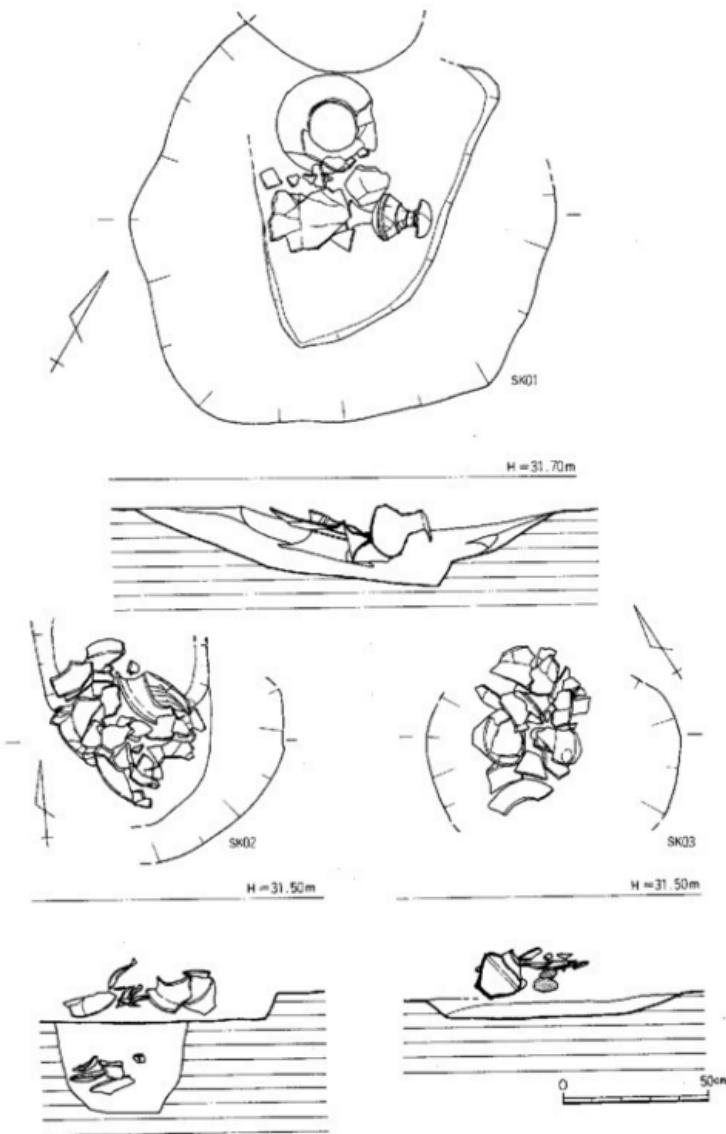


Fig. 69 1—3号祭祀土壤出土状况图 (1/20)

III 調査の記録

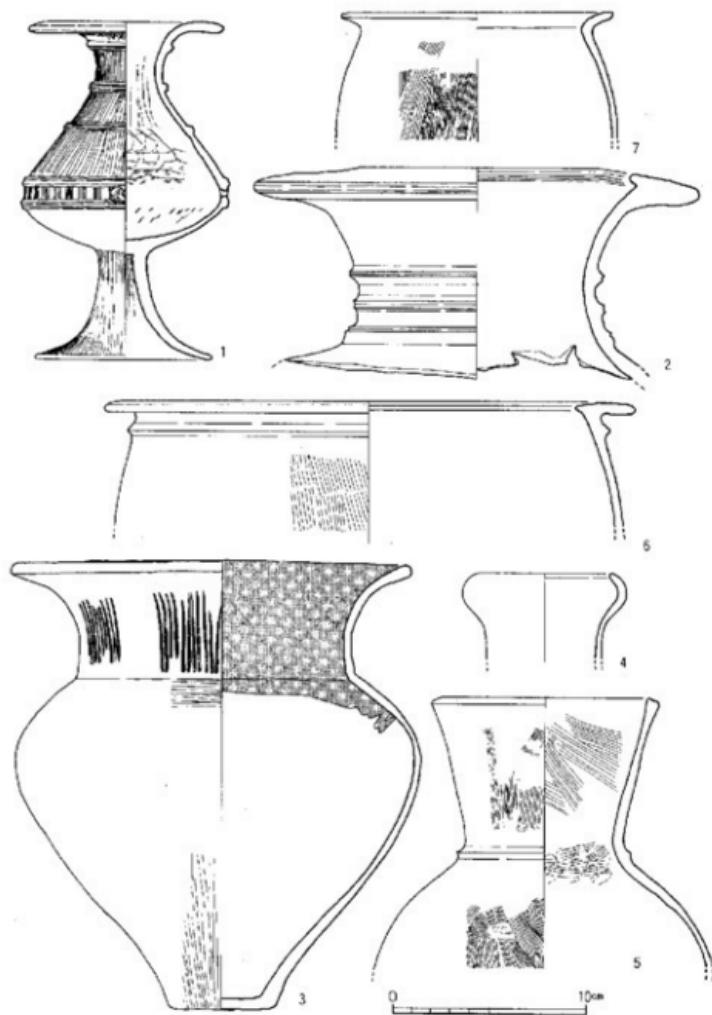


Fig. 70 1号祭祀土壙出土土器実測図 (1/3)

(2) 2号祭祀土壤 (Fig. 69・71 PL. 34)

本土壇は墓地内のはば中央にあたる位置に営まれる。K41・42・48号壺棺に囲まれた空間にあって、これらを意識した配置となっている。

土壤は、東西長90cm、南北長80cmを計る円形のプランをなし、土器群は更に内側の南に偏した部分に集積していた。土器群は壺形土器が3個体程あり、何れも頭部を境として破碎され、頭部以下の破片を下部に、また口頭部をこの上に重ねる様に投入している。

破碎された壺形土器は口縁部が朝顔状に外開し、頭部にヘラによる暗文を施すものと鷺先状口縁をなすものとがある。

出土土器 (Fig. 71 PL. 60)

1は肩部が張り、広い頭部から朝顔状に外方に開く口縁部を有する壺である。

器壁はよく整えられ、口縁端部は緩く溝状に窪む。調整は胴部外面がヘラ研磨で、下半部に一部刷毛目が残る。また口縁部外面および内面上端部付近は刷毛目調整後横ナデを加える。また胴部内面は全体にナデ調整である。

口頭部外面には幅3cm程のヘラ状工具によりほぼ3.5cm間隔で暗文が施される。

器色は口頭部が紅褐色を呈し、胴部淡黄灰色と紅褐色との斑となっている。また胴部中位および底部外端部付近には黒斑が認められる。胎土は密で微砂を混入する。焼成は堅緻である。

口径30.4cm、胴部最大径33.2cm、底部径6.5cm、器高32.8cmを計る。器面に丹塗布は認められない。

2も1と同様の形態をとるが、口縁部の端部に若干のちがいがある壺である。

器面調整は、外面で口縁部端を除き全てヘラ研磨を加える。胴部の殆どは横位のヘラ研磨であるが、底部付近は縱位となる。また内面は口縁部がヘラ研磨、胴部では丁寧なナデ調整となる。

更に口頭部では幅3.5~4cm程の暗文を7~8cm間隔で施す。

器色は丹を塗布した外面全部（外底を除く）と口縁部内面以外は淡褐色を呈する。

口径33.5cm、胴部最大径32cm、底部径7.5cm、器高31.5cmを計る。胎土密で、焼成堅緻である。

3は鷺先状口縁をもつ壺である。頭部は緩く直線的に外開し、口縁部上端面はやや窪んでいる。

器面調整は、内・外面ともに横ナデである。器色は外面が灰褐色、内面が赤褐色を呈する。焼成は堅緻で、胎土には若干の砂を混入する。口径30.8cmをはかる。

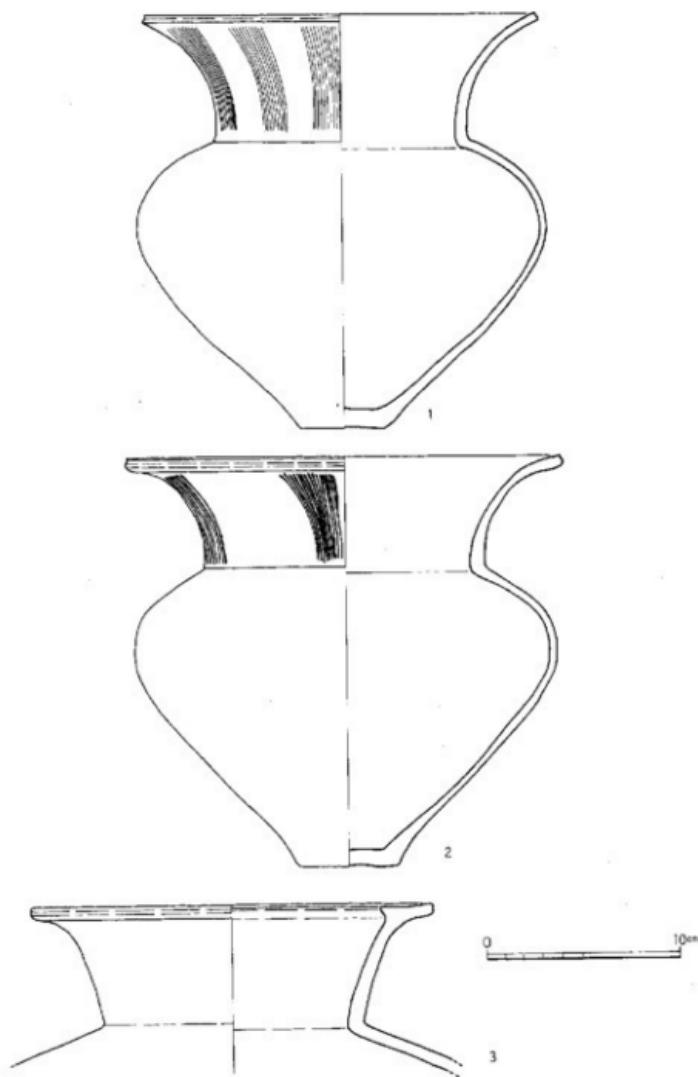


Fig. 71 2号祭祀土壤出土土器実測図 (1/3)

(3) 3号祭祀土壙 (Fig. 69・72 PL. 34)

本土壙は墓地中央部にあって2号土壙の東側に隣接する位置にある。周辺焼棺墓にはK27・35・41・42号があって、丁度これらに埋された位置にある。

土壙は長径90cm・短径60~70cmを測る梢円形のプランをなし、土器2個体が他の転疊とともに出土した。

出土土器は朝顔状に開く口縁を有する壺と胴部最大径部に突帯をめぐらす小型壺である。後者は口縁部打欠きし、胴下半に二次的穿孔がある。

出土土器 (Fig. 72 PL. 60)

1は肩の張る中型丹塗り壺である。

口縁は直立気味にのびあがり、胴部は最大径部に一条の断面が「M」字形をなす突帯をめぐらす。

器面調整は外面で口縁端部より突帯下2cm程のところまで横位のヘラ研磨を加える。また内面は口径のみが横位のヘラ研磨である。

口頭部には幅4mmで8mm間隔でタテの暗文が描かれる。

胎土には殆ど砂粒を含まず、焼成は堅微である。

口径32.2cm、胴部最大径27.8cm、底部径6.3cm、器高26.3cmを計る。

2は口縁部を打欠いた壺である。

底部は大きく、安定しており、胴部最大径部に頭部のまるい突帯を1条めぐらす。

胴部下半には外面より貫通する二次的穿孔があり、更にこれと近接して内側より穿孔しかかった箇所がある。

器面調整は胴下半部に細い綿刷毛目を残し、他は全て横ナデである。

器色は暗赤褐色を呈し、胎土は粗である。また焼成はやや軟質である。底径6.6cm、胴部最大径18.8cmを計る。

III 考査の記録

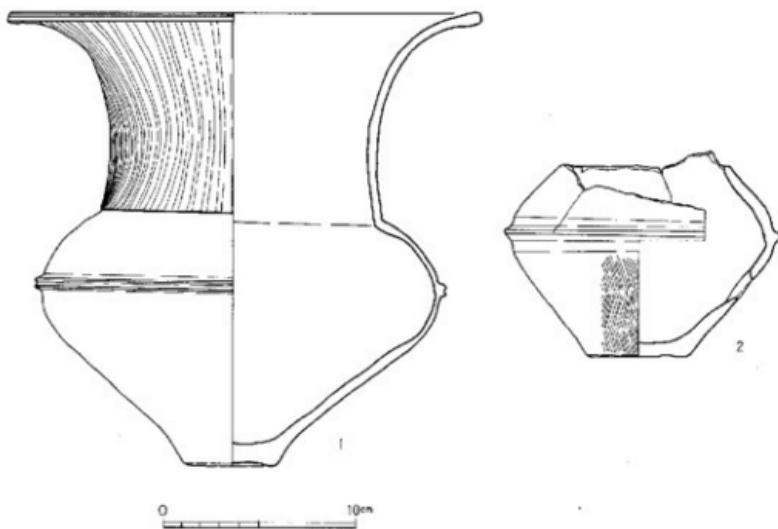


Fig. 72 3号祭祀土壙出土上器実測図 (1/3)

Tab. 2 野方・金武線第2次調査出土壙墓一覧表

| No | 主軸方向 | 位置標高角度 | 形態 | 合口形態 | 柱状體 | 規模(m) (上層+下層) | 備考 |
|----|---------------|--------|--------|-------|-----|------------------|-------------|
| 1 | N - 7.5° - W | 0° | 壺+甕 | 接口 | | 1.95 | |
| 2 | N - 52° - E | 2° | 鉢+甕 | 接口 | | 1.45 ± a | |
| 3 | S - 78.5° - W | - | 甕+壺 | 呑口 | | 0.65 ± a | |
| 4 | N - 9° - W | 34.5° | 甕 | ? | | 0.34 ± a | |
| 5 | N - 59° - E | 32° | 壺+甕 | 呑口 | | 1.25 ± a | 上甕口縫打欠き |
| 6 | S - 58° - E | 4.5° | 甕+甕+甕 | 甕口 | | 1.7 | 3個体使用 |
| 7 | N - 46.5° - W | 5° | 甕+甕 | 甕口 | | 0.66 ± a | 下甕口縫打欠き |
| 8 | S - 25.5° - E | 0° | 鉢+甕 | 接口 | | 1.42 | |
| 9 | S - 60° - W | 10° | 甕+甕 | 呑口 | | 10.8 ± a | 上甕口縫打欠き |
| 10 | N - 8.5° - W | - | 甕 | ? | | - | |
| 11 | S - 13.5° - W | 3° | 壺+甕 | 接口(?) | | 0.77 | 上甕口縫打欠き |
| 12 | N - 75° - E | 4.5° | 甕 | 單式 | | 1.06 | |
| 13 | S - 63° - E | 7° | 甕+甕 | 接口 | | 1.2 ± a | |
| 14 | N - 9° - E | - | 甕+甕(?) | ? | | - | |
| 15 | S - 87° - E | 3.5° | 甕 | 單式 | | 0.89 | |
| 16 | N - 4° - W | 0° | 鉢+甕 | 接口 | | 1.38 | |
| 17 | N - 89° - E | 3.5° | 鉢+甕 | ○ | | 1.48 ± a | |
| 18 | N - 77° - E | 0° | 甕 | 單式 | | 1.1 ± a | |
| 19 | N - 53° - E | 0° | 鉢+甕 | 接口 | | 1.55 ± a | |
| 20 | S - 33° - E | 37° | 甕 | ? | | 0.83 ± a | |
| 21 | N - 75° - E | 2° | 甕+甕 | 接口 | | 1.21 ± a | |
| 22 | N - 76.5° - E | 2° | 甕 | ? | | 0.55 ± a | |
| 23 | N - 34.5° - E | 13° | 甕+甕 | 接口 | | 1.48 ± a | |
| 24 | N - 65.5° - E | -1.5° | 甕 | ? | | 0.5 ± a | |
| 25 | N - 61.5° - E | 8.5° | 甕+甕 | 接口 | | 1.51 | |
| 26 | N - 81.5° - E | 6.5° | 甕+甕 | 接口 | | 1.44 | |
| 27 | N - 72° - E | 24° | 甕+甕 | 甕口 | | 0.52 ± a | 上・下甕とも口縫打欠き |
| 28 | N - 52.5° - E | 14.5° | 甕 | 單式 | | 0.97 | |
| 29 | S - 80.5° - E | 5° | 甕 | 單式 | | 0.98 | |
| 30 | N - 59° - E | 11.5° | 甕 | 單式 | | 1.2 ± a | |
| 31 | S - 86.5° - W | - | 甕 | ? | | - | |
| 32 | S - 11° - W | - | 甕 | 單式 | | 0.83 ± a | 打欠き・丹塗り土器混入 |
| 33 | S - 59° - W | 5° | 甕 | 單式 | | 1.14 | |
| 34 | N - 34.5° - W | - | 甕 | 單式(?) | | 0.98 ± a | |
| 35 | N - 65° - W | 13.5° | 甕+甕+甕 | 接口 | | 1.6 | 3個体使用 |
| 36 | S - 63° - E | -8.5° | 甕 | ? | | 0.65 ± a | 口縫打欠き |
| 37 | S - 62° - E | 11.5° | 甕+甕 | 接口 | | 1.28 ± a | |
| 38 | E - W | 0° | 壺+甕 | 甕口 | | 0.67 ± a | 上・下甕とも口縫打欠き |
| 39 | N - 77.5° - W | 12.5° | 甕+甕 | 呑口 | | 0.70 ± a | 上甕口縫打欠き |

III 調査の記録

| | | | | | | |
|----|---------------|-------|-----------|--------|----------------|---------|
| 40 | S - 11° - E | -10° | 黒 | 単式 (?) | 1.14 | |
| 41 | S - 35.5° - E | 42° | 黒 | 単式 (?) | 7.5+ σ | |
| 42 | N - 38.5° - E | 7° | 黒+黒 | 接口 | 1.6 | |
| 43 | N - 25° - E | 37° | 黒+黒 | 接口 | 1.1+ σ | |
| 44 | N - 70° - E | 8.5° | 鉛+黒 | 接口 | 1.54 | |
| 45 | S - 35.5° - E | - | 赤 (?) + 黒 | ? | 0.7+ σ | |
| 46 | S - 24.5° - E | 4° | 黒+黒 | 香口 | 1.52 | 上黒口縁打欠き |
| 47 | S - 8.5° - E | 1.5° | 鉛+黒 | 接口 | 1.43+ σ | |
| 48 | S - 65° - W | 7° | 鉛+黒 | 接口 | 1.23+ σ | |
| 49 | S - 45° - W | 3.5° | 鉛+黒 | 接口 | 1.54 | |
| 50 | N - 22° - E | - | 黒+黒 | 接口 (?) | - | |
| 51 | N - 23° - W | 8.5° | 黒 | 単式 | 1.1 | |
| 52 | N - 43.5° - E | 6° | 黒+黒 | 接口 | 6+ σ | |
| 53 | N - 5° - W | 3.5° | 黒+黒 | 接口 | 1.57 | |
| 54 | S - 38° - W | 4° | 鉛+黒 | 接口 | 1.46 | |
| 55 | N - 75.5° - E | - | 黒+黒 | 接口 | 0.65+ σ | |
| 56 | S - 87° - E | 3° | 鉛+黒 | 接口 | 1.6 | |
| 57 | S - 53° - W | 5° | 鉛+黒 | 香口 | 1.18+ σ | |
| 58 | N - 73° - W | 3° | 黒 | 単式 | 0.86+ σ | |
| 59 | N - 13° - W | 33° | 黒 | ? | 0.45+ σ | |
| 60 | N - 48° - E | 1.5° | 黒+黒 | 接口 | 1.5 | |
| 61 | N - 6° - W | 7° | 黒+黒 | 接口 | 0.6 | |
| 62 | N - 43.5° - E | -4° | 黒+黒 | 接口 | 1.22+ σ | |
| 63 | N - 73.5° - W | 27° | 黒 | 単式 | 1.0+ σ | |
| 64 | N - 10.5° - W | 19° | 赤+黒+黒 | 接口 | 1.34+ σ | 3個体使用 |
| 65 | N - 61° - E | 38.5° | 黒 | ? | 0.27+ σ | |
| 66 | S - 52° - E | 16° | 黒 | ? | 0.60+ σ | |
| 67 | S - 83° - W | 25° | 黒 | ? | 0.33 | |
| 68 | S - 74° - E | 4° | 黒+黒 | 香口 | 1.46 | |
| 69 | N - 81° - E | 5° | 黒+黒 | 接口 | 0.50+ σ | |
| 70 | N - 47° - E | 12° | 黒 | 単式 | 0.98 | |
| 71 | N - 43° - E | - | 黒+黒 | 接口 (?) | 0.46 | |
| 72 | | | | | | 欠番 |
| 73 | S - 87° - W | 0.5° | 赤+黒+黒 | 接口 | 1.25 | 上黒口縁打欠き |
| 74 | N - 35° - W | 0° | 鉛+黒 | 接口 | 0.94+ σ | |
| 75 | N - 88° - W | 0° | 赤 | 単式 (?) | 0.37+ σ | |
| 76 | S - 69° - W | 30° | 黒 | 単式 | 1.06 | |
| 77 | N - 50° - E | 10.5° | 赤+黒 | 香口 | 0.84+ σ | |

3 その他の遺構

概要 路線内調査区のうち約850m²が遺構密度が濃く、弥生時代甕棺墓地の調査と併行して生活遺構の検出にあたった。

調査地は遺構面の地山土が地点によって変化し、北端部の黄褐色礫泥り粘土から、南側に従って暗黄褐色粗砂質土へと漸次推移することから、検出に当っては自然營力による土壤状の産みも掘下げる結果となった。

遺構の分布は希薄であり、調査区北端部にある自然流路であるS D01溝を限界とする。

調査によって検出したのは掘立柱建物（S B01）1棟・石組み遺構（S X01）1基である。他にS B01建物の北側部分には掘方内に扁平角礫を礎板としておく柱穴や西から東へ流れる溝状遺構などが見付かったが、遺物の発見は殆どなく、まとまりを欠くものであった。

以下ではこの2遺構について説明を加えるが、時期決定の有効な資料が少なく、建物については表探資料に越州窯青磁破片が付近から見付かっている。

(1) 掘立柱建物 (Fig. 73 PL. 35)

調査区北端で見付かった掘立柱建物は2×2間の純柱建物と考えられるが、後世の搅乱によって南辺の2本を失なっている。

建物規模は柱痕が明らかではなく、正確には確定し難いが柱掘方の中央で考えると東西長2.7m、南北長3.3mを計る南北建物である可能性が高い。

柱掘方は全て隅丸長方形を呈し、規則的配置をなす。各柱掘方の現存規模を示すと、南西隅の1は長辺80cm・短辺65cm・深さ20cm、2は長辺85cm・短辺65cm・深さ16cm、3は長辺100cm・短辺75cm・深さ25cm、4は長辺80cm・短辺60cm・深さ15cm、5は長辺60cm・短辺50cm・深さ14cm、6は掘り方のますきから不整となっているが、本来は一辺が70cm程の方形に近いものと考えられ、深さ20cm、7は長辺65cm・短辺55cm・深さ10cm（北東隅）を計る。

建物の造営時期については掘方内埋土から土器類が出土することが無く、時期決定についての有効な資料に乏しい。

併し乍ら前記の様に遺構確認面では古代（平安時代前期）の輸入青磁器などが採集されており、柱掘方の形状や飯盛・吉武地区圓場整備事業に伴う調査で接する位置に同時期の寺院遺構が確認されている事と考えあわせると本建物も9世紀を前後する頃の所産である可能性が高いのではなかろうか。

Ⅲ 調査の記録

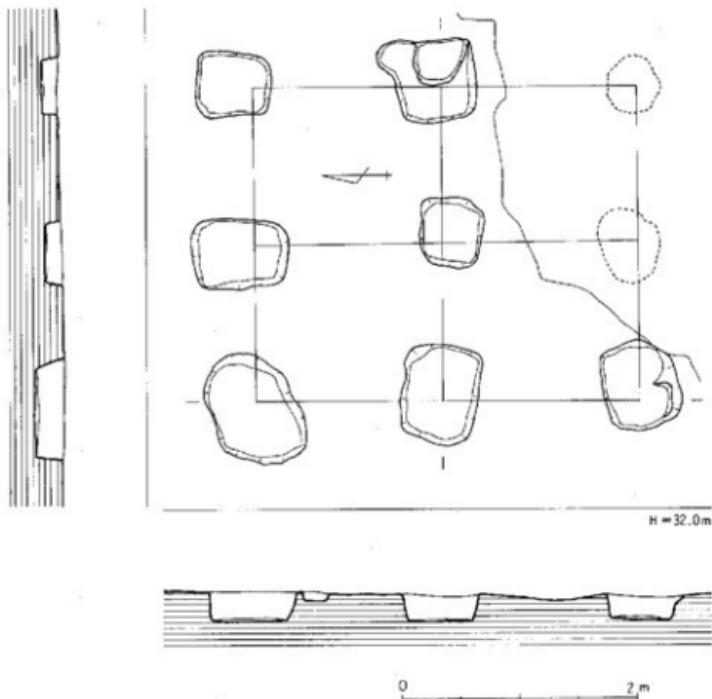


Fig. 73 S X01 建物出土状況図 (1/50)

(2) S X01石組遺構 (Fig. 75 PL. 35)

本遺構は調査区南側に検出されたが、他の遺構とは関連をもつものが少なく、僅かにこれより東南側に伸びる溝遺構（南東部への延長7m、幅1.5m、深さ5cm）の溜り部に相当する。

遺構はほぼ東西方向に軸をとり、東西長4.5m、南北幅3m、中央部深さ20cm、各壁際での深さは10cm程の残いものである。

内部には北側壁寄りに径50cm大のものを最大とし30cm程度の角礫が集積していた。これらは人工的に石組みを加えたものではなく、自然的流入によってなった可能性が高い。

埋土中からは西端部で縄文時代後期の粗製土器と考えられる条痕土器片が出土したが本遺構に伴うものではなかろう。時期については不詳である。

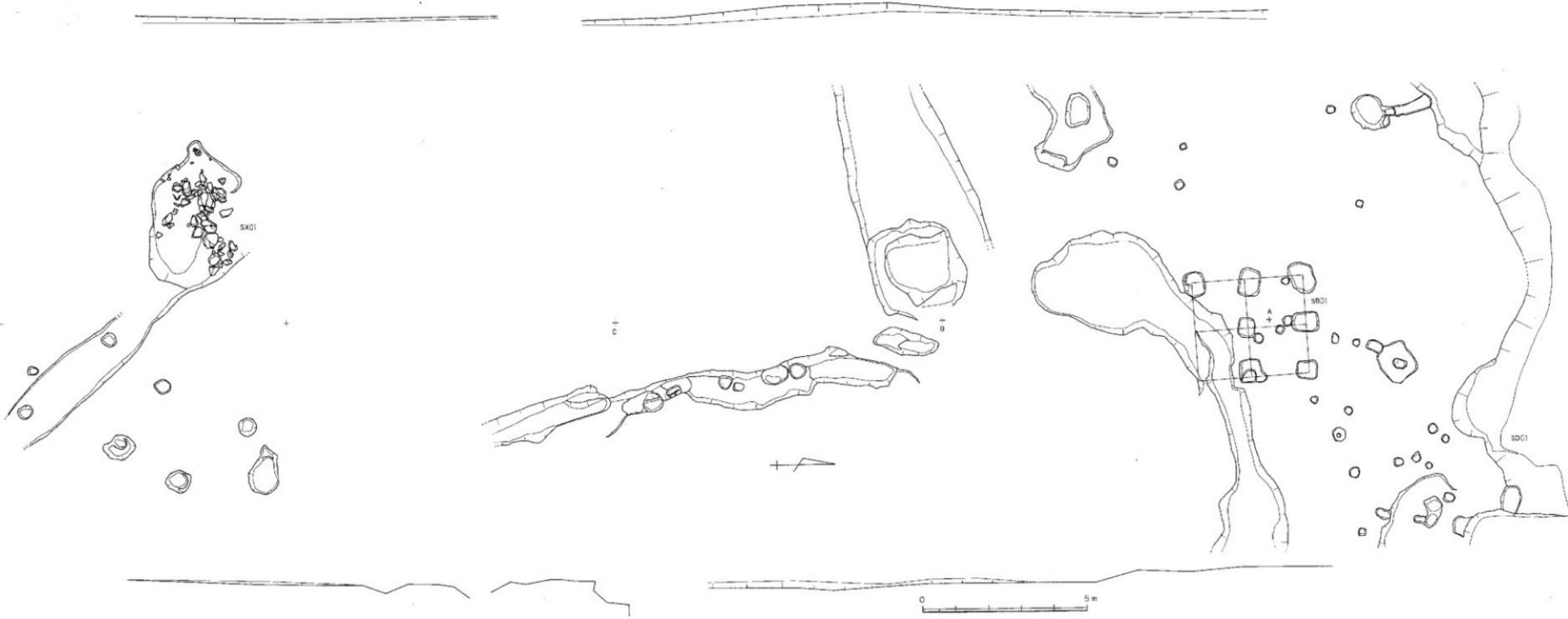


Fig. 74 漢林配圖 (2)

4 調査区出土の遺物

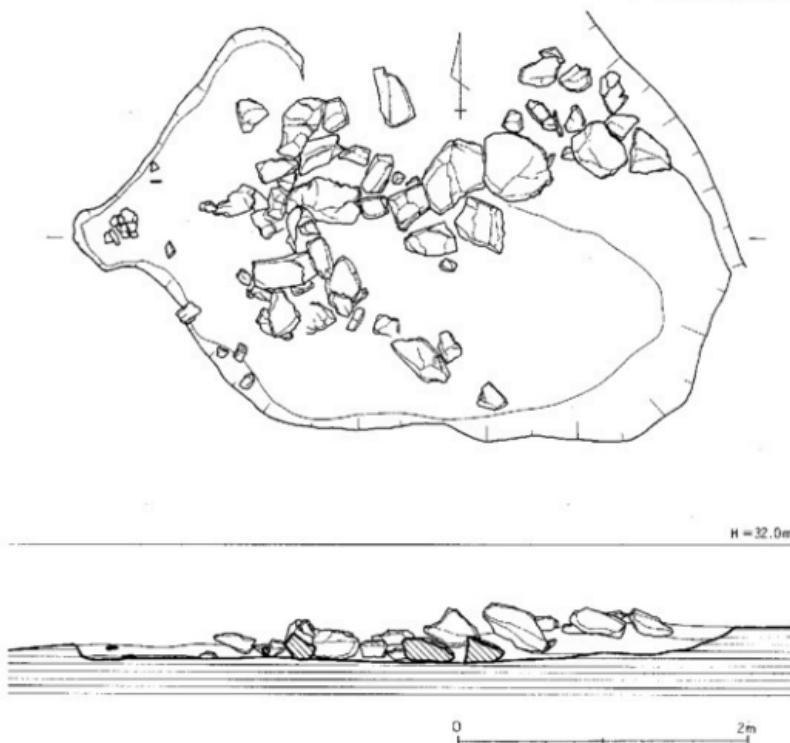


Fig. 75 S X01 石組遺構出土状況図 (1/40)

4 調査区出土の遺物 (Fig. 76~79)

路線内調査区では遺構検出面や調査区北端部を流れる自然流路 (S D 01) の上端部付近埋土で多量の弥生時代中期上器・須恵器の他青磁器などが出土した。

特にこの中では須恵器・青磁器が特徴的であり、遺構より流離した遺物ではあるが、周辺の古墳群や掘立柱建物群の存在を考えるとき必要な資料となって来よう。

須恵器は器種として环蓋・环身・高环・甕・器台などを含んでいる。

また他に出土した青磁器は蛇ノ目高台を有する越州窯青磁で器種は水注・碗などがみられたがここに図示できない。

以下では須恵器の器種ごとに個別の説明を加えたい。

III 調査の記録

坏蓋 (Fig. 76-10・15・11・16・26・9・8・17・7)

10は口縁部～天井部の小破片である。口縁端部はやや丸味を帯び、口縁内端部が段をなし窪む。天井部との境は低い段をなし、窪む。外面は灰を被るが、端部よりやや上部に回転ヘラ削りを施し、他は横ナデである。器色は灰色を呈し、焼成は堅緻である。胎土に径1～2mmの石英砂を多く含む。

11は10と似る蓋口縁部小破片である。口縁部は立ち、天井部との境は緩い突起をなす。内外面ともに器面の荒れが激しい。

口縁部内面は緩い棱をなすが、非常に鈍い。器色は灰色を呈し、焼成はやや軟質である。胎土に径1mm程の石英砂を多量に混入する。

15は天井部に平たい擬宝珠つまみをもつ坏蓋である。外面の調整は回転ヘラ削り後に横ナデを加える。轆轤回転は時計回りか。器色外面灰色を呈し、内面暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。胎土に径1～2mmの石英砂を多く混入する。

16は15よりやや大型の坏蓋である。天井部のつまみは更に低く、端部は丸く、中央が窪む。外面は回転ヘラ削りを施し、他は全面横ナデか。器色は外面が暗灰色を呈し、内面灰色となる。胎土に石英砂を多量に含む。

26は低い天井部中央に小型の筒状つまみを付す。天井部と口縁部との境は高い突起をなし、斜上方にのびあがる。口縁部は外方にひらく。口縁部突起上部に回転ヘラ削り後に横ナデを施す。また天井部内面をナデで、他は内外面ともに横ナデである。つまみに指圧痕がある。器色は灰黒色を呈し、焼成堅緻である。径2mm前後の石英砂を多く混入するが密である。

9は天井部を欠失する坏蓋である。口縁部はやや長く、天井部との境は鋭くとがる。調整は外面天井部ヘラ削り後に横ナデで、内面も同様である。器色は灰色を呈し、焼成堅緻である。胎土に石英砂を多く混入する。口径12.4cm（復元値）をはかる。

17は天井部を欠失する坏蓋である。口縁部はほぼ直立するが丸味をもち、内端部は深く窪み、端部は尖る。天井部との境は低い段をなし、外上部は回転ヘラ削りを施す。他は横ナデである。器色暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。胎土に径1mm程の石英砂を多く混入する。口径13.8cm（復元値）を計る。

8は天井部との境が緩く不明瞭に窪む坏蓋で、天井部頂を欠失する。天井部外面は回転ヘラ削りで他は全て横ナデである。轆轤回転は時計まわりである。器色は灰色を呈し、焼成は堅緻である。胎土に1mm程の石英砂を混入し、焼成は堅緻である。口径12.6cm（復元値）を計る。

7は器高の低い坏蓋である。天井部を欠失する。口縁部との境は鋭い突起をなし、口縁部は緩く外方に伸びる。天井部外面は轆轤回転時計回りでヘラ削りを加える。他は全て横ナデである。器色淡灰色を呈し、焼成は堅緻である。胎土に石英砂を多く混入する。口径14.6cm（復元値）を計る。

4 調査区出土の遺物

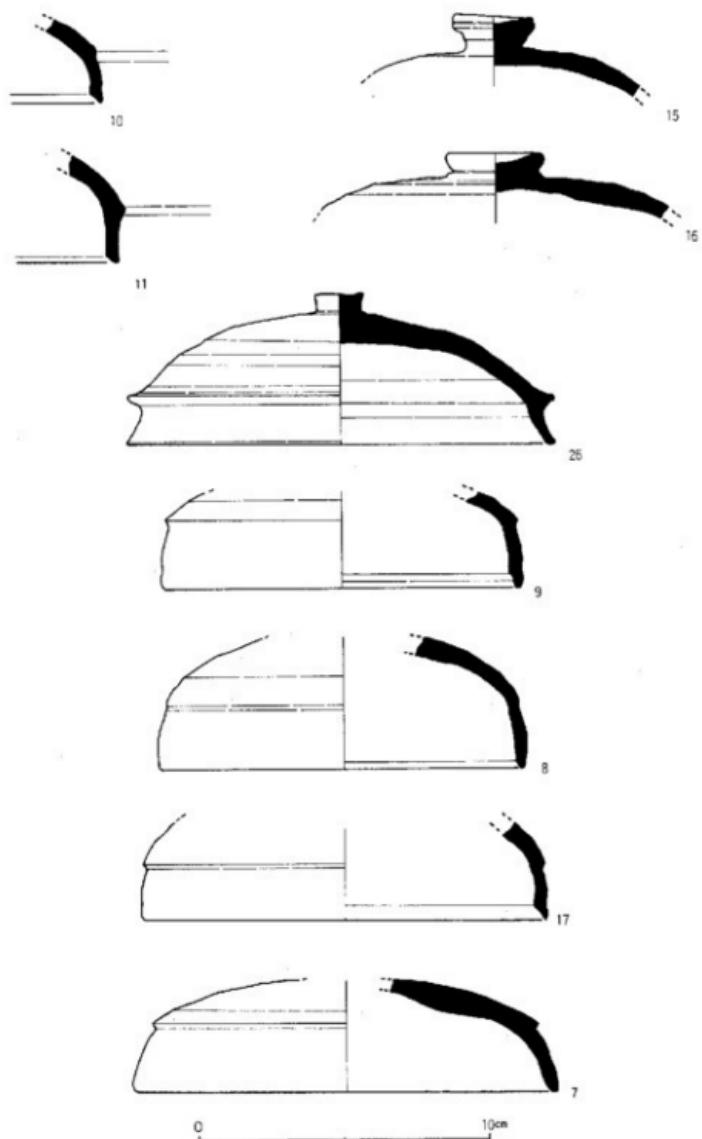


Fig. 76 調査区出土遺物実測図 (I) (1/3)

Ⅲ 調査の記録

坏身 (Fig. 77-2・13・3・6・4・19・18・12)

2は器高が低く、底部の広い坏身である。全体の1/3程を失う。口縁受部は短く、斜上方に伸びあがり、立あがりは上端に従って垂直に伸びる。端部はやや肥厚して内面が段状に窪む。底部は外面の1/3程を回転ヘラ削りする。また他は横ナデである。器色は灰色を呈し、焼成は堅微である。胎土に1~2mm程の石英砂を若干混入する。口径12.2cm (復元値) をはかる。

13は低い高台坏である。口縁部を殆ど全て欠損する。高台は坏外底端部よりやや這入った部分に貼付する。調整は外底部に回転ヘラ削りを加え、内底部がナデである他は全て回転による横ナデである。器色は灰色を呈し、胎土に多量の石英砂を混入する。高台径6.6cm (復元値) をはかる。

3は底部を欠損する坏身である。全体に薄手づくりで、小型の水平な受部に、やや長い内傾する立あがりを付ける。器色はやや暗い灰色を呈し、焼成は堅微である。器面調整は横ナデか。胎土に微細な石英砂粒を若干混入する。口径は11.6cm (復元値) をはかる。

6はやや口径の小さい坏身破片である。底部は短く水平に外方に伸び立あがりは、緩く内傾して細身である。端部は尖る。器面調整は内外面ともに回転による横ナデである。器色は暗灰色を呈し、焼成は堅微である。胎土は密で、焼成は堅微である。口径9.8cm (復元値) をはかる。

4は坏身6と非常に類似した形態をなし、立あがり端部がやや屈曲する坏身である。器壁は薄めで、特に口縁部には顯著である。

受部は水平となり、内外面ともに回転による横ナデ調整を施す。器色は暗灰色を呈し、焼成は堅微である。口径10.8cm (復元値) をはかる。

19は坏身の小破片である。体部を殆ど失する。短い水平な受部に内傾度の強い立あがりを付す。器面調整は内外面ともに回転による横ナデを施す。器色は青灰色を呈し、焼成は堅微である。胎土は精良で密である。口径12.2cm (復元値) を計る。

18も同様に坏身の口縁付近の小破片である。立あがり部の小さい割には口径は大きく、若干現在より小型になるかも知れない。器面調整は内外面ともに回転による横ナデ調整を加える。器色は灰白色を呈し、焼成は堅微である。胎土には微細な石英砂粒を若干含み、口径12.2cm (復元値) を計る。

12は器高の非常に低い坏身である。広い底部から45度程の角度で外方に立あがる体部は受部が斜上方に伸び、内傾度の著しい、短い立あがりがつく。底部は外端部がヘラ切り離し後に粗雑なナデを施す。また外底部端に一部回転ヘラ削り痕を残し、内底部をナデる以外は全て横ナデである。器色は外面が暗灰色、内面が淡灰色を呈する。胎土には石英砂を多量に混入する。調整時の糖櫂回転方向は時計まわりである。口径12.6cm (復元値) を計る。

1 墓棺墓一小形棺一

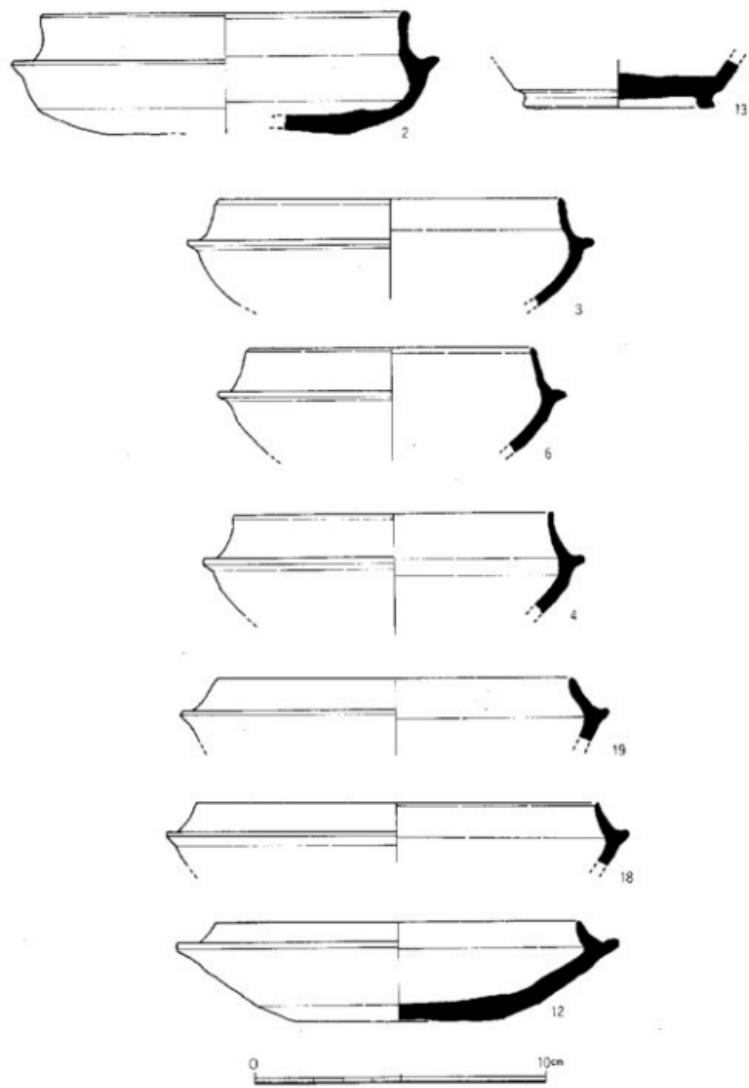


Fig. 77 調査区出土遺物実測図 (2) (1/2)

Ⅲ 潟の記録

高坏 (Fig. 78-5)

5は有蓋高坏々部破片である。約1/3が残る。坏部は浅く、内傾度の強い立あがりは端正なつくりである。器面調整は外面回転ヘラ削り後に荒い横ナデを加える。また内面は全て不定方向のナデで、口縁内外面は横ナデである。器色は外面が暗灰色、内面が淡灰色を呈する。外底部にあたる胸部との境は接合を容易にするためのヘラ描きが施される。調整時の輪轂回転は反時計回りである。胎土には径1~2mm程の石英の混入が多く、焼成は堅緻である。口径13.4cm(復元値)を計る。

甕 (Fig. 78-23・21・22)

甕は胴部破片はまとまって出土しているが、図示可能なものは少なく、僅かに3点である。23は外開する口縁部が端部で折れ、肥厚する。端部は鋸い。器色が暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。胎土には径1mm程の石英砂を少量混入する。調整は内・外面ともに横ナデである。口径14.2cm(復元値)を計る。

21は23に比較するとやや直立気味の口縁部を有し、端部は肥厚して下部に垂れる。器面調整は内外面ともに横ナデで、内面下端はやや強くおさえた横ナデとなる。器色は灰白色を呈し、焼成は堅緻である。胎土には径1~2mm程の石英砂を若干混入している。口径17cm(復元値)を計る。

22は口縁端部形が21と類似する。外開度は強く、器面調整は内・外面ともに丁寧な回転による横ナデを加える。器色は内・外面ともに灰白色を呈し、焼成は堅緻である。口径21.2cm(復元値)を計る。

器台 (Fig. 78-1・25、Fig. 79-24・14・20)

器台は脚柱部破片にも坏部や脚端部に連絡しない破片であるが、調査区周辺の消滅古墳に伴うものであろうか。

1は器台坏部破片か。あるいは把手付鉢形土器の小破片である。低い三角状突帯下に細かい波長の比較的長い波状文1条を施す。器色は内外面ともに暗灰色を呈し、焼成は非常に堅緻である。器面調整は内外面ともに回連によるヘラナデである。

25は脚部径が10cm程を計る器台脚部付近の破片である。器色は暗灰色を呈し、焼成は非常に良好な土器である。坏部の底部付近をうかがうことができる。脚部は低い三角状の突帯で、工具による仕あげが顕著に残る。器面調整は外面が横ナデであるが、他は器面のあれのため調整は不明である。胎土は非常に密で、焼成は堅緻である。

24は器台坏部破片である。口縁端部は緩やかに屈曲して外方に開く。器壁は全体に均一であり、端正なつくりである。

外面は口縁直下のものを含めて4条の突帯を廻らし、最上の突帯間に波状文、次の間に単位が7本程度の櫛描き文を継に施す。更にこの下部には波状文が施され、これらの施文原体は全

4 調査区出土の遺物

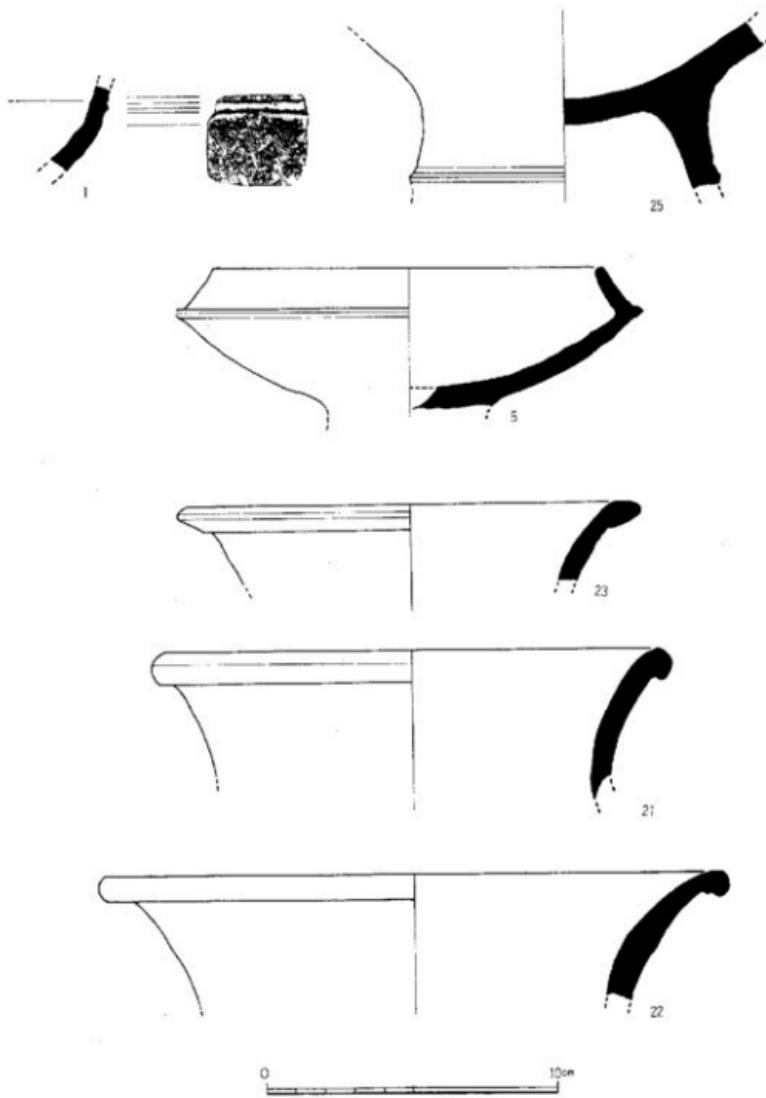


Fig. 78 調査区出土遺物実測図 (3) (1/2)

III 調査の記録

て同一と考えられる。

器は器色が内外面ともに黒灰色を呈し、焼成は非常に堅緻である。胎土には石英砂の混入が若干みられる。口径28.4cm（復元値）を計る。

14は器台脚筒部破片である。下端には脚裾部が段をなして外にひろがる部位に突帯が付される。

脚筒部は上端まで現存しないが、5段以上の三角形透孔を穿つ。透し窓の部位は低い三角状突帯間にあたり、穿孔前には原体単位が10~11本程の波長の小さい波状文が描かれる。また透し窓の数は各突帯間で6~7個程度と考えられる。器色は内外面ともに灰色を呈し、焼成は堅緻である。胎土には石英砂を若干含み密である。器の残存は約1/4程度と考えられる。脚筒部最大径は11.5cmをはかる。

20は器台脚部裾と考えられる。器は端部内面がやや窪み、やや上った位置に2条の低い突帯を廻らす。この上部には波長の短い波状文の痕跡が残る。器面調整は内外面とともに回転による横ナデ調整である。器面は表面の磨減が著しい。

器色は灰白色を呈し、焼成は堅緻である。胎土に石英砂の混入が若干あり、焼成は堅緻である。脚裾部径18.4cm（復元値）をはかる。

以上路線内の主として遺構検出面で採集された須恵器類について個別に説明を加えて来たが、小破片ながらこれらの須恵器類の中にも坪蓋26などの占式の様相をもつものや同17の様に1987年6月に発掘された早良区重留塚^{重留}出土の製品に似るものも散見される。

註「重留遺跡」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第178集」1988 福岡市教育委員会

4 調査区出土の遺物

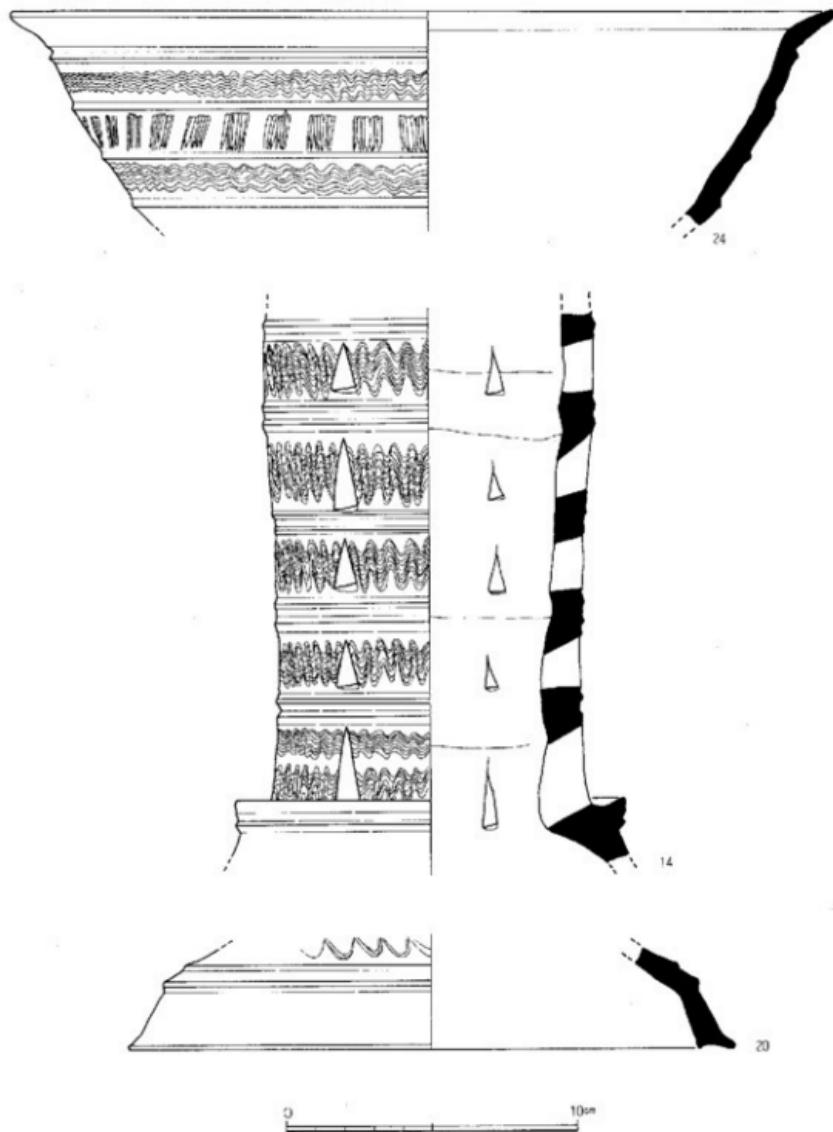


Fig. 79 調査区出土遺物実測図 (4) (1/3)

IV ま　と　め

これまで野方・金武線新設路線内の壇棺墓地およびこれに伴う祭祀遺構、他の生活遺構について調査成果を述べて来た。

検出した各遺構は過去の營力による削平工作で必ずしも遺存状況は良好ではなかった。

特に弥生時代壇棺墓地では大型棺が全体の半分程しか遺存しない例が多くみられ、時期的構成は別にして総数76基のうち成人棺51基、小児棺25基という構成で、各時期に成人棺があるにも拘らず、小児棺の数が少ないと非常な削平が要因と考えられよう。

このような遺存状況のもとでは各壇棺墓間の墓塙の切り合いによって近接する型式的前後関係を検証する事は困難であり、従って本調査で検出した壇棺墓の型式編年観についてはこれまでの研究成果の全面的援用に拘ることになる。

ここでは橋口氏による試案^{註1)}を用いて各壇棺墓の位置について触れ、次いで個別壇棺の観察にもとづく若干の分析を行うこととする。

1. 型式編年の位置

調査で検出した壇棺は5期に分類できよう。I期（IIc式）—中期前葉、II期（IIIa式）—中期中葉、III期（IIIb式）—中期後葉、IV期（IIIc式）—中期末、V期（IVa式）—後期初頭である。

以下各壇棺を区別すると、

I期（中期前葉）

成人棺—K02・K20（2基）

II期（中期中葉）

成人棺—K01・K05・K18・K43・K44・K46・K47・K48・K49・K51・K54・（K55）
・K56・K60・K68（15基）

III期（中期後葉）

成人棺—K08・K12・K15・K16・K17・K21・K26・K29・K32・K33・K36・K40・K
57・K58・K63・K70・K74・K76（18基）

小児棺—K04・（K14）・K22・K24・K27・K31・K38・K52・K61・K65・K67（10基）

IV期（中期末）

成人棺—K23・K25・K28・K30・K34・K37・K39・K41・K62・K64・K73（11基）

IV まとめ

小児棺 - K 03・K 07・K 10・K 11・K 50・K 66・K 69・K 75 (8基)

V期 (後期初頭)

成人棺 - K 13・K 19・K 35・K 42・K 43・K 53・K 68 (7基)

小児棺 - K 09・K 59・K 77 (3基)

となる。

2. 各期壺棺墓の平面的分布 (Fig. 80~82)

本調査区での壺棺墓地は延長450mにも及ぶ吉武壺棺墓の帶状分布の南西部の一角を占めるが、過去的削平によって失なわれたものを含めると十分に墓地形式の動向を示すものとはならないであろうが、Fig. 80~82では一応の時期別分布図を示した。但し Fig. 80は中期前葉～中葉を同時に表したものであり、Fig. 81は中期後葉～末を一くくりとした図である。

これによれば平面的分布の中でⅠ期～Ⅱ期 (中期前葉～中葉) では古地上は中央部を南西から北東方向に向けており、続くⅢ期～Ⅳ期 (中期後葉～末) にかけてはこれらの分布を避けたかの様に周辺に分散する傾向が認められ、一部には位置的に小単位をなすと考えられる小群もある。それはK 57・K 58・K 76・K 67・K 63・K 64・K 65・K 73・K 66の9基でなる北側に東西に連なる一群と東南側には南北に連なるK 33・K 34・K 29・K 30・K 32・K 31・K 74・K 06の一群などであり他でも並列的配置をなすものが認められる。

またV期では壺棺墓そのものの数が減少するとともにⅢ～Ⅳ期の分布間隙を縫う様に南西から北東方向に配置される。

この様な墓地古地上での集合・分散・集合という運動は博多区金隈遺跡での前期末～後期初頭における分布動向と相通じるところであり、今後の吉武遺跡群全域での遺構操作によって把握されるべき課題の一つである。

3. 壺棺の観察

棺に使用された壺は前記の様に完器が少なく、しかも器表の荒れが著しいものが多い中で、これから述べる、丹塗り、黒塗り、黒斑についても試料として必要な条件を備えたものは決して多くないが、以下観察できたものについて示すこととする。

① 丹塗り壺棺

壺棺の主として器表面に丹 (赤色顔料) を塗布したものは以外に多くない。これは器面の磨滅・剥落によるものが多くあり、絶対数の減少につながっているものと考えられる。

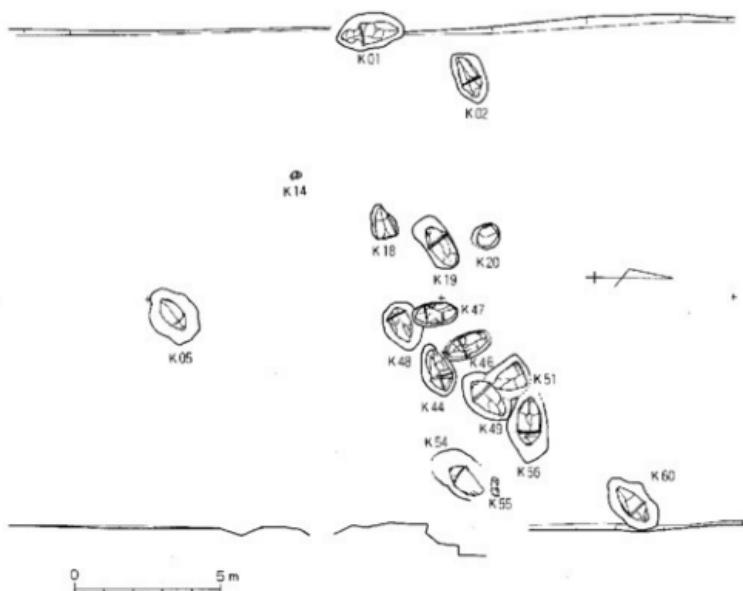


Fig. 80 壳棺時期別構成図(1) (中期中葉)

今回の壳棺では10個体が明らかになった。これによるとⅠ期（中期前葉）では無く、Ⅱ期（中期中葉）で3個体に認められる。またⅢ期（中期後葉）では4個体あり、続くⅣ期（中期末）では3個体に塗布されている。

続くⅤ期では全く認められない。

またこれらのうち8個体までがⅢ～Ⅳ期に属する単式棺である。

② 黒塗り壳棺

壳棺の内外器表面に所謂黒色顔料を塗布したものは県内各地の壳棺遺跡で注目されつつあるが、本遺跡でも監察の結果僅かに3個体ではあるが確認するに致った。これらはⅠ期（中期前葉）では認められず、Ⅱ期（中期中葉）でも無かった。続くⅢ期（中期後葉）で2個体に、Ⅳ期（中期末）で1個体に塗布が認められた。またⅤ期（後期初頭）では認めることが出来なかった。

③ 黒斑のある壳棺

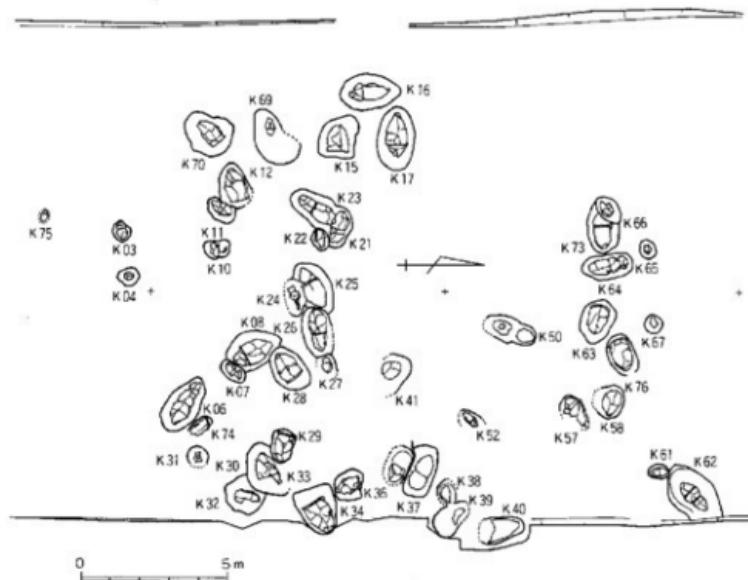


Fig. 81 墓棺時期別構成図(2) (中期後半)

窯を使用しない所謂野焼きの指標とされる壺棺の内外器表面にみられる黒斑は謂はば通有のものである。この観察も器体の遺存の悪い中であってみればどれほど成果が有効であるかと思われるが以下黒斑の有無とその部位について示す。

器表外面に黒斑を有する壺棺は76基のうちのあわせて61個体に認められた。

墓地の初期にあたるⅠ期（中期前葉）では1個体であった。また続くⅡ期（中期中葉）では13個体に認められる。Ⅲ期（中期後葉）で18個体、Ⅳ期では18個体であった。そしてⅤ期（後期初頭）では12個体に認められた。

黒斑の認められる部位は主に器表外面である。

次に黒斑の認められる部位を各期毎に記すこととする。

Ⅰ期（中期前葉）では1個体の胴部上半部に認められた。またⅡ期（中期中葉）では13個体のうち口縁部より底部まで連続して認められるもの2個体、胴部突帯の上・下にあるもの1個体、胴部突帯～底部外面の一部にあるもの8個体、胴部上半にあるもの1個体、底部外側にあるもの1個体の構成であるが、このうちの1個体に内面胴部に黒斑をもつものがある。

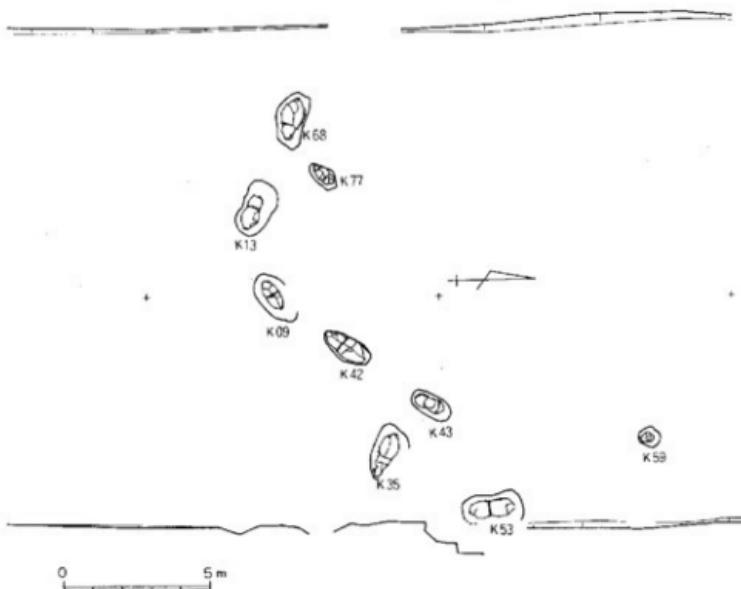


Fig. 82 墓棺時期別構成図(3) (後期初頭)

続くⅢ期（中期後葉）のものは18個体のうち、器胴部中位より口縁に至るもの3個体、胴部上半にあるもの2個体、胴部中位～底部に至るもの5個体、胴部中位に集中するもの4個体、また胴部突帯の上・下にあるもの1個体、底部のみにあるもの3個体の構成である。

Ⅳ期（中期末）のものは18個体のうち、口縁部より底部に至るのが1個体あり、胴部中位から底部に至るのが2個体、胴部突帯から底部に至るもの1個体、それに胴部中位に集中するもの12個体、底部に集中するもの1個体となっている。

またⅤ期は12個体のうち、口縁から底部に亘るもの1個体、胴部の下半に集中するもの5個体、胴部に集中するもの3個体、それから底部のみのものが2個体あり、これらは何れも外面にあり、他に1個体胴部内面に認められるものがある。

4. 祭祀遺構について

墓地内で検出された3基の祭祀土壙は何れも小型の円形窪穴に数個の丹塗り土器類を主に投入するもので、他に溝状の施設とかの大形遺構をともなう例と異なり、諸はば個別墓棺への祭祀と考えられまいか。

IV ま　と　め

使用される土器類は丹塗りの壺形土器・壺形土器類（朝顔状口縁を有する壺・鋸先口縁を有する壺・袋状口袋を有する壺）および脚台付丹塗り壺などの謂はば小型の器種であり、他にみられる大型器台（筒形器台）や高环類などを含まないものである。これは本調査区の東側に隣接するM・N-16地区やL・M-16地区でも同様の様相であった。祭祀土壙は何れもⅢ期（中期後業）に含まれるものと考えられる。

註)「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告（XXXI-中巻）」1979年 福岡県教育委員会

図 版
PLATES



調査区周辺航空写真



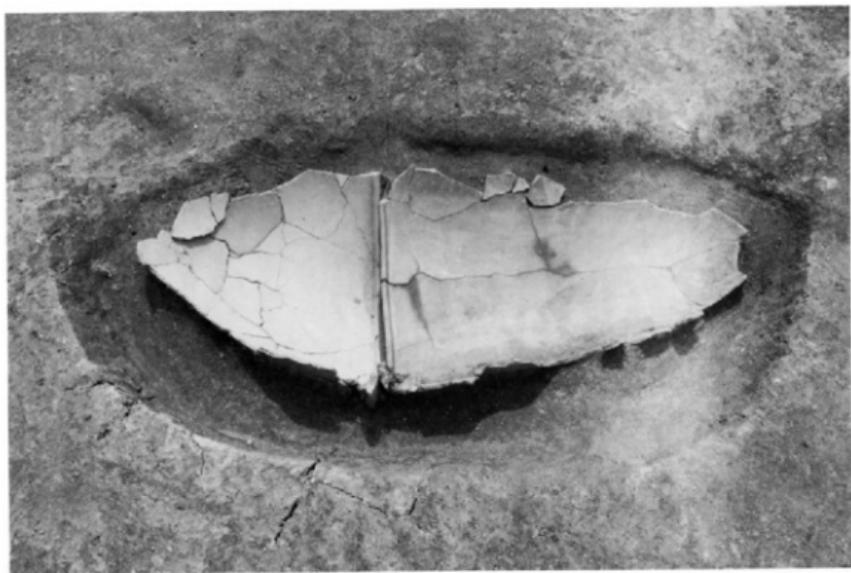
(1) 調査区全景（南から）



(2) 調査区近景（西から）



(1) K01 龜棺墓出土状況（西から）



(2) K02 龜棺墓出土状況（北から）



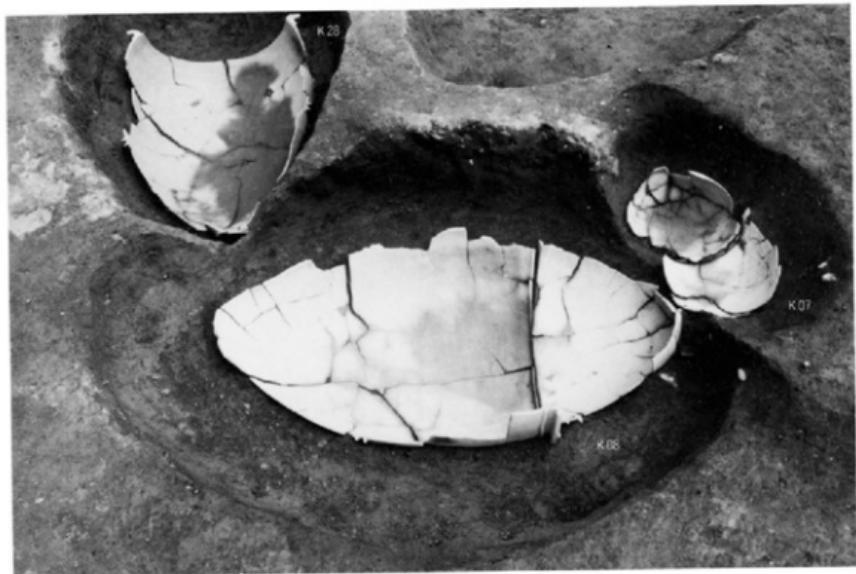
(1) K03甕棺墓出土状況（北から）



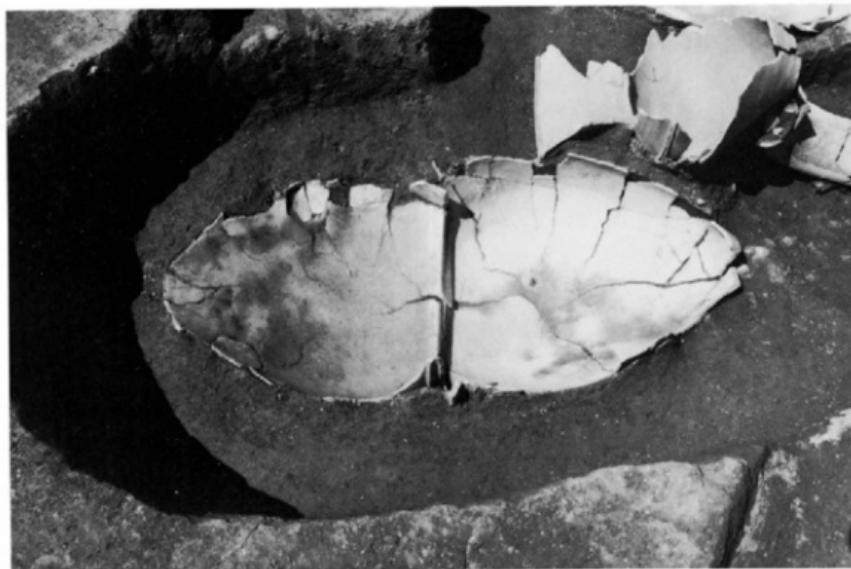
(2) K05甕棺墓出土状況（北から）



(1) K06廻棺墓出土状況（西から）



(2) K07・08・28廻棺墓出土状況（西から）



(1) K09甕棺墓出土状況（南から）



(2) K10甕棺墓出土状況（西から）



(1) K11~13斎棺墓出土状況（東から）



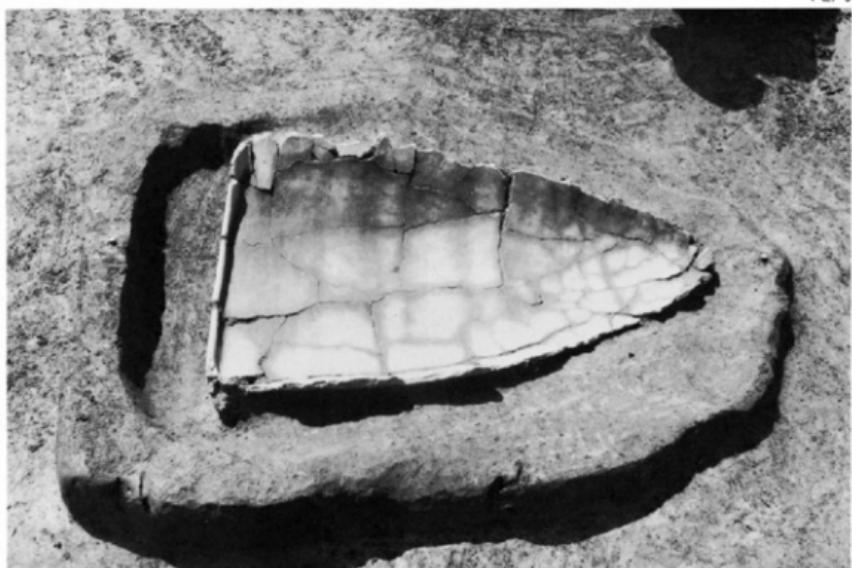
(2) K15斎棺墓出土状況（北から）



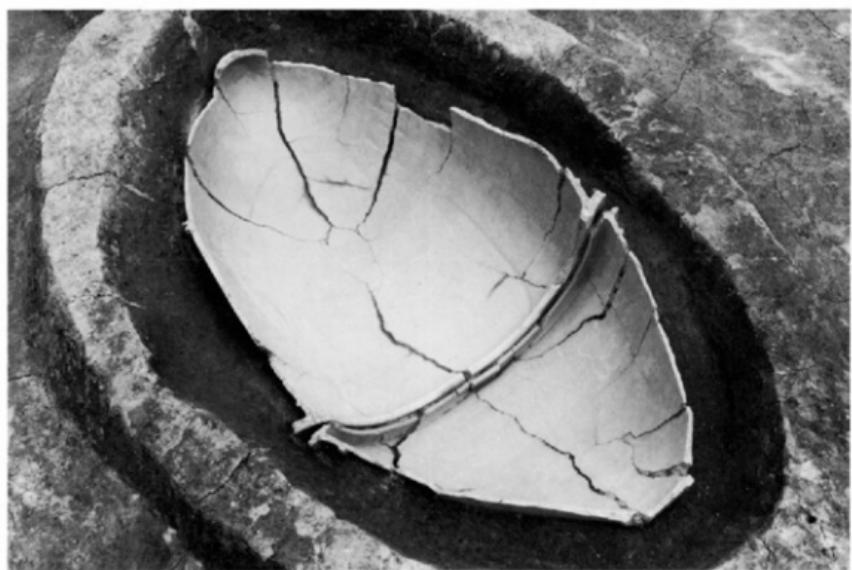
(1) K16号棺墓出土状況（北から）



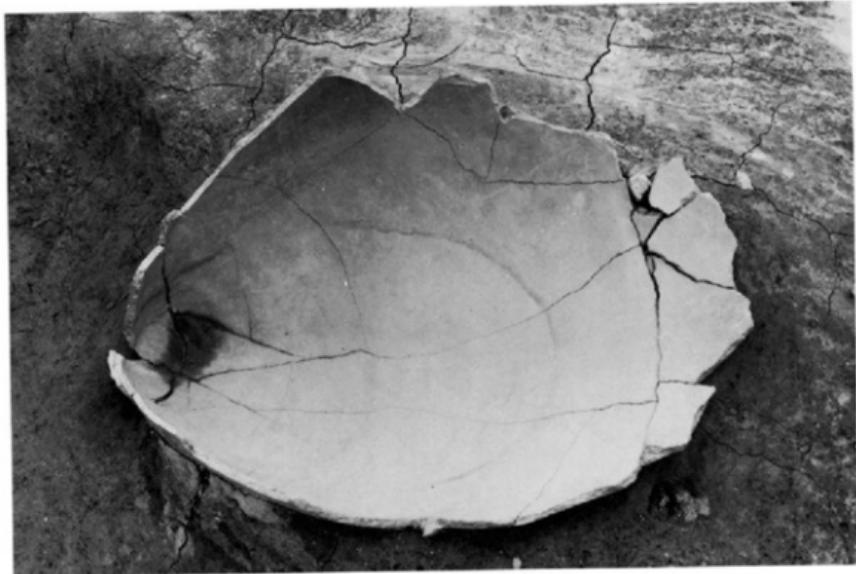
(2) K17号棺墓出土状況（北から）



(1) K18 製棺墓出土状況（北から）



(2) K19 製棺墓出土状況（西から）



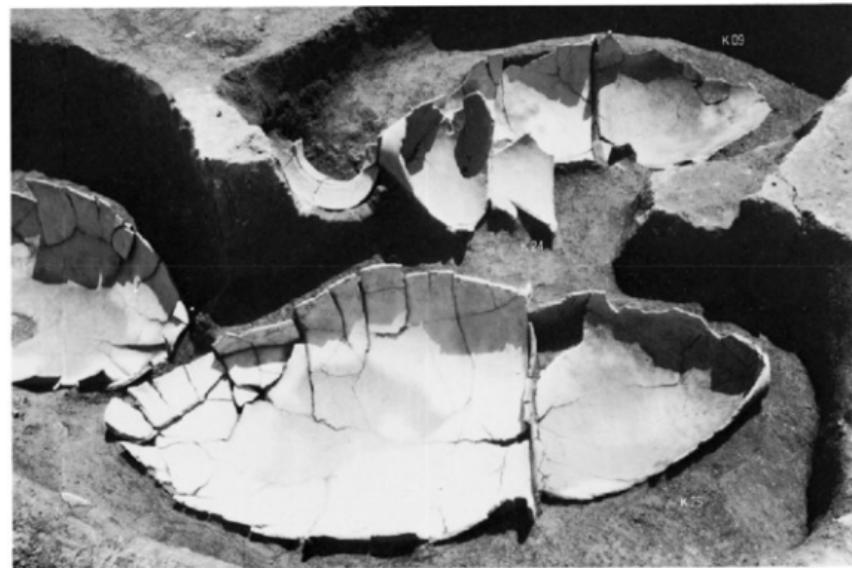
(1) K20斎棺墓出土状況（東から）



(2) K21~23斎棺墓出土状況（北から）



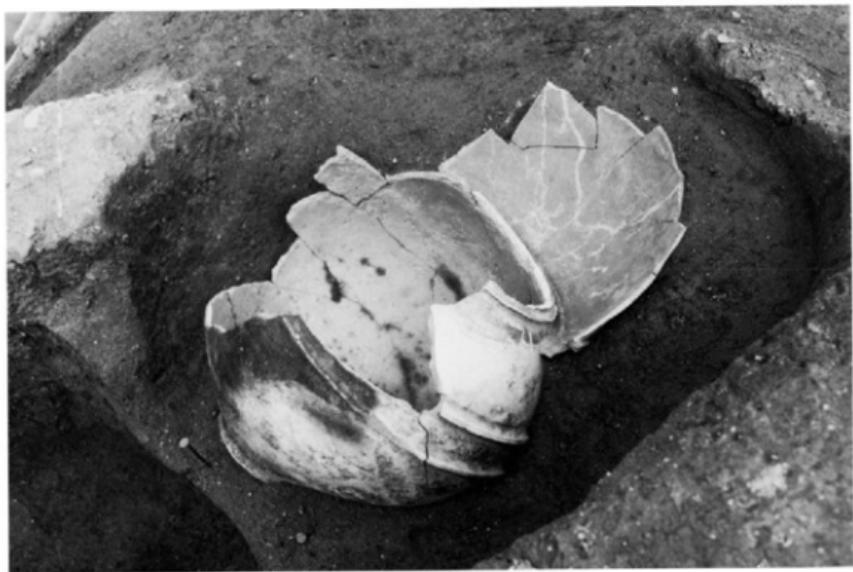
(1) K23號棺墓出土状況（西から）



(2) K09・24・25號棺墓出土状況（北から）



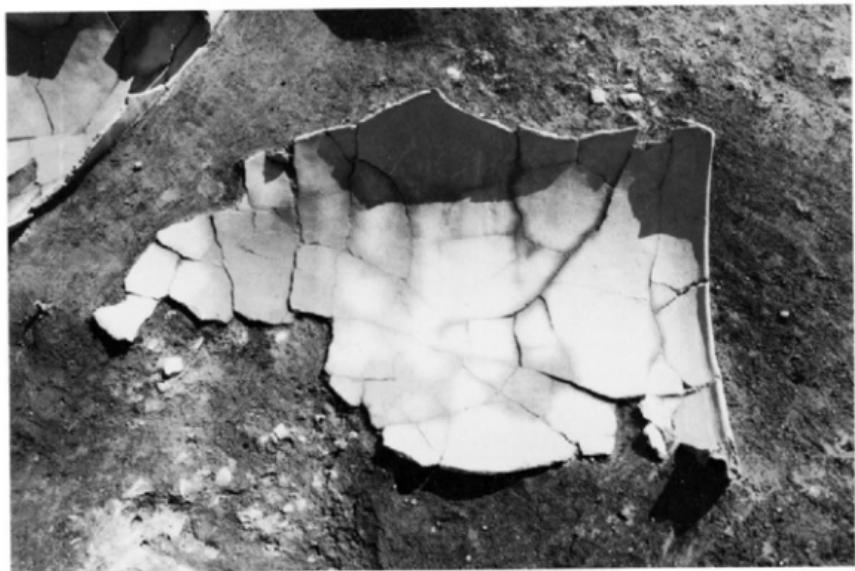
(1) K26号棺墓出土状況（北から）



(2) K27号棺墓出土状況（北から）



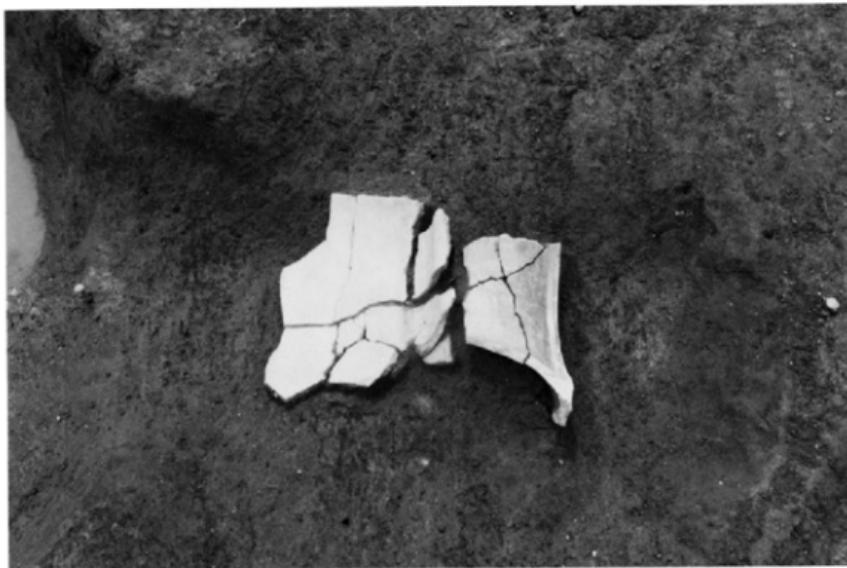
(1) K28腰棺墓出土状況（西から）



(2) K29腰棺墓出土状況（北から）



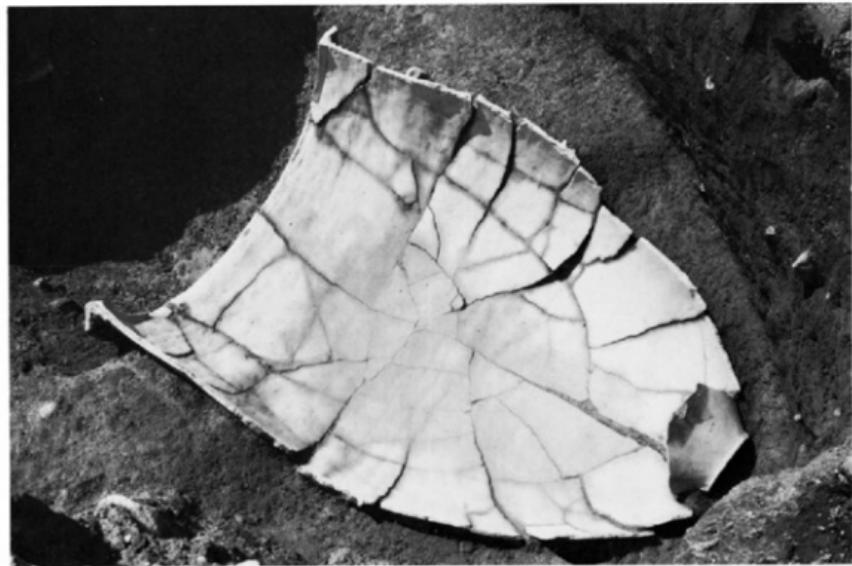
(1) K30腰棺墓出土状況（北から）



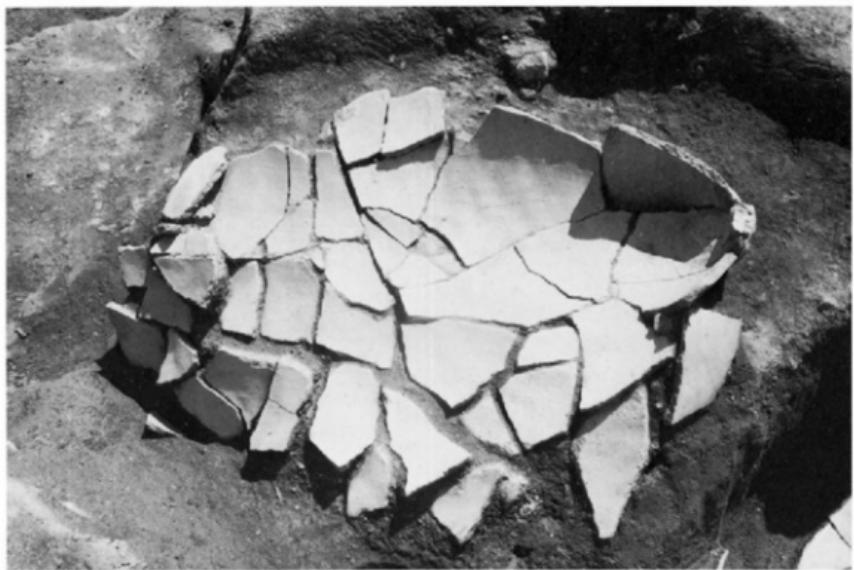
(2) K31腰棺墓出土状況（北から）



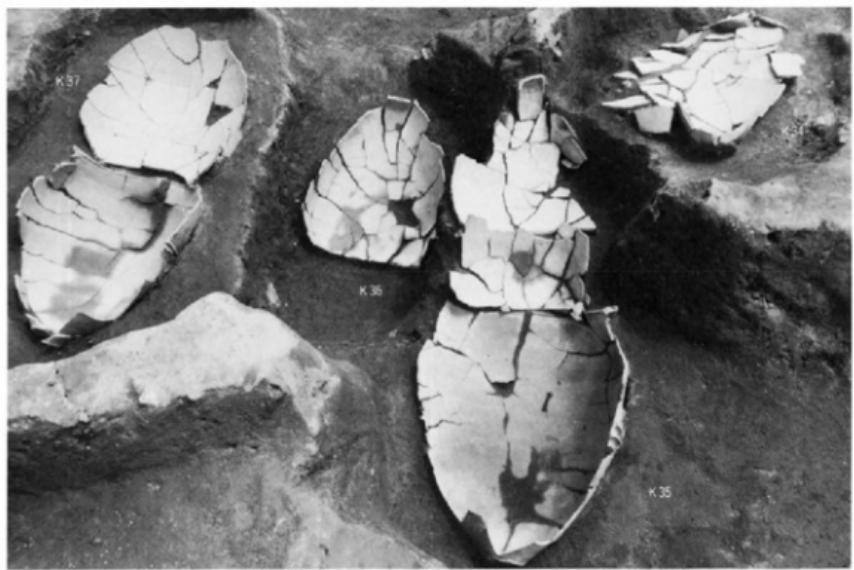
(1) K32 麽棺墓出土状況（南から）



(2) K33 麽棺墓出土状況（東から）



(1) K34斎棺蓋出土状況（東から）



(2) K34~37斎棺蓋出土状況（西から）



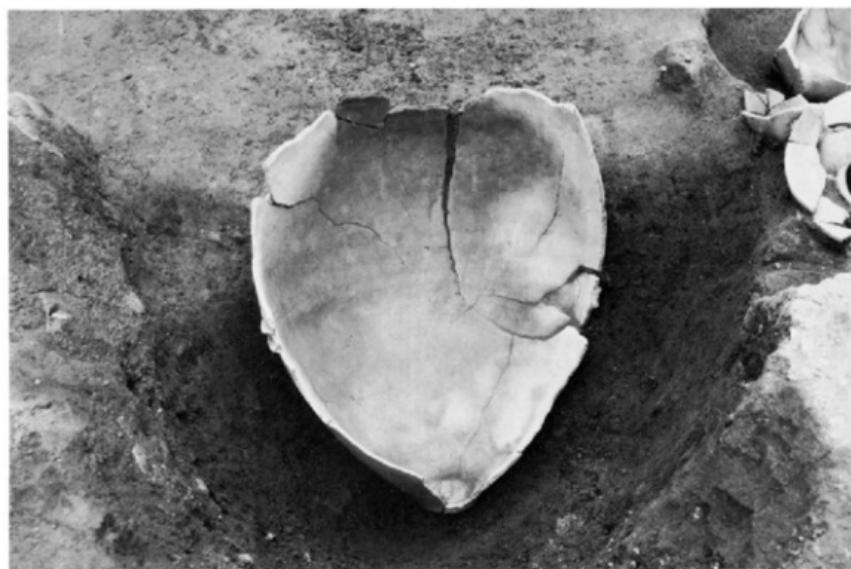
(1) K37 龜棺墓出土状況（西から）



(2) K38 龜棺墓出土状況（北から）



(1) K40・53葬棺墓出土状況（東から）



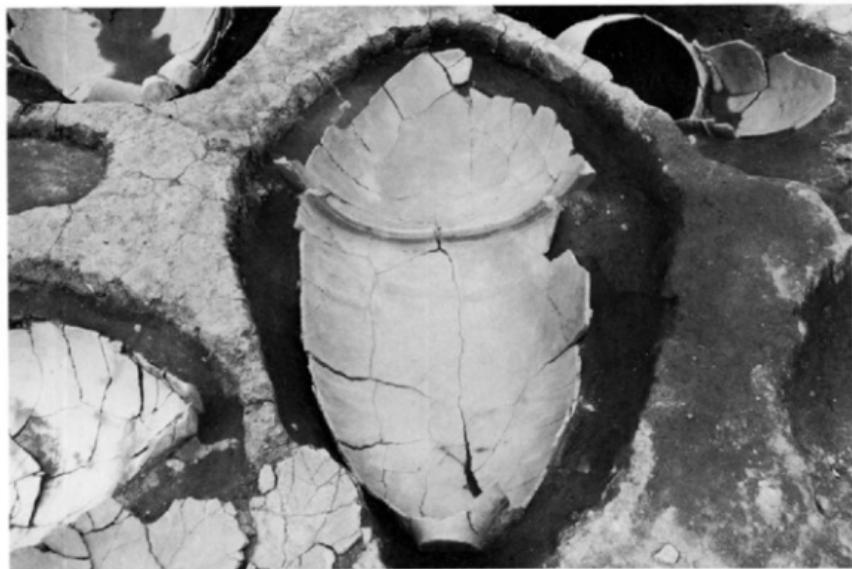
(2) K41葬棺墓出土状況（北から）



(1) K42腰棺墓出土状況（北から）



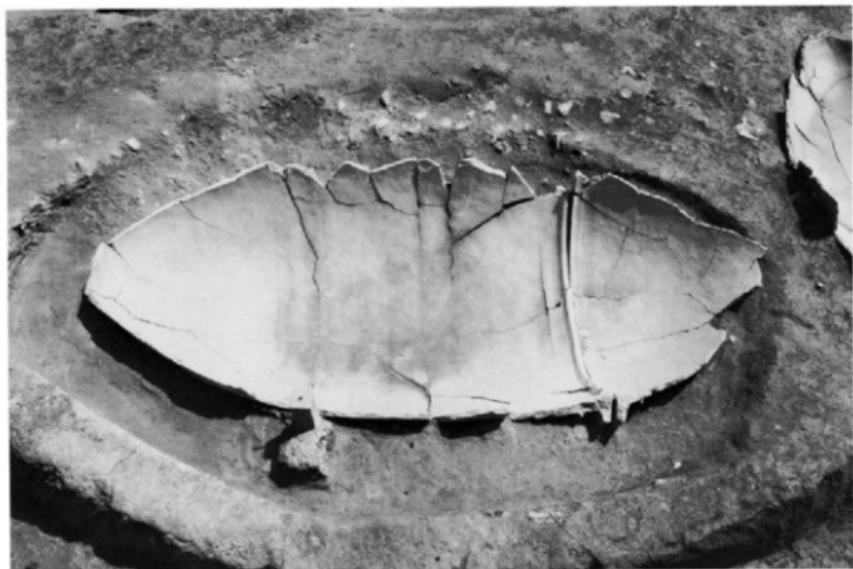
(2) K43腰棺墓出土状況（北から）



(1) K44號棺墓出土状況（西から）



(2) K46號棺墓出土状況（西から）



(1) K47號棺墓出土状況（西から）



(2) K48號棺墓出土状況（北から）



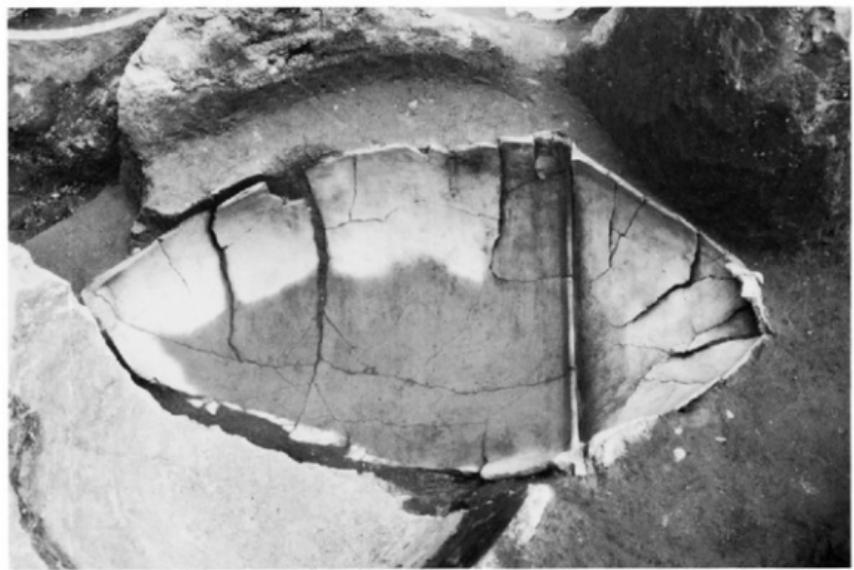
(1) K49・51甕棺墓出土状況（南から）



(2) K50甕棺墓出土状況（北から）



(1) K52漆棺蓋出土状況（北から）



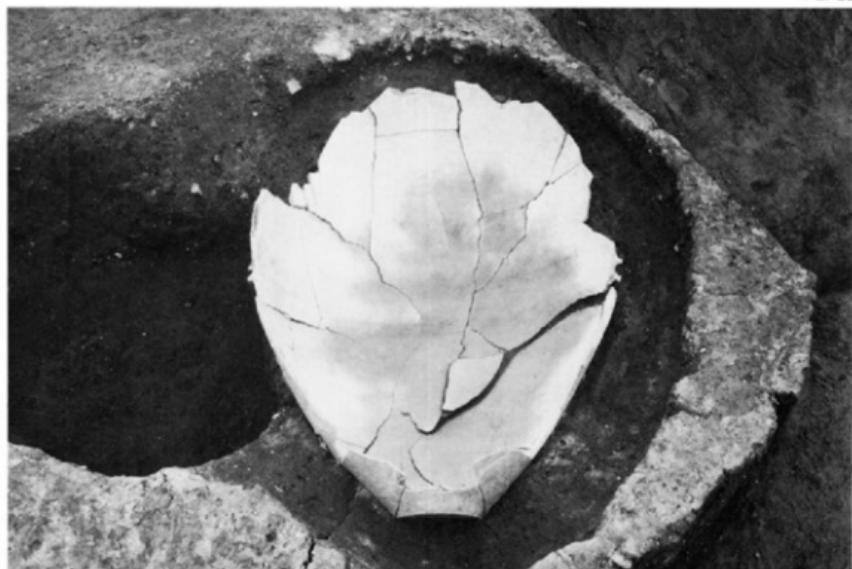
(2) K54漆棺蓋出土状況（北から）



(1) K56腰棺墓出土状況（北から）



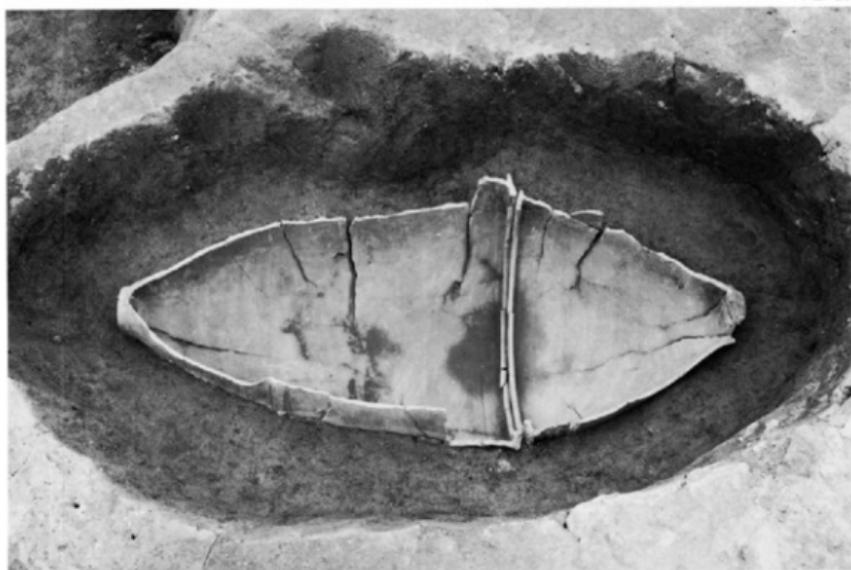
(2) K57腰棺墓出土状況（南から）



(1) K58腰棺墓出土状況（東から）



(2) K59腰棺墓出土状況（東から）



(1) K60號棺墓出土状況（南から）



(2) K61號棺墓出土状況（西から）



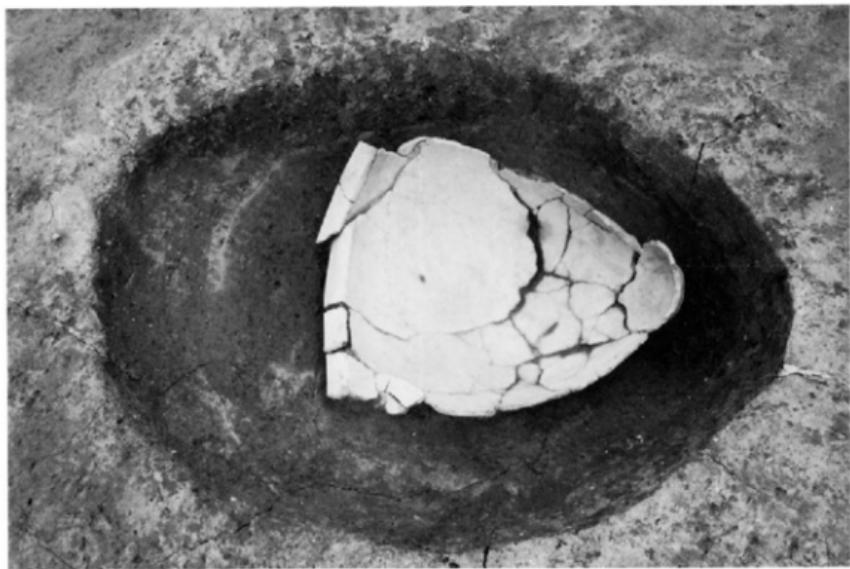
(1) K62窓棺墓出土状況（北から）



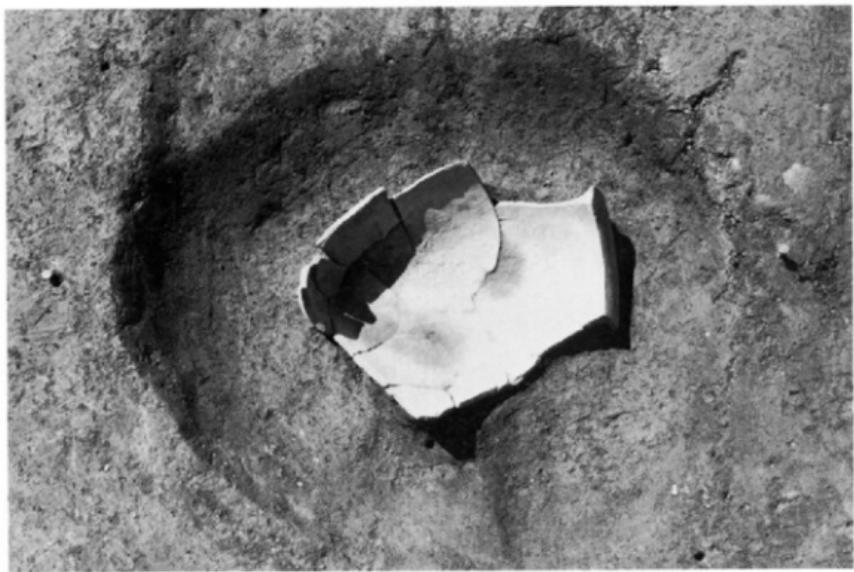
(2) K63窓棺墓出土状況（北から）



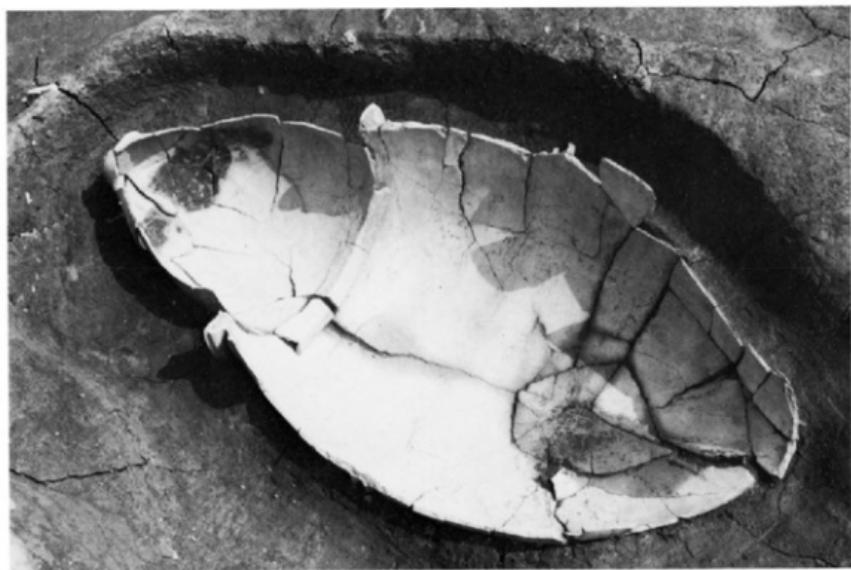
(1) K64號棺墓出土状況（東から）



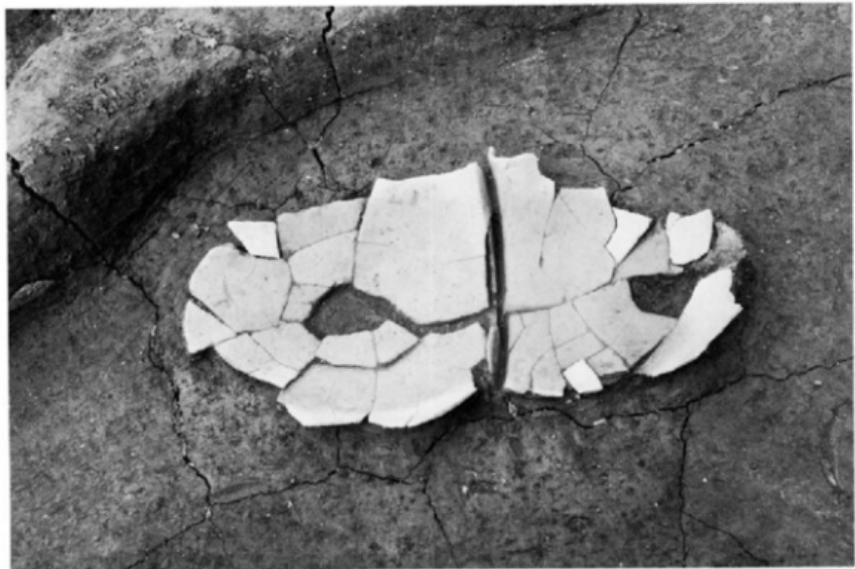
(2) K66號棺墓出土状況（北から）



(1) K67号棺墓出土状況（北から）



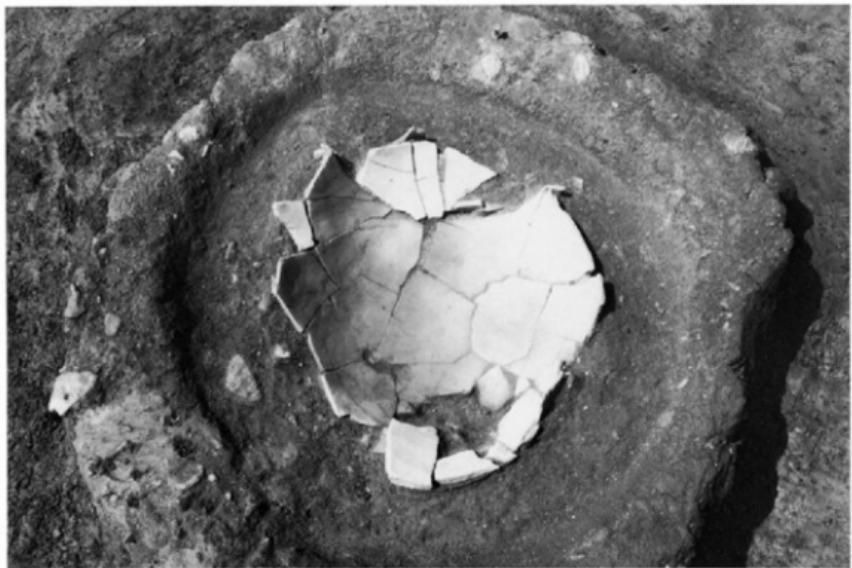
(2) K68号棺墓出土状況（北から）



(1) K69甕棺墓出土状況（南から）



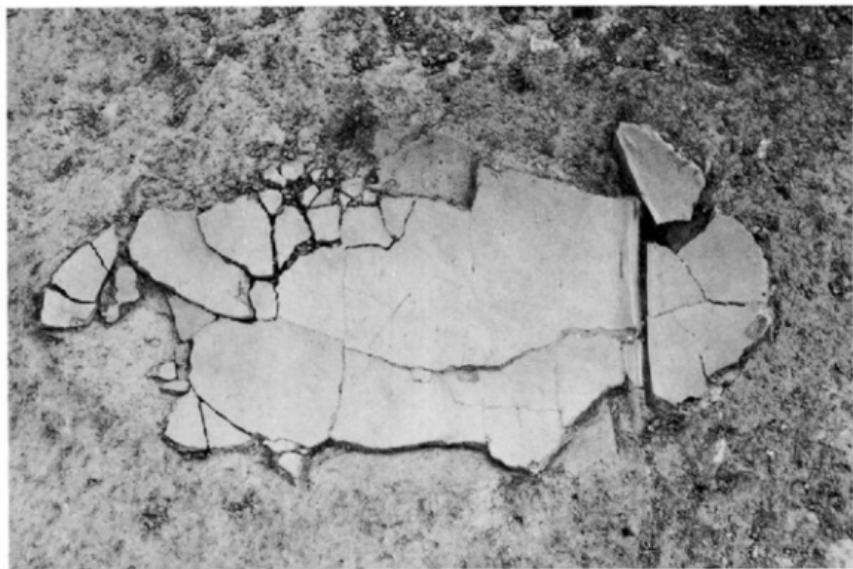
(2) K70甕棺墓出土状況（南から）



(1) K71甕棺墓出土状況（東から）



(2) K73甕棺墓出土状況（北から）



(1) K74號棺蓋出土状況（東から）



(2) K76號棺蓋出土状況（南から）



(1) K77号棺墓出土状況（南から）



(2) 1号祭祀土壙出土状況（西から）



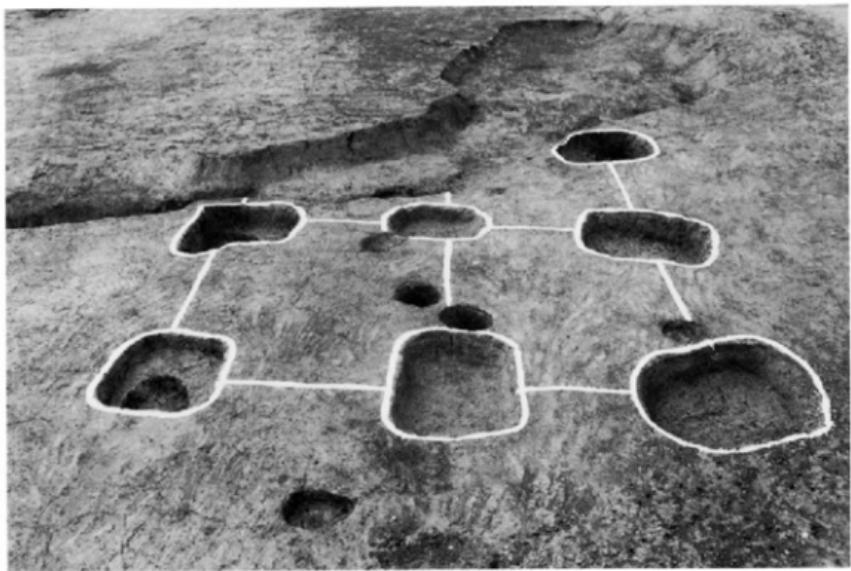
(1) 2号祭祀土壙出土状況（東から）



(2) 3号祭祀土壙出土状況（東から）



(1) SX01石組遺構出土状況（東から）



(2) SB01振立柱建物出土状況（北から）



1 K01上



3 K02上



2 K01下



4 K02下

K01・02號棺



2 K05中



1 K05下



3 K06下

K05 · 06 裝棺



1 K08上



2 K08下



3 K12

K08·12號棺



1 K13上



4 K16上



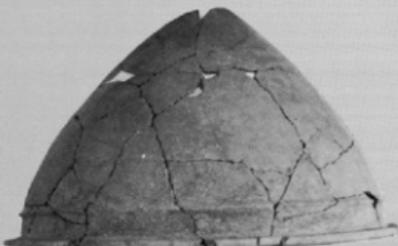
2 K13下



5 K16下



3 K15



6 K17上

K13 · 15 · 16 · 17
族棺



2 K19上

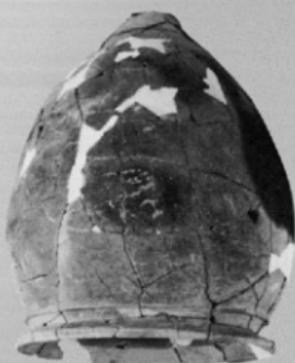
3 K19下

1 K18

K18・19
廣
棺



K 20 + 21 蛋模



1 K23上



3 K25上



2 K23下



4 K25下



1 K25上



3 K28



2 K26下



4 K29



1 K30



3 K33



2 K32



4 K34



1 K35上



2 K35中



1 K36上



3 K35下



2 K36下



1 K37上



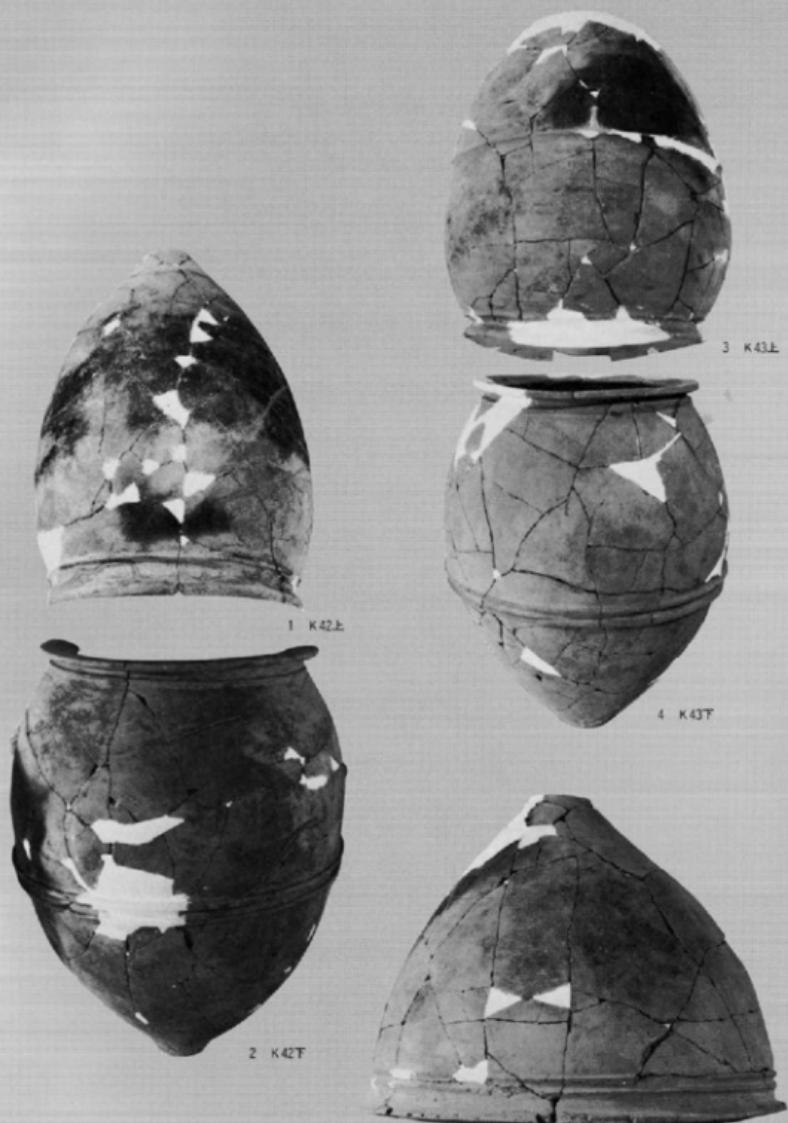
3 K40



2 K37下



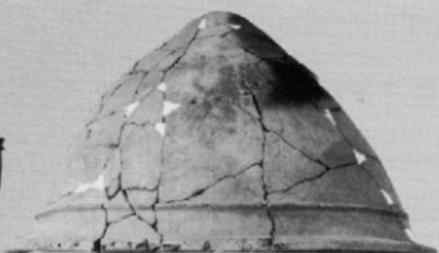
4 K41



K 42・43・44 瓷片



1 K46上



3 K47上



2 K46下



4 K47下

K46・47底棺



1 K48T



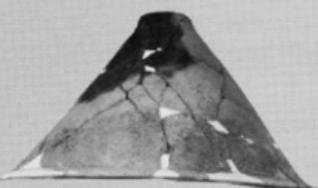
2 K49上



3 K49下



1 K53上



3 K54上



2 K53下



4 K54下



1 K56上



3 K57上



2 K56下



4 K57下

K56 · 57 瓷棺



1 K60上



3 K62上



2 K60下



4 K62下

K60・62號棺



1 K63



2 K64上



3 K64中

4 K64下



1 K68上



3 K70



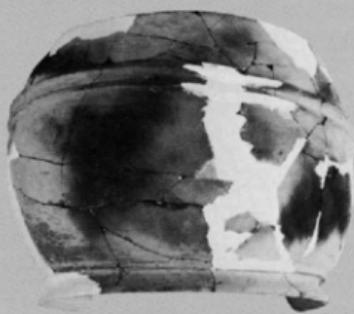
2 K68下



4 K75



1 K73上



2 K73中

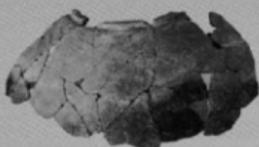


3 K73下

K73甕棺



1 K04



5 K10



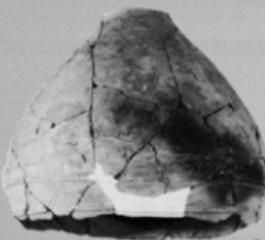
2 K07上



6 K10



3 K07下



7 K11上



4 K09下



8 K11下

K04 · 07 · 09 · 10 · 11 瓷片



K23・24・27・31・33
龕棺



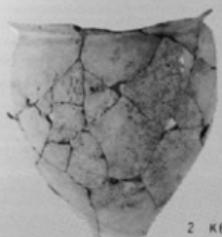
K39·50·52·59
裴棺



1 K61上



5 K67



2 K61下



6 K75



3 K65



7 K77



4 K66

K61 · 65 · 66 · 67 · 75 · 77 蔣棺



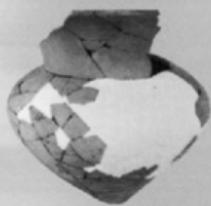
1 1号祭祀土壤



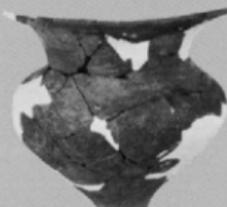
2 1号祭祀土壤



3 1号祭祀土壤



4 2号祭祀土壤



5 2号祭祀土壤



6 2号祭祀土壤



7 3号祭祀土壤



8 3号祭祀土壤



9 3号祭祀土壤

1 ~ 3号祭祀土壤出土土器

吉武遺跡群

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第187集

1988年3月31日

発行：福岡市教育委員会
福岡市中央区大名2丁目10-29

印刷：福岡印刷株式会社
福岡市博多区東郷町1丁目10番15号
